

令和4年度 新しい時代の学びの環境整備先導的開発事業
成果報告書

つながる学校

串本統合小学校



最南端のまちからロケット最先端のまちへ

令和5年3月

串本町

目 次

はじめに

- 1 串本町の学校づくりの目指すもの
 - (1) つながる学校
 - (2) 災害時の小学校の役割
 - (3) まちの自慢になるような学校にしたい
 - (4) 子供が豊かに学べる学校 教職員が豊かに学べる学校
- 2 串本町の教育と課題
 - (1) 串本町の概要
 - 1) 串本町の概要
 - 2) 串本町の教育
 - 3) 計画対象校
 - (2) 現状の課題
 - 1) 地域
 - 2) 学校教育・学校施設
- 3 取り組み方針と計画条件
 - (1) 串本統合小学校づくりの取り組み方針
 - 1) 計画の経緯
 - 2) 計画施設の規模
 - 3) 児童数・学級数
 - 4) 学区域
 - 5) 検討スケジュール
 - 6) 検討体制
 - (2) 新しい時代の学びの環境整備先導的開発事業（串本町）の取り組み方針
 - 1) 先導的開発事業の取り組み方針
 - 2) 先導的開発事業のテーマ設定
 - (3) 計画条件と計画敷地
 - 1) 計画条件
 - 2) 計画敷地
- 4 論点と要望
 - (1) 協議会・分科会での主な論点と要望
 - 1) 協議会における論点と要望
 - 2) 分科会における論点と要望
 - (2) 先進事例視察で得られた論点
 - 1) 視察対象校の概要
 - 2) 視察で得られた着眼点と課題

5 学校づくりの目標 つながる学校と4つの目標

6 基本計画

(1) 基本方針

- 1) 全体計画の方針
- 2) 施設計画の方針

(2) 施設の構成と面積

- 1) 施設構成の考え方
- 2) 面積構成の考え方

(3) 配置計画とゾーニング

(4) 施設計画

1) 新しい時代の学びとそのための施設環境

チーム・コモンズ

ラーニング・コモンズ

STEAM コモンズ

教職員コモンズ

体育コモンズ

教育のDX化

2) 学校時間外を含めた育ち、生涯を通じた学びの拠点となる学校施設

学びを外に広げる・他校と連携する

学校図書館の地域開放

学校施設の多用途利用

学童保育施設の学校施設利用

3) 南海トラフ地震等の災害に備えるレジリエントなまちづくりと核となる学校施設

防災計画上の統合小学校の位置付け

災害フェーズと各機能に求められる役割

防災に関わる学校施設の計画目標

インフラのBCP計画

サンゴ台を中心とした防災機能

避難所を構成する諸室・機能

4) 豊かな海と緑に恵まれた串本町の自然を生かし、町のシンボルとなる学校施設

木の学校づくり

脱炭素社会に向けた持続可能な施設環境

地域の気候・風土に応える建築

7 基本計画図

8 将来に向けた検討課題

おわりに 学校づくりに参加して

はじめに

本計画は、串本小学校と橋杭小学校を統合し、津波浸水想定区域から学区内の高台へ移転する施設整備計画である。

南海トラフ地震がいつ発生してもおかしくないという状況のもと、串本町では、東日本大震災の教訓を踏まえ、公共施設を高台に移転する構想を立て、これまでに、病院、消防署、役場庁舎、こども園等を整備してきた。

今回の学校施設の高台移転もこの構想の一つとして進めている。

1963年に建設された串本小学校校舎と体育館は、町内小中学校で最も古い建物であり、健全度も最も低い状態である。橋杭小学校は、1980年の建設ではあるが、海のすぐ傍らに立地していることから、塩害や津波の危険性という大きな課題を抱えている。

また、町内全ての小学校が学年単学級もしくは複式学級で編制されるなど少子化が顕著であり、串本小学校と橋杭小学校の統合後も、各学年20人程度の小規模校となる。

この度の整備計画においては、高台への移転や小規模校であることを踏まえながら、2021年中教審から提起された「令和の日本型学校教育」の実現を踏まえた学校施設の在り方について検討する必要がある。

特に、学校や地域の伝統及び文化、子どもたちや教職員の実情を十分に勘案し、これからの串本町の教育とそれを実現するための学校施設や施設環境を整備していくことが大切である。

そこで、文部科学省が募集する「新しい時代の学びの環境整備先導的開発事業」に応募し、その助成を受けて検討を進めてきた。学校建築、並びに地域防災の第一人者の指導助言や、串本町の教育に直接関わる指導主事の意見等を受けながら、教職員・保護者・地域の方々・行政関係者・計画者・設計者が協議を重ねた。

本報告書は文部科学省「新しい時代の学びの環境整備先導的開発事業」(串本町)の成果である。

統合小学校を検討するだけに留まらず、これからの串本町の教育の目指すもの、学校と地域の関係性や学校施設の地域利用、災害への備えと学校施設の避難所利用、森や海の自然に囲まれた地域の学校として目指すものなど、多岐にわたるテーマについて議論し、その内容を整備する基本計画としてまとめた。

令和5年3月
串本町教育委員会

1 串本町の学校づくりの目指すもの

(1) つながる学校

DX、多様化、少子化、高齢化、国際化等、社会が大きく変化する中、学校教育には未来に向けた変革が求められている。これに対し、新学習指導要領はアクティブラーニング、主体的・対話的で深い学びを目標及び方法として示し、また、新型コロナ対応やGIGAスクールを背景に、対面指導と遠隔・オンライン学習の各々の特長を生かすことで個別最適な学びと協働的な学びを展開することを「令和の時代の日本型学校教育」とする中央教育審議会答申が出された(令和3年1月)。これを受け、その実現には施設環境の変革が不可欠という共通認識の下、「新しい時代の学びを実現する学校施設の在り方」と題する最終報告が文部科学省でまとめられた(令和4年3月)。その答はどこかにあるのではない。未来の教育、学校づくりの目標を共有した上で、学校ごと、地域ごとに課題や条件を整理し、固定観念に囚われることなく個別の姿を見出す必要がある。本計画においては、新しい時代の学び、生涯を通じた学び、レジリエントなまちづくり、豊かな自然を生かし、新しい時代のシンボルとなる学校という、最初に掲げた4つの課題について検討が進められた。具体的には、小規模校での豊かな学び、教員が力量を高め合う場、子ども園や学童保育と連携した子供の成長の場、南海トラフ地震に対する避難所、町内の学校間連携、少子化や高齢化に対する地域づくり、公共施設の再編等が固有の課題として議論された。

施設の完成は学校としてはゴールではなくスタートである。当事者である教職員、PTA、地域住民、行政等の関係者が参画し、専門家や設計者の知見を得ながら、夢や意見を出し合う計画プロセスが不可欠である。それが完成後、主体的に学校運営や環境構成に取組み、創造的に変化や発展に対応していく体制づくりにつながる。本計画においては、その場として学校づくり協議会と同分科会という2つの場が用意された。前者は当該校の校長・園長、保護者・地域代表、行政からなり、町全体の視野から学校の位置づけ、期待される役割等について議論が交わされた。後者は町内各校から教員、養護教諭、事務職員の代表が集まり、指導主事を座長として、教室・特別支援教室・特別教室・図書室・屋外空間等の学習・生活空間、教職員室等について“コモンズ”という概念をもとに柔軟な意見交換がなされた。それぞれの会での意見は専門家や設計者により共有が図られ、踏み込んだ検討が行われた。

議論が進み、目指す学校づくりの姿が見え始めたところで、皆の思いを表すタイトルを報告書に付けることになったところ、表題にある「つながる学校」という案が出され、即座に委員全員が納得した。この言葉に長時間議論してきた内容が集約されていたからである。

学びの中で考えを出し合い、認め合い、喜び合い、ほめ合い、子供同士がつながる。町内の学校、学校と地域、町を超え全国、世界、さらに宇宙にまでつながる。教員同士、子供の育ちに関わる大人たちが“チーム学校”としてつながる。学校の立つサンゴ台や学区の人々、さらには全町民が、中高生も高齢者も自分の場所として自由に過ごし、そこに出会いが生まれ、学校、地域を支える力がつながる。災害時には高速道路を通じて町外とつながる。町の誇る自然環境を生かし、地域材の使用により環境自体が教材となり、環境への配慮が未来につながる。空間、ICT、設備、家具まで総合し、様々な“つながる”を生み出す学校施設づくりが今から始まるころだ。

長澤 悟 (学校づくり協議会会長/東洋大学名誉教授)

（２）災害時の小学校の役割

串本町は震源域に近い場所に立地しており津波到達時間が早く、安全な場所に避難するために十分な時間を確保することができないという問題を抱えている。そのため災害時の対応に重要な役割を果たす公共施設の高台移転を計画的に進めてきており病院、消防署、市役所といった行政施設の高台移転が完了しており、さらに教育施設の移転も進められている。

今回検討される小学校は、災害時には住民の避難場所・避難所として利用される施設であり、児童の災害時の安全確保と同時に、住民の災害後の避難施設としても重要な役割を担う。避難場所・避難所と併記したことに意味があり、日本語では混同されがちであるが、それぞれ命を守る避難の場所（「避難場所」Evacuation Center）、生活を守るための避難、命をつなぐ場所（「避難所」Shelter）と異なった機能を担っている。津波が来ない高台に避難することで命を守ることはできる。今回整備される小学校では、特に「命をつなぐ」ための「避難所」としての役割が重要になる。大規模災害時には避難所の運営は、地域住民が担うことが有効かつ必要なこととなる。そのことで行政職員は、その後の復旧・復興もふくめた災害対応を行うことが可能になる。住民が円滑に避難所運営を行うことを可能にするためには日常時からその施設を利用していることが重要である。今回の小学校の計画は日常的に地域の人が利用するものとなっており、また災害時の利用について時系列で災害時の利用イメージの検討を行っているが、今後、避難所運営訓練等を通じて習熟・見直しを行っていく必要がある。

災害時に小学校は避難場所・避難所として利用されるのであるが、学校の本来の機能は子供たちに教育を行うことである。学校の再開が遅れると、子供を持つ家庭の地域からの転出にもつながる。学校の業務継続は重要であり、できる限り早く学校での教育を再開することが重要である。そのため学校機能を再開に必要な場所は、避難の機能とは分けておく必要があり、災害時の利用について避難所と学校再開のために必要な場所という観点からの検討を行っている。

今回の小学校の計画は、災害時の利用を事前から検討しておくという大変先進的な取り組みもふまえた計画となっている。本検討の成果にもとづき素晴らしい小学校が建設されること、完成後は地域の人々の学校の利用、さらには災害時の学校利用の訓練・見直しが行われていくことが望まれる。

牧 紀男（串本町防災アドバイザー/京都大学防災研究所教授）

(3)「まちの自慢になるような学校にしたい」

「まちの自慢になるような学校にしたい」

学校づくりの会議に出席していた際に聞いた言葉である。

子供だけでなく、大人になっても、幼いころ学んだ校舎にはたくさんの思い出が詰まっている。

そして、学校はずっと昔から、新しい文化の発信の場であり、地域コミュニティの中心であった。

そのため、統廃合や移転などさまざまな要因で、以前あった場所から学校が無くなると、とても寂しい気持ちになる。

しかし、大切なことは、私たち大人が昔経験した素晴らしい思い出をさせてあげることである。それは昔と同じ経験をさせるだけでなく、今の子供たちが、安全で楽しく学び、将来、このまちで学んだことを誇りに感じる事が大切である。

新しい学校は、まずは子供たちのためのものであってほしい。

子供たちが毎日、通いたくなる学校であってほしい。

子供たちが、わくわくするような学びができる学習空間であってほしい。

友達と協動的な学びをできる活動場所がほしい。

図書が好きな子、運動が好きな子、絵を描くのが好きな子、音楽が好きな子、書道が好きな子、工作が好きな子、植物が好きな子、果物が好きな子、魚が好きな子、海が好きな子、森が好きな子、ロケットが好きな子などなど、一人一人違った興味を追求できる空間がほしい。

そして、新しい学校は、保護者だけでなく、地域のすべての人々が集い、我が地域にあるコミュニティとして愛着を持ち、自分も隣人も学校も一緒につながって伸びていけるものであってほしい。

(4) 子供が豊かに学べる学校 教職員が豊かに学べる学校

若手教員も中堅教員も年長教員も限られた教室空間、教室環境の中で、教育への熱い思いと工夫した指導方法を用いながら授業実践を行っている。授業をされた先生方からは、「どの場所でも ICT 端末が活用できればもっと学びが広がるのに」「調べ学習やグループ学習がゆったりとできる空間があれば」「子供たちが成果を発表する素敵な場が欲しい」などという声が聞こえてくる。目指すべき教育の姿が「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」として提起されたいま、子供たちの豊かな教育活動や教員の思いをかなえるために、いまある学校施設や教育環境をどのように整備し機能させるかが、学校に求められる重要な課題と考える。

さて、学校は、子供・教職員・保護者・地域の方々が四輪となって運営されている。中でも教職員が、その中心的役割を担っていることは誰しものが認めることだと思う。教職員には、教育目標の実現のために授業づくりや教育技術の向上と、より多様化・複雑化しつつある教育問題への高度な対応が求められている。また、加速度的に増加している若手教員の育成も喫緊の課題である。決して一人の力だけで実現したり解決したりするものではなく、チーム学校として教職員一人一人の持つ知識と情報を共有した取組が必要となる。

そして、それを具現化するためには、主に二つの「場」が必要だと考える。

一つは、学校運営を意図的・計画的に進める上で必要な時間で設定された場である。

学校運営全般の企画、校内研修・特別支援教育・学校保健安全、授業づくり、児童理解などに関して協議する会議や委員会、部会などがそれに当たる。学校運営を円滑に進め、教職員の職能を向上させる上で欠かすことのできない場である。

あと一つは、時間や条件に制約されない、日常的に教職員が交流できる場である。

ところが、いまの学校現場の様子はどうか。時間で設定された場での教職員の交流はあるものの、日常的な教職員の交流が思うように図られているのだろうか。学校規模の大きさや業務の多忙化にもよるだろうが、以前に比べ単独で動く、或いは動かざるを得ない教職員が増えていないのだろうか。教職員は、子供の成長を見取りつつ、学校や同僚に支えられながら成長していく。いまこそ学校には、日常的に教職員が交流できる場が必要だと考える。

例えば、そこに行けば、同僚がいて、教具や教育関連の書籍資料が手の届く所にあり、協同で教材研究ができるテーブルなどが設えられ、寛げるスペースも確保されている。「授業が思うようにできない」「学級づくりがうまくいかない」と悩んでいる若手教員も諸先輩から助言や支援を得ながらスキルアップすることができる。かたや中堅教員、年長教員は、若手教員のパワーに刺激を受け、学び直しがはじまる。教育技術の伝授が機能し、教職員の結集した知恵と情報から新しい教育の具体的な姿が創造されていく。そして、同僚性が育まれるとともに互恵的な関係が築かれ、その場に誘う空気が流れはじめる。

子供たちが豊かに学べる学校であるとともに、教職員も豊かに学べる学校。これからの学校づくりに期待したいことである。

坂本 善光（学校づくり分科会会長/串本町指導主事）

2 串本町の教育と課題

(1) 串本町の概要

1) 串本町の概要

串本町は紀伊山地を背に潮岬が太平洋に突き出した本州最南端の町である。八丈島とほぼ同緯度に位置し、海岸線はこの地方の特色であるリアス式海岸で、奇岩・怪石の自然美に恵まれ、吉野熊野国立公園の指定を受けている。また、当町の海域は世界最北のサンゴ礁群の生域として知られており、2005年にラムサール条約に登録された。

黒潮の恵みを受けて、年間平均気温17°C前後と温暖な気候であり、冬季でも平均気温6~8°Cと雪が降ることは少ない。総面積は約135k㎡で、その80%を山林が占めるが、地形は比較的緩やかである。町の東部では水量豊かな古座川が延々60kmを南に流れて太平洋に注ぎこんでいる。また1.8kmの沖合には、和歌山県下最大の島、紀伊大島(面積9.93k㎡)が浮かんでおり、1999年9月のくしもと大橋開通により本土とつながった。

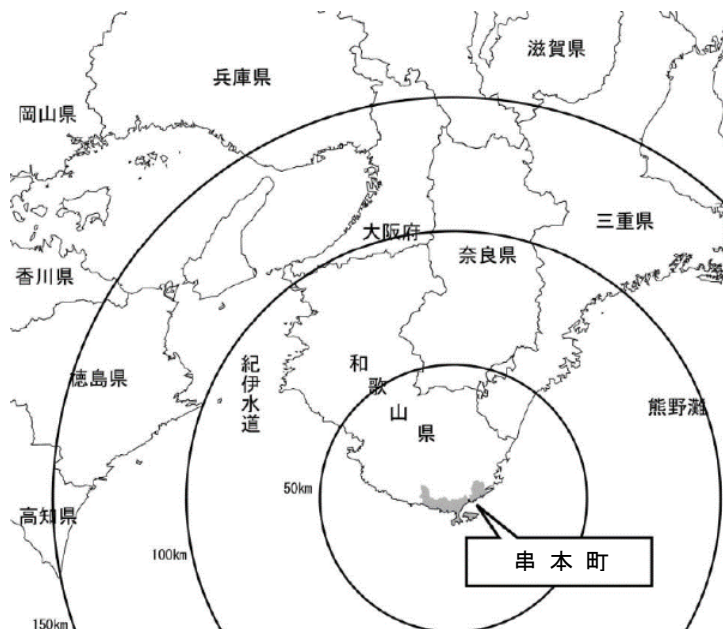
JR紀勢本線で大阪(特急で3時間半)、名古屋(特急で4時間半)と接続し、国道42号線が紀伊半島の海岸沿いに走る。2025年に紀勢自動車道が串本まで延伸し、最終的には大阪から名古屋まで高速道路で接続される予定である(高速道路の開通で大阪まで約2時間半程度になる)。

1871年(明治4年)に和歌山県となり、1897年に串本町、1901年に古座町が町制施行、串本町は1924年に富二橋村と、1955年には有田村、潮岬村、田並村、和深村と、1958年には大島村と合併した。古座町は1956年に西向町、田原村と合併した。そして、串本町と古座町は、2005年4月1日に合併し、現在の串本町が誕生した。

現在の串本町に相当する地域の人口は1950年頃に3.5万人であったが、2020年の国勢調査では1.5万人を割り込んでいる。15歳以下人口は8.3%と和歌山県内で7番目(30市町村)に低く、高齢化率は46.7%(県全体では33.4%)と和歌山県内で4番目に高い。

現在の串本町に相当する地域の人口は1950年頃に3.5万人であったが、2020年の国勢調査では1.5万人を割り込んでいる。15歳以下人口は8.3%と和歌山県内で7番目(30市町村)に低く、高齢化率は46.7%(県全体では33.4%)と和歌山県内で4番目に高い。

主な産業は漁業・水産業で、近年は関西地域随一のカツオ漁基地となっている。また、本マグロや真鯛の養殖など捕る漁業から育てる漁業への転換、観光資源を活かしたホテルの誘致、町内の田原地区に民間初のロケット発射場が建設されるなど、新たな取り組みも進んでいる。



和歌山県東牟婁郡串本町

(北緯 33.29、東経 135.46)

串本町・新町建設計画から転載

2) 串本町の教育

①串本町の学校

町内の学校は、町立小学校 9 校、町立中学校 4 校、町立こども園 2 園があり、他に私立こども園が 1 園である。高等学校は県立串本古座高等学校が唯一の高校であり、高等学校段階では約 3 割の生徒が町外に通学している。1998 年以降、適正規模・適正配置の観点から以下の統廃合が進められた。

- 1998 年 須江小学校及び檜野小学校を大島小学校に統合
- 2004 年 赤瀬小学校を和深小学校に統合
- 2005 年 津荷小学校を古座小学校に統合
- 2006 年 和深中学校、有田中学校、田並中学校を串本西中学校として統合
- 2008 年 和深小学校、有田小学校、田並小学校を串本西小学校として統合
- 2011 年 養春小学校を西向小学校に統合
- 2014 年 錦富小学校を串本小学校に統合
- 2019 年 大島中学校を串本中学校に統合
- 2026 年 串本小学校と橋杭小学校を統合（本計画）

現在の小学校は全て単学級又は複式学級規模であり、中学校も含めて急速に少子化、小規模化が進行している。



各小学校の位置と統合小学校との距離関係

各校舎は2,000㎡前後の面積を有するが、2階建て以上で、平屋建ての校舎は保有していない。これまでの統廃合において、大島小学校を除いて大規模な施設整備は伴っておらず、既存校舎への統廃合である。

串本町の小中学校施設一覧

施設名	建物用途	構造	階数	延べ床面積(㎡)	建築年度	築年数
串本西小学校	校舎	RC	2	1,982	1993	29
	体育館	S	1	689	1978	44
串本小学校	校舎	RC	3	1,843	1963	59
	校舎	RC	2	1,273	1992	30
	体育館	RC	1	680	1963	59
橋杭小学校	校舎	RC	3	1,918	1980	42
	体育館	RC	1	690	1987	35
潮岬小学校	校舎	W	2	2,192	2002	20
	体育館	RC	1	702	1989	33
出雲小学校	校舎	RC	2	1,540	1985	37
田原小学校	校舎	RC	2	1,367	1972	50
	体育館	RC	1	465	1973	49
古座小学校	校舎	RC	3	1,756	1967	55
	体育館	RC	3	1,147	1977	45
西向小学校	校舎	RC	3	1,678	1989	33
	体育館	RC	1	600	1990	32
大島小学校	校舎	RC	2	1,892	1998	24
	体育館	RC	1	700	1998	24
串本西中学校	校舎	RC	3	1,699	1997	25
	体育館	S	1	689	1978	44
串本中学校	校舎	S	4	1,888	1979	43
	校舎	RC	3	1,501	1991	31
	体育館	RC	1	1,138	1999	23
潮岬中学校	校舎	RC	2	2,050	2006	16
	体育館	RC	1	661	1966	56
西向中学校	校舎	RC	4	2,483	1979	43
	体育館	RC	2	818	1981	41
学校給食センター		S	1	971	2015	7

※出雲小学校は体育館なし

②串本町の教育方針

第2次串本町長期総合計画の中に「教育」に関する基本目標を定め、その目標を達成するために下記の教育大綱を策定している。本計画においては、串本町第2次教育大綱を学校づくりの大方針として位置付ける。

1 教育大綱の基本理念

第2次串本町長期総合計画の基本目標Ⅲ「郷土愛あふれる教育のまちづくり」を本大綱の基本理念とします。

2 基本理念に基づく目標

基本理念達成のための方針を次の通り定めます。

- I 学校教育の充実
- II 生涯教育・スポーツの推進
- III 青少年健全育成の推進
- IV 歴史・文化・芸術の振興

3 各目標の現状と課題

I 学校教育の充実

- 園児数・児童生徒数は減少する中、人間として成長する大事な時期の教育環境の確保と将来を展望した体制の整備が重要となっています
- トルコのエルトゥールル号遭難にまつわる史実、ビキニ環礁水爆実験で被ばくした第五福竜丸建造の地としての歴史、日本遺産に認定された熊野灘の捕鯨文化、南紀熊野ジオパークや吉野熊野国立公園に登録された自然美、ラムサール条約登録湿地として認定されたサンゴ群落、世界遺産に認定された熊野古道大辺路など、誇るべき郷土史や郷土文化、郷土資源や自然環境についての「ふるさと教育」を推進し、郷土に誇りを持つ人材の育成を進める必要があります。
- 平成27年度に完成した串本町学校給食センターと連携し、各学校の食育指導を充実させていく必要があります。

II 生涯教育・スポーツの推進

- 生きがいを実感し、充実した生活を送る上で、継続的な生涯学習・趣味活動に取り組むことは大切です。また、高齢化が進む中で、「学習の場」「憩いの場」「集いの場」「創造の場」の重要度はますます増してくると考えられ、絆づくり・地域づくりにつながる取り組みも求められています。
- 公民館や図書館などの施設面の整備を進めるとともに、関係職員の研修参加を通じた資質向上を図りながら、多種・多様化する町民の学習要求に応えていく必要があります。
- 地域の実情にあった自主的・自発的スポーツグループを育成支援するとともに、各種スポーツ大会運営のスタッフや指導者を育成していく必要があります。
- スポーツ人口の拡大や生涯スポーツを普及するための広報活動・啓発活動を行い、また様々

なスポーツ情報の収集・提供を図り、町民のスポーツに対する関心を高めることが必要です。

- 串本町総合運動公園「サン・ナンタンランド」を有効に活用し、スポーツ大会やスポーツ合宿の誘致を行い、スポーツ交流を促進する必要があります。

III 青少年健全育成の推進

- 青少年の問題行動や青少年を巻き込んだ犯罪などの問題の背景として、家庭や地域の教育力の低下が指摘されています。
- 地域の間関係が希薄化している中で、青少年が健やかに育つためには、家庭・学校、地域を加えた「地域全体の力」を結集し、地域全体で青少年の育成を支えていくことが必要です。
- 学校・家庭・地域が一体となって、子どもの豊かな育ちや学びを支え、人と人のつながりを築くため、「田植え・稲刈り」「グランドゴルフ体験」「絵本読み聞かせ」「河内祭学習会」など地域の方々の協力を得ながら「串本町コミュニティスクール」を推進しています。
- 子供たちが持つ可能性を伸ばし、視野や知識を広げていくために、体験や交流の機会を充実させていくため、地域の人々との交流に加えて、地域外の人々との交流や国際的な交流などを進めていくことも大切です。

IV 歴史・文化・芸術の振興

- エルトゥール号遭難にまつわる史実の映画化（「海難 1890」）、熊野古道大辺路の世界遺産追加登録、熊野灘の捕鯨文化「鯨とともに生きる」の日本遺産登録、南紀熊野ジオパークの世界ジオパーク認定への動きなど、本町の郷土史・郷土資源に対する関心は高まっています。
- 郷土史や郷土文化、郷土資源や自然環境について適切な保護活動を促進するとともに、それらの町民理解を深めてもらうために、啓発活動や講座、展示などを進めていく必要があります。

4 各目標の基本方針と事業内容

I 学校教育の充実

- 個人を重んじるとともに、自他の向上に尽くす人間を育てます。
- 心のふれあいを深め、豊かな自然と関わりながら、人間愛に満ちた豊かな情操を育てます。
- 確かな学力を身に付け、自ら考え、豊かに表現できる主体的創造的な人間を育てます。
- 人口減少・少子高齢化傾向の中で、教育水準及び教育環境の維持向上を図るため、本町の実情にあった適正規模の学校づくりを推進します。
- 本町が誇るべき郷土史や郷土文化、郷土資源や自然環境などの教育の充実を図り、郷土愛あふれる人材育成につながる特色ある教育を進めます。
- 多様な価値観を許容し、協力・協働しながら課題を解決する力を育成するため、「自ら考え解決する力」や「コミュニケーション能力」などの向上につながる教育を進めます。
- 安心・安全な学校給食の提供及び学校給食を通じて食育の推進を図ります。
- 教職員の資質向上を図るため、研修会等への参加機会を積極的に拡充します。

II 生涯教育・スポーツの推進

- 「いつでも」「どこでも」「だれでも」学習することができ、その成果を生かすことのできる

生涯学習環境づくりに努めます。

- 学習や趣味活動による自己実現を支援するとともに、健康で豊かなところで充実した生活、絆づくり・地域づくりにつながるような生涯学習を推進します。
- 高齢化が進む中で、スポーツを通じて健康で豊かなところで充実した生活、地域の活性化、地域コミュニティの拡がる場を提供します。

III 青少年健全育成の推進

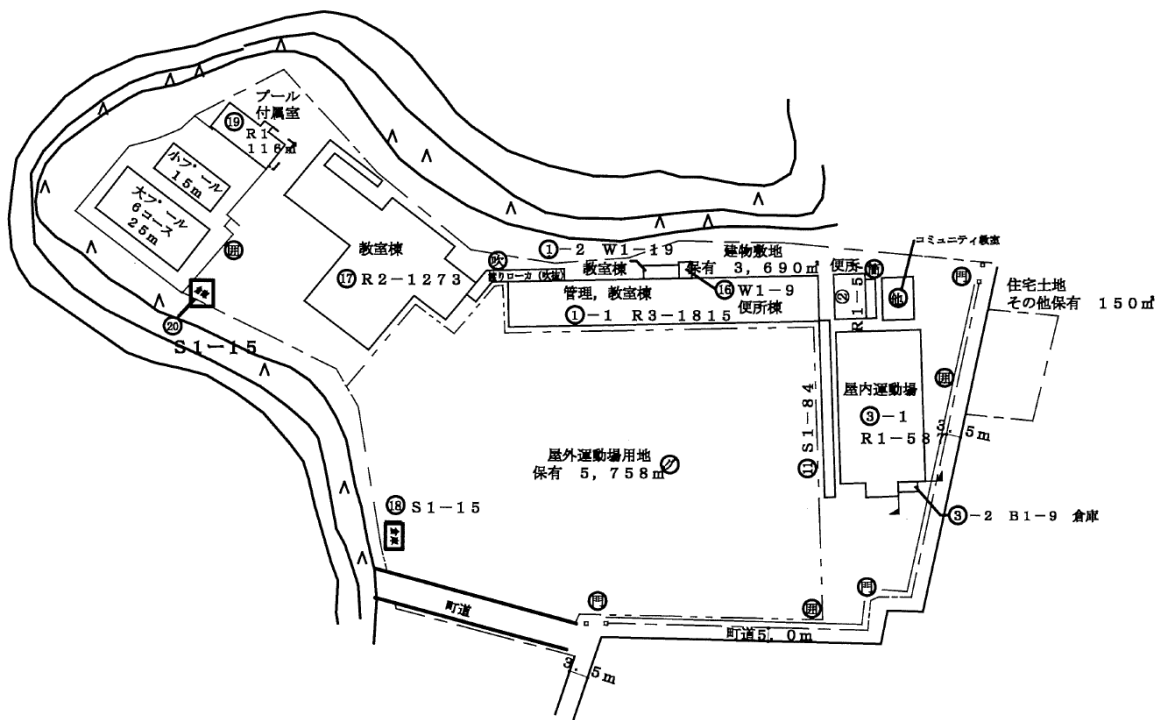
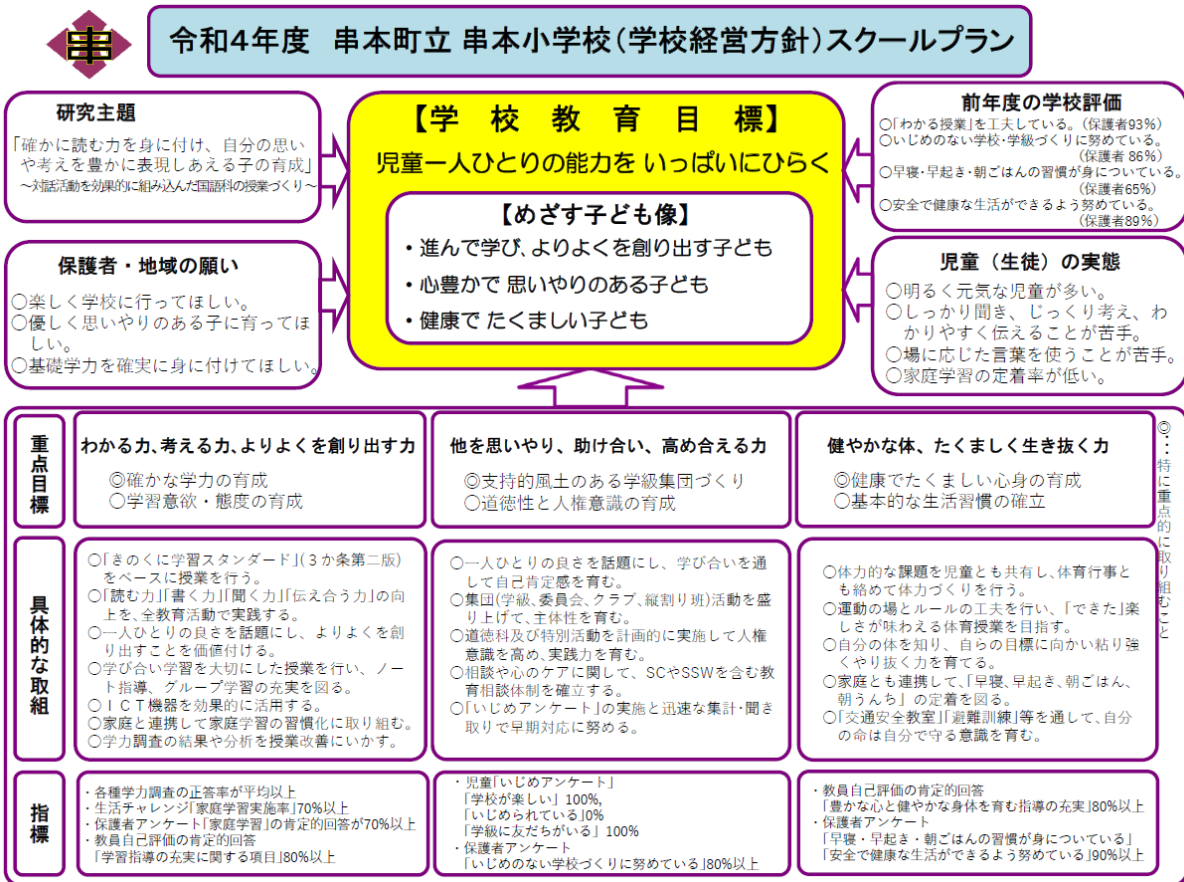
- 善悪の判断力や物を大切に作る心など道徳性を養い、生活において生きて働く実践力を育てます。
- 生命を尊重し、心身ともにたくましく生き抜く人間を育てます。
- 学校・家庭・地域が一体となって子どもの豊かな育ちや学びを支えるとともに、青少年の健全育成をめざし、地域ぐるみで「共育」活動を促進します。
- 子どもたちの幅広い視野や知識などを習得する手助けとして、体験・交流機会の提供に積極的に取り組みます。

IV 歴史・文化・芸術の振興

- 郷土の文化と伝統を理解するとともに、他地域の文化や伝統を尊重できる人間を育てます。
- 町民主体の歴史・文化・芸術活動を積極的に支援するとともに、串本町文化センターを発信・活動拠点として、さらに町民が集い、親しまれるような運営に努めます。
- 文化財の保存・整備を進めるとともに、歴史・食文化・生活文化を次世代へ伝承していく取り組みを進めます。
- 本町の誇るべき郷土史や郷土文化、郷土資源や自然環境についての研究や学習を推進します。

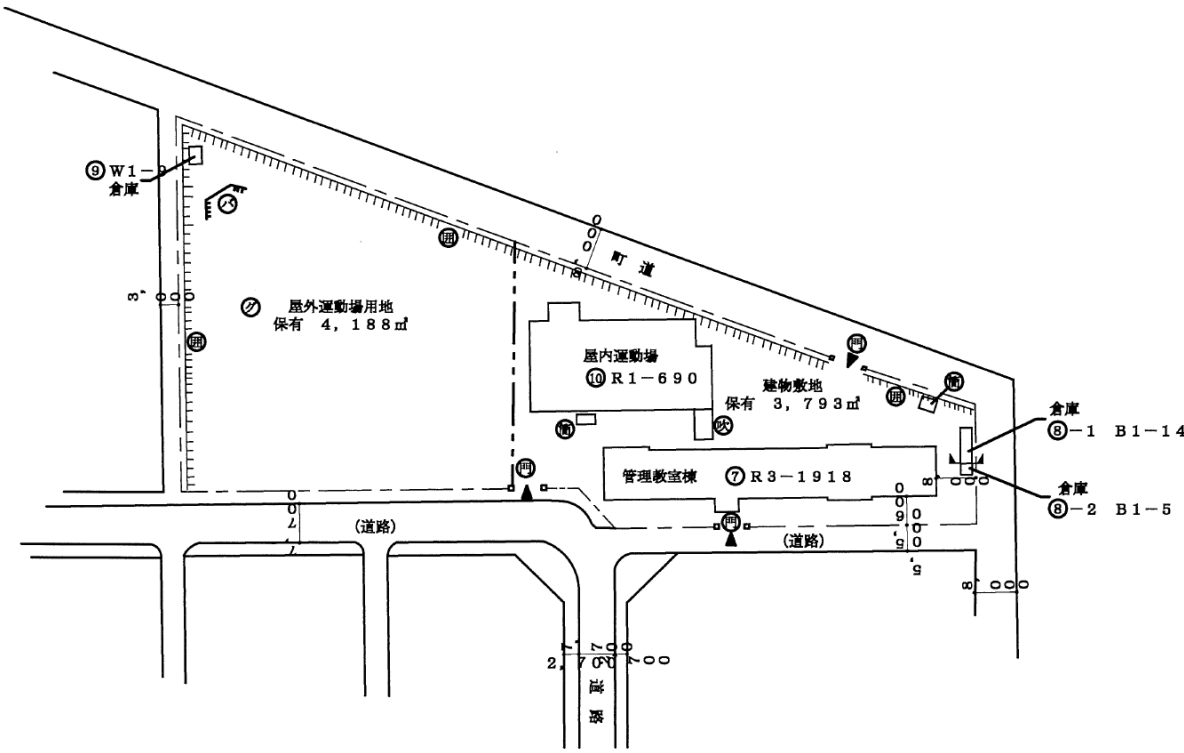
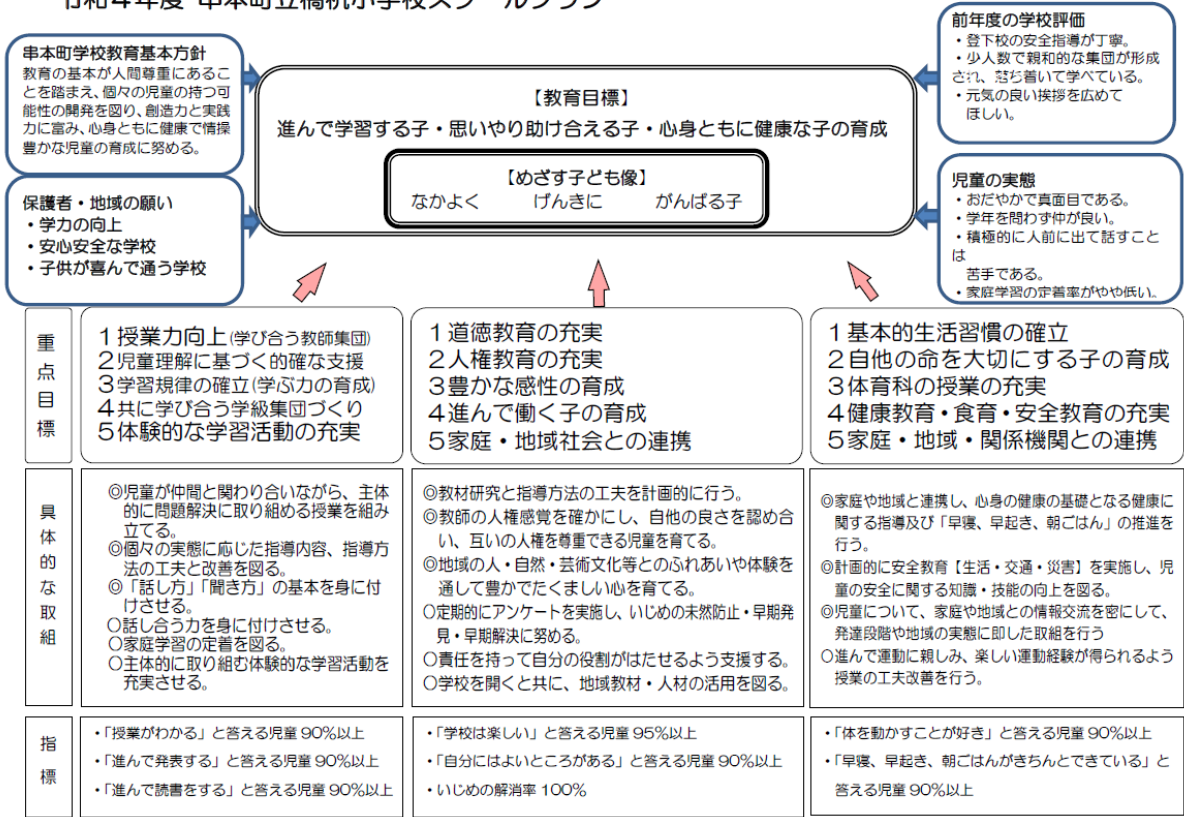
3) 計画対象校

①串本小学校



②橋杭小学校

令和4年度 串本町立橋杭小学校スクールプラン



(2) 現状の課題

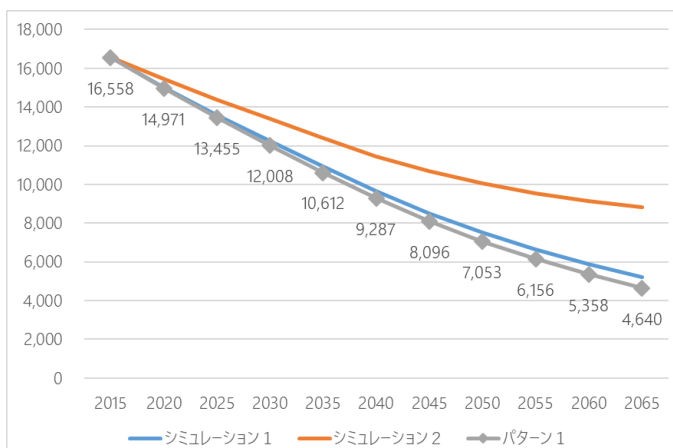
1) 地域

①少子化・高齢化

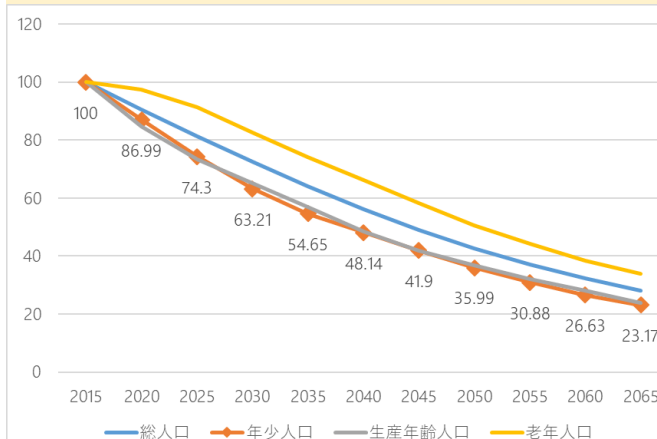
串本町においては今後さらに少子高齢化が進み、児童数は大幅に減少する。現在の合計特殊出生率と人口移動が続くと（総人口推計パターン1）、2022年（令和4年）に約1.5万人いる人口は、15年後には1万人を割り込み25年後には半減する。年少人口の推計も同様であり、児童数は大幅に減少し、25年後には2022年の約4割程度まで減少し、どの小学校においても複式学級となる学年が増えることが想定される。

2022年の児童数は串本町全体で6学年合計519人であり、推計では25年後には200人程度まで減少する。

※地域経済分析システム RESAS: 経済産業省と内閣官房デジタル田園都市国家構想実現会議事務局が提供する統計分析システム。人口推計データは国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」に基づきまち・ひと・しごと創生本部が作成したものを使用。



総人口の将来推計 (地域経済分析システム RESAS※)



年齢3区分別将来推計 (地域経済分析システム RESAS)

	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028
串本小学校	74	74	67	64	64	56	47
橋杭小学校	53	46	37	31	33	34	37
出雲小学校	32	33	35	33	29	28	25
大島小学校	35	35	38	40	42	45	43
串本西小学校	39	39	39	38	35	31	30
西向小学校	43	44	39	36	37	30	31
古座小学校	72	69	68	62	55	48	38
田原小学校	14	16	17	17	16	13	11
潮岬小学校	149	145	139	131	128	128	113
計	511	501	479	452	439	413	375

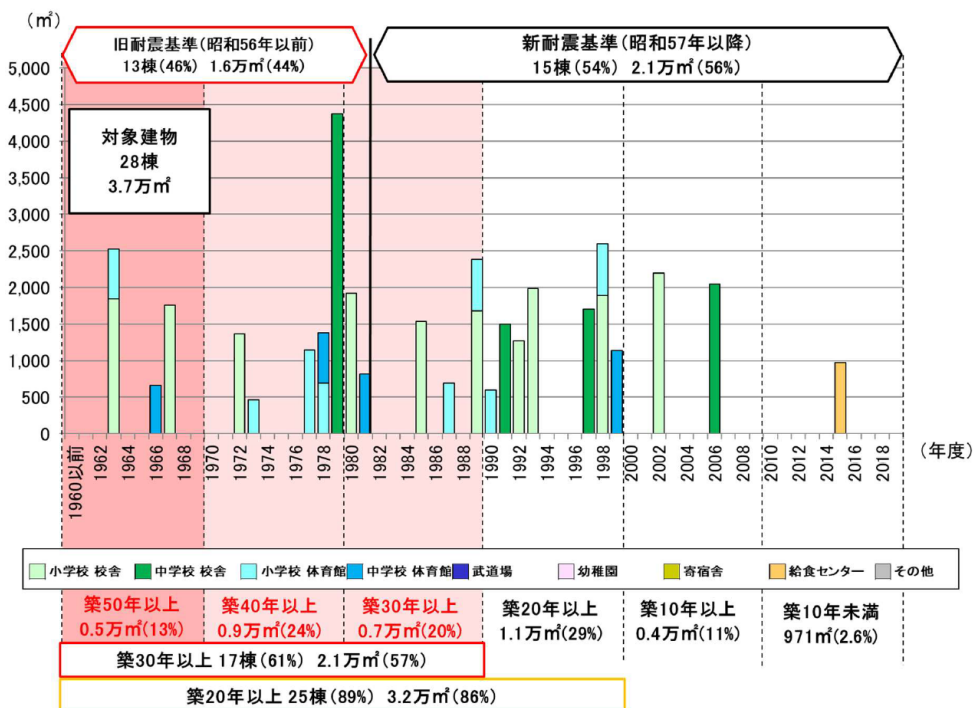
串本町の児童数推計 (2022年8月1日現在の児童数と4月1日現在の住民基本台帳による)

②公共施設の老朽化

公共施設等総合管理計画（2021年改訂）によると、旧耐震基準で整備された施設は学校教育系施設、町立体育館が該当し、町立図書館は老朽化したため庁舎建設に伴って高台移転した地域保健福祉センターの建物を暫定的に使用している。



学校施設のうち、旧耐震基準が46%、新耐震基準が54%であるが、2002年の潮岬小学校校舎、2006年の潮岬中学校校舎以外に新築・改築は行われておらず、串本町の目指す教育と目指す学校施設像をつくるのが急務である。



教育系施設の築年別整備状況（串本町学校施設長寿命化計画）

③放課後や休日の子ども達の居場所

町内 9 小学校に対し、学童保育所は 5 か所で運営されている。旧錦富小学校を活動場所とする串本学童保育所及び錦富学童保育所は特定非営利法人串本学童運営委員会に委託し、潮岬学童保育所、出雲学童保育所、古座学童保育所は上野山こども園を運営する社会福祉法人杉の子会に委託している。

串本町の学童保育施設一覧

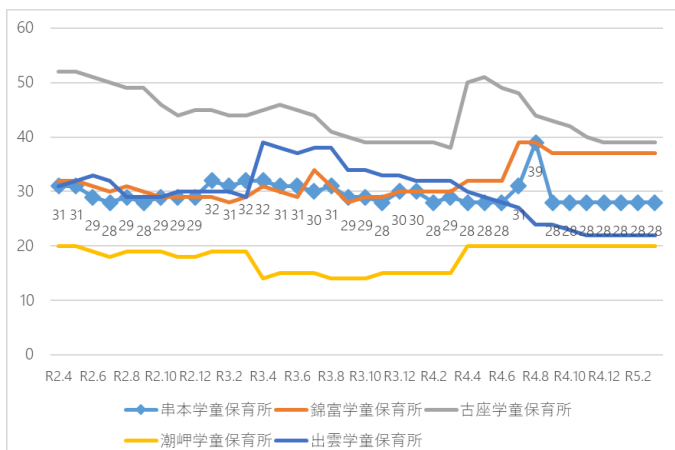
保育所名	活動場所	規模	対象学校等
串本学童保育所	旧錦富小学校	約 40 人	串本小学校
錦富学童保育所	旧錦富小学校	約 40 人	橋杭小学校/串本西小学校/大島小学校
潮岬学童保育所	潮岬小学校近隣民間施設	約 20 人	潮岬小学校 1 年生
出雲学童保育所	出雲小学校多目的教室	約 40 人	潮岬小学校 2 年生以上/出雲小学校
古座学童保育所	旧上野山保育所	約 50 人	西向小学校/古座小学校/田原小学校

町内の児童総数は減少傾向にあるが、過去 3 年間の月別学童保育利用者数の推移を見るとほぼ横ばいである。また、長期休暇になる 7 月・8 月に増加する学童もある。

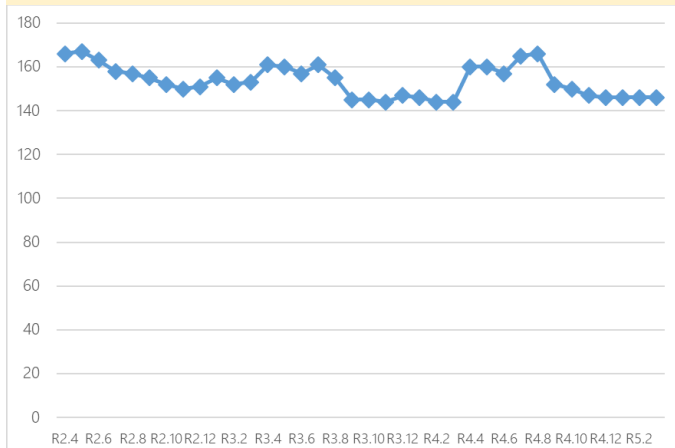
学童保育所の設置位置は、旧錦富小学校、潮岬と隣接する出雲、古座と大きく 3 つの地域に集約されている。通う学童保育所が遠方にある児童は、町と契約しているタクシー会社が学校から学童保育所まで送迎し、帰りは保護者が迎えにくる形である。

串本学童保育所と錦富学童保育所が利用する旧錦富小学校、潮岬学童保育所は民家を改修して活用しており 20 人までしか収容できないなど、施設にも課題を抱えている。

帰宅後に友だちと遊ぶ場所は自宅以外では学校が遊び場であるが、潮岬と出雲以外は学区と学童の活動場所が離れており、学童に通う児童とその他の児童と一緒に遊ぶ場所になりにくい。その他に子ども達が利用できる公共施設は整備されていない。



各学童保育所の月別利用者数の推移



町内全体の学童保育利用者数の推移

④災害対策

東海・東南海・南海の連動地震は最大津波高 10m で約 750ha 浸水し、南海トラフ巨大地震では最大津波高 17m で約 1,170ha 浸水すると想定されている。津波到達時間が 3～5 分と早く、命を守るための対策（啓発や訓練等のソフト）、避難を助ける対策（津波避難路等のハード）に加え、中部地域（串本中学校区）では、都市基盤をサンゴ台に高台移転する計画を進めている。



JR 串本駅北側に広がるサンゴ台地区は 1970 年代に上野山地区とともに計画が始まり、1994 年（平成 6 年）に分譲が開始された比較的新しい造成地である。2011 年（平成 23 年）に町立病院を移転して災害支援病院とし、2012 年（平成 24 年）には消防署を消防防災センターとして移転した。2021 年（令和 3 年）に町役場、2022 年（令和 4 年）にこども園を移転し、2026 年（令和 8 年）を目途に統合小学校を整備する。一方で、浸水区域内には串本中学校、町立体育館、武道館、文化センター、町立図書館等が依然として残り、老朽化による施設の在り方の検討とともに今後さらなる整備が想定される。

JR 串本駅周辺の津波浸水区域の住民は、潮岬とサンゴ台地区を主な避難場所として高台に避難することになるが、サンゴ台地区の避難所はサンゴ台集会所とクラブハウスのみであり、串本地区・サンゴ台地区の人口規模からは避難所が不足している。住宅地や公共施設のさらなる高台移転も含めて地区全体の安全性を高める取り組みが続く。

串本地区・サンゴ台地区における教育施設等の避難場所・避難所指定状況一覧

	面積 (㎡)	収容人数 3㎡/人	海拔 (m)	指定緊急避難場所				指定避難所			
				津波	地震	風水 害	土砂 災害	津波	地震	風水 害	土砂 災害
串本小学校 (体育館)	472	157	6		○	○	○		○	○	○
串本中学校 (体育館)	943	314	5		○				○		
くしもとこども園 新園舎	830	276	50	今後指定予定							
くしもとこども園 (さくら園舎)	1,222	407	5			○					
くしもとこども園 (つばき園舎)	759	253	6			○					
学校給食センター			17	○							
串本古座高校 本校舎体育館	1,908	636	13	○	○			○	○		
町立体育館	2,148	716	3		○	○	○		○	○	○
武道場	568	189	3		○				○		
町立文化センター	631	210	3		○	○	○		○	○	○
植松防災センター	32	10	9	○	○	○	○		○	○	○
三区会館	88	29	6		○	○	○		○	○	○
二区会館	120	40	3		○	○	○		○	○	○
老人憩の家 「わかしお」	326	109	5		○	○	○		○	○	○
大水崎会館	87	29	3		○				○		
サンゴ台集会所	83	28	42	○	○	○	○	○	○	○	○
クラブハウス	265	88	40	○	○	○	○	○	○	○	○
雨天練習場付近			12	○			○				
イベント広場			30	○			○				
総合運動公園			40	○			○				
消防防災センター			24	○		○	○				
串本町立病院			53	○							
串本町役場	162	54	50	○	○	○					

※津波避難ビルや小規模な屋外の緊急避難場所は除く

2) 学校教育・学校施設

①教育課題

串本小学校は、学校教育目標を「児童一人ひとりの能力をいっばいにひらく」、研究主題を「確かに読む力を身に付け、自分の思いや考えを豊かに表現し合える子の育成」と設定している。橋杭小学校は、学校教育目標を「進んで学習する子・思いやり助け合える子・心身ともに健康な子の育成」、研究主題を「わかる楽しさを味わえる授業づくり」と設定している。

両校ともに、子供たちは、明るく元気で、学年を問わず仲が良いという実態であるが、「人の話を聞き、それをもとに自分の考えを持ち、他者に伝えること」「進んで人前で話をする事」などに課題が見られる。

それらを踏まえ、串本小学校は、研究教科を国語科とし、「自分の読みを友達に伝え、友だちと対話をする事によって他者の視点を取り入れ、自分の考えを見直し、学びを深めていける対話的な学び」について研究を進めている。また、橋杭小学校は、研究教科を算数科とし、「読む・自分の考えを持つ・書く・伝え合う・考えや思いを共有する」という個人から集団への学びの広がり学習過程とした研究を進めている。

加えて、ICT 端末の活用、教育活動全体での話す力や聞く力の育成、読書や家庭学習の習慣化、地域学習や地域と連携した取組や、補充学習としてコミュニティ教室（串本小）、橋小タイムの時間（橋杭小）で基礎学力の定着に努めている。

今後は、学習指導要領で求められている「主体的・対話的で深い学び」や、中教審から提起された「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」という観点からこれまでの取組を振りかえり、課題解決に向けてより子供理解に努めることを通して、きめ細やかな指導・支援をしていく必要がある。



左上：串本小学校の授業の様子

右上：橋杭小学校の授業の様子

左下：串本小学校のコミュニティ教室

②多様な教育機会

串本町及び串本小学校、橋杭小学校では様々な教育的取り組みが実施されている。そのうち、特徴があるものを整理する。

○姉妹都市青少年交流事業

1994年から、国際姉妹都市を中心に、児童生徒の派遣及び受入による交流を行っている。派遣13回77名、受入14回83名、交流都市は姉妹都市3市を含む4市である。



トルコ軍艦遭難慰霊碑（トルコメルシン市）



トルコ軍艦遭難慰霊碑（串本町樫野）

○スペースポート紀伊・ロケット関連

田原地区に整備された民間初のロケット発射場と航空宇宙産業（学術的な取り組みを含む）との交流が進んでいる。2023年8月に第一号ロケットを発射予定で進められ、子どもや保護者を対象としたワークショップ等も開催されている（過去2年間は新型コロナウイルスの蔓延防止の観点から多くの取り組みが中止になった）。今後さらにロケットに関連した学習へ期待がかかる。



小中学生・保護者向けワークショップの様子（株式会社UPS ジャパンの報告書から抜粋）

○橋杭小学校の「たていわタイム【海洋教育】」

文部科学省の教育課程特例校を申請し、1・2年生の生活科、3～6年生の総合的学習の時間を「たていわタイム【海洋教育】」に替える取り組みを2014年（平成26年）から2019年（令和元年）まで行った。「海とともに生きる」「防災教育」を2本の柱とした全学年の取り組みで、身近な海をテーマに取り上げながら横断的に学ぶことで、教科学習への好影響等も見られた。



活動中の写真（笹川平和財団の報告書から転載）

○地域の多様な教育資源

串本町内には、橋杭岩等の奇岩奇石や地層等（広域には南紀熊野ジオパーク）、ラムサール条約登録湿地である串本海域公園地区、田辺から新宮に至る熊野古道大辺路や歴史、スペースポート紀伊やロケット産業、本マグロや真鯛の養殖等の新しい産業、様々な学びに活用できる資源が豊富に存在する。



橋杭岩



串本海中公園



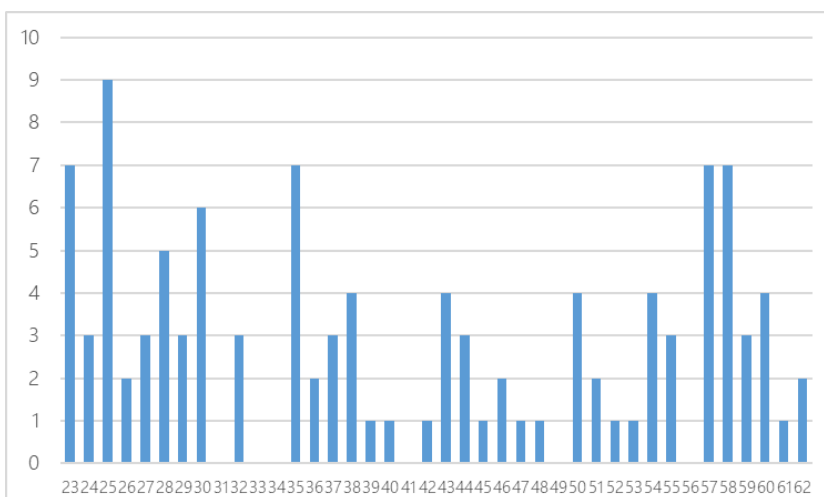
校外学習の様子



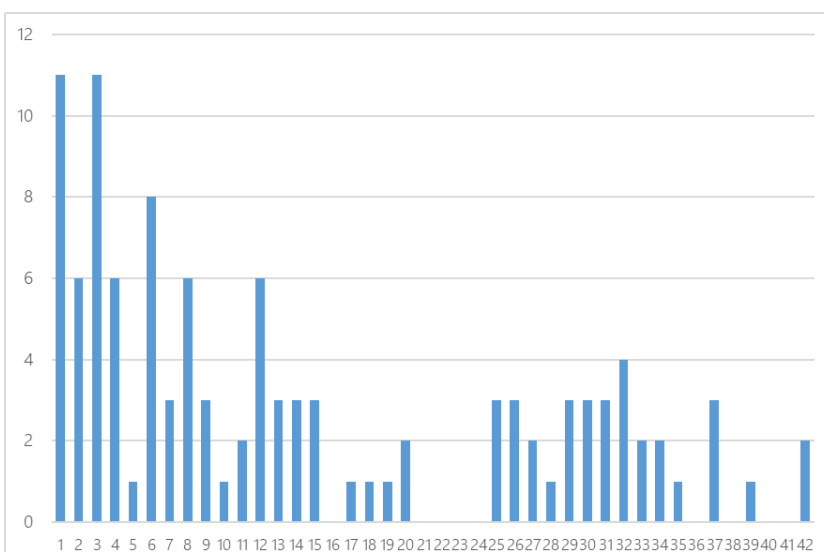
③若手教員の増加と研修機会の創出

小中学校合わせて13校に対し、校長・教頭・教諭111名、事務職員13名、養護教諭10名が勤務する。非常勤講師や用務員等のその他の職員73名を加え、町全体で207名が学校に勤めている。このうち、校長・教頭・教諭111名の年齢構成は平均40.7歳、20代が32人(29%)、30代が28人(23%)である。教職経験年数は平均14.3年、10年未満が50%、10～19年が21%と若い教員が多い状況にある。

学校規模は大半が小規模校であり、学年単学級や複式学級を抱える学校、一校に同教科の免許を持つ教員を配置することができない学校(中学校)があり、そのため同学年担当や同教科の教員が学習指導や学級経営等について相談したりする時間や場が持てない状況にある。加えて、教育課程の実施や教育課題の多様化・複雑化により各教員の業務が増え、年長教員や中堅教員の知識や技能等を若手教員に継承することも困難な状況にある。そこで、教育委員会が主体となって年間10回の研修会(若手教員育成プログラム)を実施している。



年齢別教員数 (N=111)



教職経験年数別教員数 (N=111)

④学校を支える地域

串本小学校、出雲小学校、大島小学校、橋杭小学校、古座小学校、田原小学校、串本中学校は学校ごと、潮岬小学校・潮岬中学校、串本西小学校・串本西中学校、西向小学校・西向中学校は小中一体で学校運営協議会が設置されている。地域住民代表、保護者代表、学校長と教頭に学識経験者を加えて構成され、保護者や地域を巻き込んだ活動の計画立案等を行っている。

串本小学校のコミュニティスクール年間行動計画

	1学期	2学期	3学期
1年	4月 下校指導 5月 串本節体験 8月 戦争体験談	11月 紙芝居(串本民話の会) 学習発表会 12月 やきいも交流会	2月 園児との交流 (くしもとこども園)
2年	5月 串本節体験 6月 町探検 7月 桃スイーツ作り 8月 戦争体験談	11月 読み聞かせ (ブッククラブ串本) 学習発表会	2月 昔あそび体験
3年	5月 串本節体験 6月 校区探検 8月 戦争体験談	10月 大豆料理 11月 紙芝居(串本民話の会) 学習発表会	2月 昔の道具体験
4年	5月 串本節体験 8月 戦争体験談	10月 柿調理 11月 紙芝居(串本民話の会) 学習発表会	1月 福祉体験
5年	5月 串本節体験 6月 梅ジュース作り 7月 家庭科手縫い 救命救急講習会 8月 戦争体験談	9月 いのちの教室 木工体験 10月 家庭科ミシン縫い 11月 紙芝居(串本民話の会) 学習発表会	2月 郷土料理体験
6年	5月 串本節体験 6月 救命救急講習会 8月 戦争体験談	9月 いのちの教室 10月 家庭科ミシン縫い 11月 紙芝居(串本民話の会) 学習発表会	1月 福祉交流



やきいも交流会



家庭科ミシン縫い

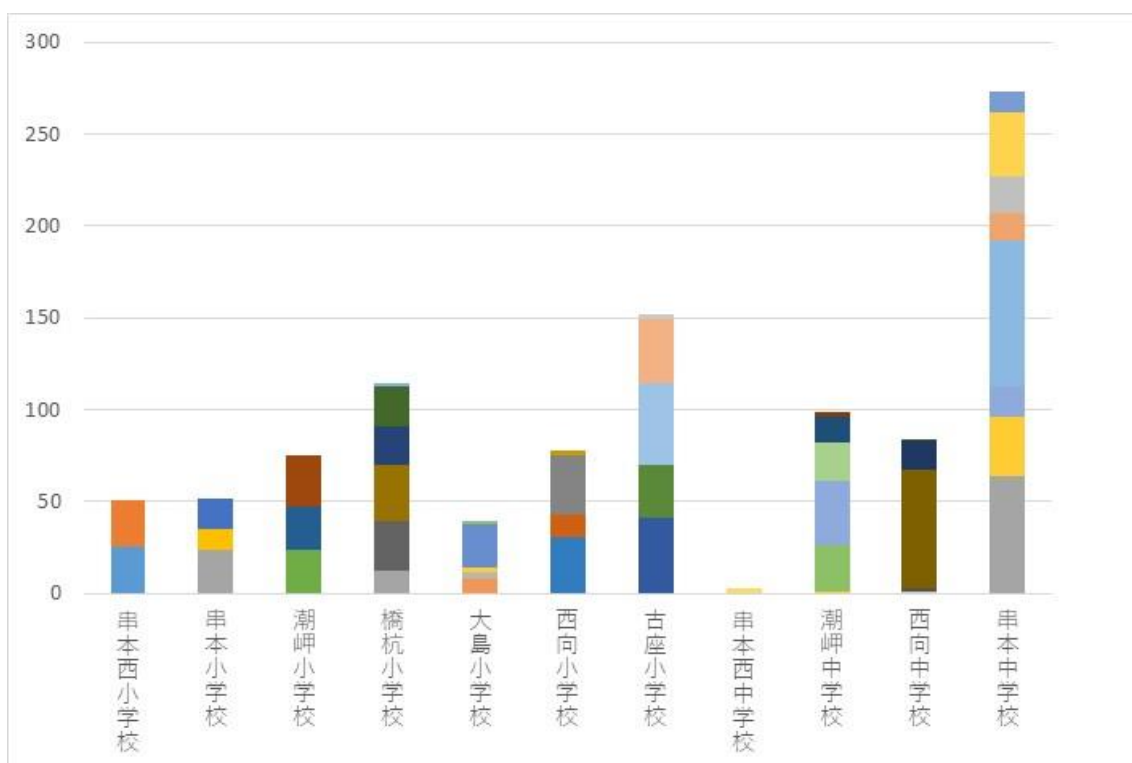


いのちの教室

⑤学校施設の地域利用

7 小学校（出雲小学校は体育館がなく、田原小学校体育館は利用されていない）、4 中学校の体育館が地域利用されている。2021 年度（令和 3 年度）の実績では、一番多い串本中学校は 8 団体 273 回、計画対象の串本小学校が 3 団体 52 回、橋杭小学校が 6 団体 114 回利用されている。加えて、統廃合によって閉校となった旧和深中学校、旧田原中学校、旧錦富小学校、旧田並小学校、旧大島中学校の体育館は社会教育施設として地域が利用している。また校庭の地域利用も行われている。

各学校は地域の公園、遊び場的な機能も有しており、遊び場としての校庭利用は特に制限されていない。



2021 年度の学校体育館の地域利用状況
(色分けは団体ごとの利用回数)

各地区に公民館（支館）もしくは類する施設を有し、農林水産業従事者等の生活環境及び福祉の増進のために、22 か所の集会所が整備されている。

サンゴ台地区には天然芝のサッカー場、スタンドがある野球場、人工芝のテニスコート、フットサルと野球で利用できる雨天練習場がまとまった総合運動公園（町が整備してスポーツジム NAS が運営）が整備されており、その一角に屋内温水プールとトレーニングジムが併設された B&G 海洋センター（町が整備して B&G 財団が運営）が立地し、町内のスポーツ機能の多くが集約化され、町内のみならず全国のスポーツチームや学校等にトレーニング拠点としても利用されている。

社会教育施設一覧

施設		規模等	内容
公民館	330㎡以上の公民館(支館)	潮岬 585㎡ 有田 361㎡ 田並 415㎡ 和深 401㎡ 赤瀬 828㎡	
	330㎡以下の公民館(支館)	出雲 139㎡ 古座 284㎡ 西向 324㎡	
	条例設置されているが施設を有しない公民館	錦富・須江・樫野・田原・橋杭	
紀伊大島開発総合センター(兼大島支館)		563㎡	和室・会議室・ホール・事務室他
串本町図書館		195㎡	蔵書 53,735冊
串本町立体育館		2,148㎡	バレーボール2面、バドミントン3面、バスケットボール1面、卓球台8台他
町営テニスコート		テニスコート3面	アンツーカー
町民グラウンド		13,000㎡	多目的グラウンド
串本町武道場		476㎡	武道場及び多目的利用
串本町文化センター(串本町中央公民館)		2,938㎡	大ホール(600席)・調理室・講座室・実習室・視聴覚室他
串本町民文化センター(兼西向支館)		324㎡	和室・会議室・ホール・実習室・事務室他
串本町総合運動公園		野球場 12,894㎡	中堅120m・両翼95m・2,000席
		多目的グラウンド グラウンド 16,016㎡ 芝生スタンド 2,570㎡	400mトラック・陸上・サッカー他
		テニスコート8面	人工芝
		雨天練習場 1,457㎡	野球・フットサル他
串本大島プール		プール2面	25×13m 6コース 5m×10m(幼児用)
田原若者広場		グラウンドゴルフ場1面	
旧和深中学校体育館		704㎡	バレーボール1面
旧田原中学校体育館		578㎡	バレーボール1面
旧錦富小学校体育館		452㎡	バレーボール1面
旧田並小学校体育館		400㎡	卓球台1台・バスケットボール1面
旧大島中学校体育館		491㎡	バレーボール1面

※串本町総合運動公園はスポーツクラブNASが指定管理者として運営

※他に串本町B&G海洋センター(屋内プール及びトレーニング施設)をB&G財団が指定管理者として運営

⑥学校の防災対策

改築対象の2校を含め、旧耐震基準（1981年6月以前に竣工）の建物が小学校8棟（18棟中）、中学校5棟（9棟中）である。災害時の避難所、特に津波に対して避難所機能を担えない建物が多い。津波に対しては、屋上や裏山等の高台への避難路は整備されている。

防災備蓄物資は町総務課が管理する物資の中から学校に配備しているものもあるが、学校専用の備蓄はされていない。日常的な海辺・浜辺での学習と災害時の備えを兼ねて、ライフジャケットが常備されている。



橋杭小学校の津波避難訓練



小学校に備えられたライフジャケット

町内小中学校の避難場所・避難所指定状況一覧

	面積 (㎡)	収容人数 3㎡/人	海拔 (m)	指定緊急避難場所				指定避難所			
				津波	地震	風水 害	土砂 災害	津波	地震	風水 害	土砂 災害
串本小学校 (体育館)	472	157	6		○	○	○		○	○	○
串本中学校 (体育館)	943	314	5		○				○		
串本西小学校 (体育館)	554	185	4		○				○		
串本西中学校 (体育館)	474	158	5		○				○		
串本西中学校 (2階以上)			12			○					
潮岬小学校 (体育館)	513	171	57	○	○	○	○	○	○	○	○
潮岬中学校 (体育館)	637	212	53	○	○	○	○	○	○	○	○
出雲小学校			46	○		○	○				

大島小学校 (体育館)	585	195	72	○	○	○	○	○	○	○	○
大島中学校 (体育館)	491	164	81	○	○	○	○	○	○	○	○
西向小学校 (体育館)	429	143	8		○		○		○		○
西向中学校 (体育館)	616	205	7		○				○		
西向中学校 (3階以上)	731	244	15	○	○	○	○				
古座小学校 (2階以上)	960	320	13								○
古座小学校 (体育館フロア)	540	180	13		○	○			○	○	
旧和深中学校	2,705	902	11	○	○			○	○		
旧田並小学校 (体育館)	234	78	5		○				○		
旧錦富小学校 (体育館)	452	150	8		○	○			○	○	
旧錦富小学校 (屋上)			15	○							
旧須江小学校			53	○			○				
旧養春小学校	1,290	430	4		○	○			○	○	
田原小学校 (2階以上)	726	242	8			○					
田原小学校 (体育館)	368	123	4		○				○		
旧田原中学校 (2階以上)	1,385	462	9		○	○	○		○		

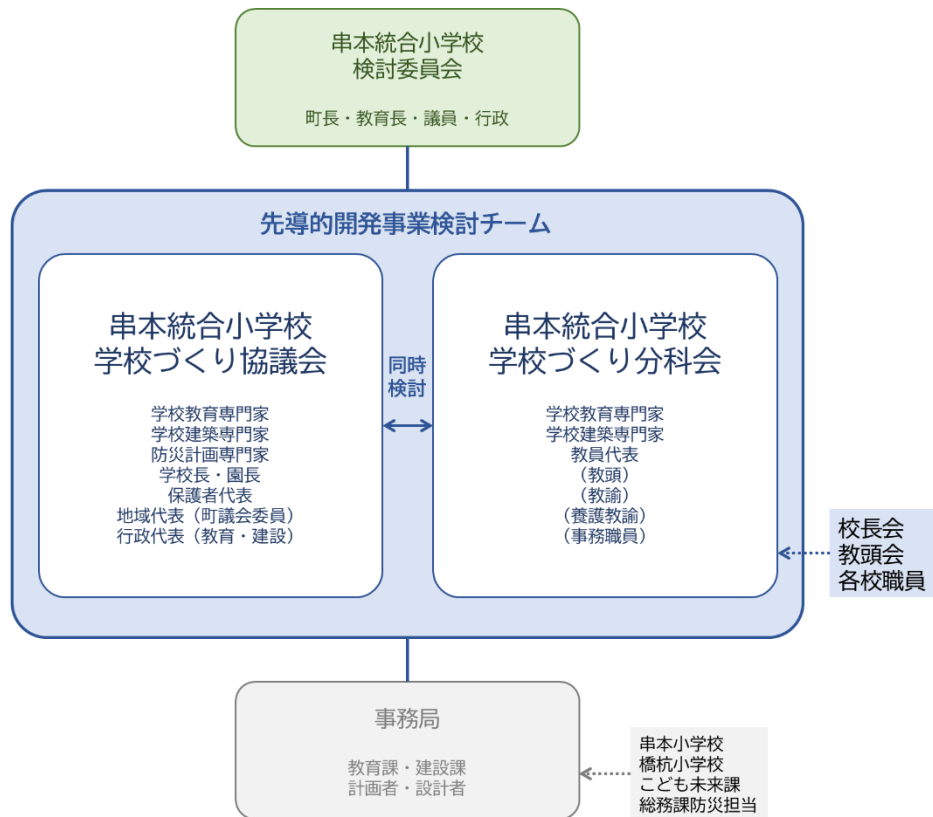
3 取り組み方針と計画条件

(1) 串本統合小学校づくりの取り組み方針

1) 計画の経緯

本町では、東日本大震災などの大きな災害を教訓に、公共施設の高台移転を進めている。同時に、地域課題として急速に進む少子化、学校を含む文教施設の老朽化と長寿命化などがあり、総合的な判断から津波浸水区域内にある串本小学校と橋杭小学校を統合し、高台に移転する計画を決定した。小学校の全面的な整備は2002年に潮岬小学校を建設してから20年ぶりの事業であり、世界的に進む教育の変化、急速に進む少子化の中での協同的な学び、少人数化することでより個別的な取り組みが必要となる個人個人の学びなど、串本町としての新しい時代の学びと学校施設を目指す。そのため、文部科学省が募集した「新しい時代の学びの環境整備先導的開発事業」に応募し、災害に備えるという時間的制約の中で、基本設計と同時並行して検討する計画である。

計画の推進にあたっては、有識者、行政関係機関を含む組織である「新しい時代の統合小学校検討委員会」、先導的開発事業を推進する組織として、学校、保護者、地域の代表に学識経験者を加えた「串本統合小学校 学校づくり協議会」、教育の在り方や目指す学校を考えるために町内で活躍する教頭、教諭、養護教諭、事務職員を集めた「串本統合小学校 学校づくり分科会」を組織した。若手教員が多く、学校、子ども達と一緒に教職員も育つ串本町を目指し、様々な地域課題、教育課題の解決を実践する場としての学校施設のあり方を検討する。



検討組織概念図

2) 計画施設の規模

計画する施設は、串本小学校及び橋杭小学校を統合した統合小学校、串本小学校と橋杭小学校に通う児童を中心として活動する学童保育所の機能を有し、津波浸水区域からすぐに高台移転できない社会教育施設等の機能を補完するための学校開放機能を想定した施設とする。

統合しても各学年1学級規模となり、文部科学省が定める整備資格面積を参考に、財政的な課題を踏まえて適切な規模とする。学童保育については、さらなる少子化が進む実情も踏まえ、串本小学校及び橋杭小学校の児童が利用する串本学童保育所と同じ場所で活動する錦富学童保育所（共に活動場所である旧錦富小学校は津波浸水区域内であり、施設も老朽化している）も同居もしくは統合できる施設として計画する。なお、プールは徒歩圏内に町が整備した屋内温水プールがあるため、学校単独では整備しない。

統合小学校の整備規模（目標）

	統合小学校	既存校	
		串本小学校	橋杭小学校
児童数（令和3年度）	144人・6学級	90人・6学級	54人・5学級
敷地面積	約25,000㎡	9,548㎡	7,981㎡
校舎面積	約3,500㎡	1,843㎡（築58年） 1,273㎡（築29年）	1,918㎡（築41年）
主要構造	木造	RC造	RC造
屋体面積	約1,200㎡	680㎡（築58年）	690㎡（築34年）
主要構造	木造・RC造	RC造	RC造
学童・他面積	約500㎡		
主要構造	木造		

※統合小学校は普通学級6学級特別支援学級2学級を想定し、整備資格面積3,309㎡を想定する

※児童数は減少傾向にあり、開校予定の2026（令和8）年度は児童数105人6学級を想定する

※なお、串本町の学校は交通手段等の課題から、肢体不自由児が在籍する場合がある

統合小学校の整備資格面積

		計算式	面積
校舎	学級数に応じる校舎面積（6学級）	$2,468 \times 236$ （学級数-6） -①	2,468㎡
	特別支援学級（2学級）	特別支援学級数×168 -②	336㎡
	多目的教室加算	$(①+②) \times 0.18$	505㎡
	校舎計		3,309㎡
屋内運動場			894㎡

※防災機能の強化は学校施設環境改善交付金の活用も想定する

※学童保育施設は活動に必要な面積を校舎とは別途計上する

3) 児童数・学級数

2校の2022年（令和4年）9月時点の児童数（住民基本台帳ベース）は下記の通り。

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	(特支)	計
串本	14	14	6	13	15	12	3	74
橋杭	8	6	5	7	13	11	2	50
2校計	22	20	11	20	28	23	5	124

※特別支援の児童数は内数

住民基本台帳に基づく2027年（令和9年）までの児童推計は下記の通り。人口移動がなければ、年々減少し、20人以下学級となることが想定される。

		2022	2023	2024	2025	2026	2027
串本	児童数	74	74	67	64	64	56
	学級数	6	6	6	6	6	6
	1年	14	12	8	10	6	6
	2年	14	14	12	8	10	6
	3年	6	14	14	12	8	10
	4年	13	6	14	14	12	8
	5年	15	13	6	14	14	12
	6年	12	15	13	6	14	14
橋杭	児童数	53	46	37	31	33	34
	学級数	5	4	4	4	4	4
	1年	10	5	1	2	8	8
	2年	7	10	5	1	2	8
	3年	6	7	10	5	1	2
	4年	8	6	7	10	5	1
	5年	10	8	6	7	10	5
	6年	12	10	8	6	7	10
2校計	児童数	127	120	104	95	97	90
	学級数	6	6	6	6	6	6
	1年	24	17	9	12	14	14
	2年	21	24	17	9	12	14
	3年	12	21	24	17	9	12
	4年	21	12	21	24	17	9
	5年	25	21	12	21	24	17
	6年	24	25	21	12	21	24

4) 学区域

串本統合小学校の学区は、串本小学校と橋杭小学校の学区を統合し、串本、くじの川、高富、二色、サンゴ台の各地区全域となる。スクールバス（委託）の運行については、詳細は今後の検討になるものの、2台程度のバス（マイクロバス程度のサイズ）が運行されるものと想定する。統合小学校の学区は、串本西小学校、潮岬小学校、西向小学校の学区と隣接する。

学童保育については、串本学童保育所に加え、錦富学童保育所が統合された場合は、学区以外の児童も通うことになる。徒歩では通えないため、スクールバス同様に、バスまたは乗用車による移動が伴う。土曜日等の学校休校日や天候が悪い日は保護者による送迎になるため、10台程度保護者などが利用できる駐車場が必要となる。

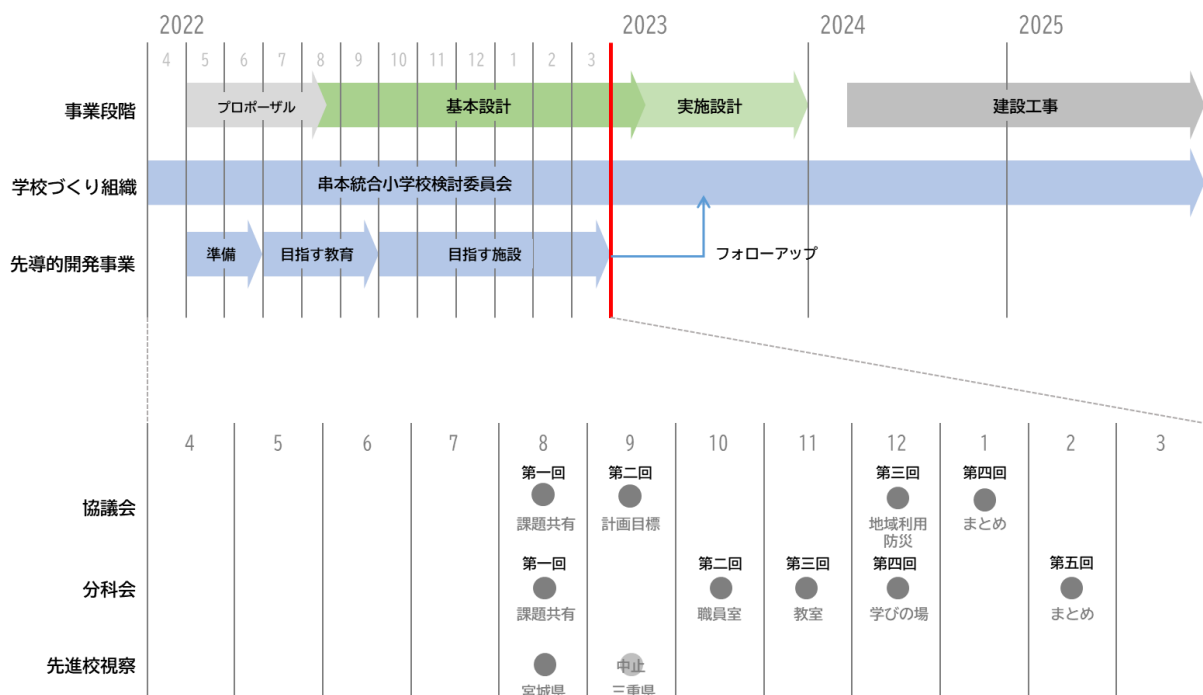
現在、スクールバスは車両を串本町が購入した上で、運行を地元企業に委託している。委託する運転業務に車両や車庫周辺整備等も含まれているため、バス運転手も日中はほぼ学校に常駐している状況である。



町立小学校の学区域図

5) 検討スケジュール

2021年度（令和3年度）から検討を具体化し、先導的開発事業への応募と設計プロポーザルの実施に向けた準備をスタートした。2026年（令和8年）4月開校を目標に、2022年から23年を設計、2024年から25年を建設工事とした。建物の老朽化と南海トラフ地震への備えから、基本計画段階と基本設計段階を部分的に重ねることとし、先導的開発事業の支援を受けて、検討委員会の下に学校づくり協議会及び学校づくり分科会を設置し、各4回（分科会は計画から1回追加し最終的に5回実施）の会議を開催した。協議会及び分科会の検討内容は本報告書にまとめるとともに、基本設計に反映されている。



事業スケジュールと先導的開発事業の検討スケジュール

6) 検討体制

①学校づくり協議会

	委員属性		名前	所属・役職
1	学識経験者	◎	長澤 悟	東洋大学名誉教授・工学博士
2	学識経験者		牧 紀男	京都大学防災研究所教授・工学博士
3	町民代表		長脊 守	串本町文教厚生常任委員会・委員長
4	行政		平井 治司	串本町・副町長
5	学校代表		堀 靖典	串本小学校・校長
6	保護者代表		小寺 史朗	串本小学校・保護者
7	学校代表		溝内 聡子	橋杭小学校・校長
8	保護者代表		畑下 晋一郎	橋杭小学校・保護者
9	学校代表		湯口 いずみ	くしもとこども園・園長
10	保護者代表		慶 政樹	くしもとこども園・保護者
11	行政		濱地 弘貴	串本町教育課・課長
12	行政		坂本 善光	串本町教育課・指導主事
13	行政		浅利 淳	串本町建設課・課長
14	文部科学省アドバイザー		毛利 靖	全国 ICT 教育首长協議会・特別顧問

◎は協議会長、分科会長

②学校づくり分科会

	委員属性		名前	所属・役職
1	学識経験者		長澤 悟	東洋大学名誉教授・工学博士
2	行政	◎	坂本 善光	串本町教育課・指導主事
3	教員		金澤 有史	西向小学校・教頭
4	教員		熊代 紀保	串本小学校・教諭
5	教員		切畑 優子	串本小学校・養護教諭
6	教員		濱地 晃志	橋杭小学校・教諭
7	教員		吉村 昌晃	潮岬小学校・教諭
8	職員		富田 純世	古座小学校・事務

③事務局

串本町教育課

串本町建設課

串本町こども未来課

串本町総務課防災グループ

株式会社教育環境研究所（策定支援者）

株式会社綜企画設計（基本設計受託者）

(2) 新しい時代の学びの環境整備先導的開発事業（串本町）の取り組み方針

1) 先導的開発事業の取り組み方針

本事業の取り組みを始めるにあたり、以下の2つを取り組みの方針とした。

①総合的な視点と教育的な視点

南海トラフ地震に備える全町的な取り組み、串本町全体の教育・子育ての目指すものなどを総合的に議論するために、学校長、こども園長、保護者代表、町民代表、行政担当に学識経験者を加えた協議会を組織した。同時に、少子高齢化が急速に進行する地域、若手教員が多い地域、高校段階以降は町外へ通学する子どもが多い地域等の教育課題や、その課題を乗り越えるために目指す教育像、学校環境を考えるため、管理職、教諭、養護教諭、事務職員に学識経験者を加えた学校づくり分科会を組織した。町内で務める全ての教職員から選ばれた委員と一緒にアイデアを練る一員であるとともに、それぞれの学校に戻って校内で協議を行うなどし、教職員全体の意見を集約したり、協議会や分科会が考えている内容を伝える役目も果たしている。課題となっている教員の成長機会の一つとしても期待する。

そして、すべての会議に、教育課と建設課、学識経験者と一緒にアイデアを出して提案する策定支援者、アイデアを具現化する役割を果たす基本設計者が参画し、議論を深める体制とした。

②計画と基本設計の同時検討

津波被害から安全な学校を整備するというできるだけ早期に対応が必要な課題がある中、未来を探るという時間がかかる検討を同時に進めるため、計画開始初期の段階で基本設計者を選定した。構想・計画と設計・建築的な検討、ソフトとハードを一体的に議論する体制とした。設計者の選定にあたっては、町で初めてプロポーザル方式を採用し、これからの学校づくりと一緒に検討できるパートナーを選ぶこととした。

2) 先導的開発事業のテーマ設定

応募にあたって、串本町の地域課題・教育課題を整理し、検討テーマを大きく以下の4つに分類した。

- 1.新しい時代の学びとそのため施設環境
- 2.学校時間外を含めた育ち、生涯を通じた学びの拠点となる学校施設
- 3.南海トラフ地震等の災害に備えるレジリエントなまちづくりと核となる学校施設
- 4.豊かな海と緑に恵まれた自然を生かし、新しい時代のシンボルとなる学校施設

(3) 計画条件と計画敷地

1) 計画条件

名 称：(仮称) 串本町立串本統合小学校
用 途：小学校、学童保育施設
規 模：延床面積 5,200 m²以内
校舎・学童保育施設 4,000 m²以内
屋内運動場 1,200 m²以内

計画学級数：普通学級 6、特別支援学級 2

特記事項

- ・プールは串本町 B&G 海洋センターの室内プールを利用する
- ・給食は串本町給食センターから搬入する（給食センター方式）
- ・旧錦富小学校校舎に設置されている串本学童保育所、錦富学童保育所を併設する
- ・緊急避難場所及び指定避難所として利用できる防災機能を備える

2) 計画敷地

①建設予定地

場 所：和歌山県東牟婁郡串本町串本・鬮野川(くじのかわ) 地内

敷地面積：約 25,000 m²

法規制等：非線引き都市計画区域（法 22 条）

道路斜線規制 1.5

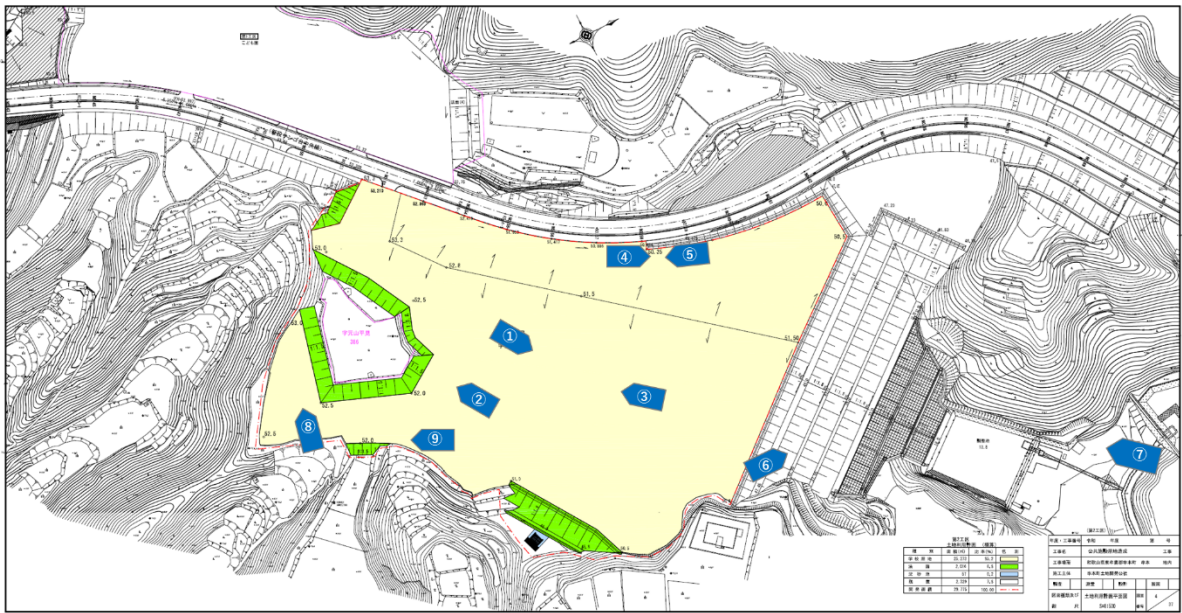
隣地斜線規制 2.5

建ぺい率：70%

容 積 率：200%（鬮野川）300%（串本）

インフラ：合併浄化槽、プロパンガス





①全景（北東方向）

②隣地（字元山平見）

③全景（南西方向）



④サンゴ台中央線（北向）

⑤サンゴ台中央線（南向）

⑥北側擁壁



⑦ロイヤルホテルから遠景

⑧南側異形敷地

⑨津波避難路出口付近

4 論点と要望

(1) 協議会・分科会での主な論点と要望

協議会及び分科会で議論された主な論点や要望を以下に整理する。

1) 協議会における論点と要望

○学校づくり全般

- ・このような学校ができると、視察等で年間多くの人が串本町に来ることも期待できる。子どもが説明する機会があると、子どもの成長にもつながる。
- ・スペースポート紀伊ができたこともあり、移住者も増えてきている。
- ・紀北地方出身の先生は赴任しても数年で戻ってしまうこともある。魅力的な学校ができて、串本に長くいてくれるようになるとよい。
- ・将来的な統廃合等によって施設が不足しないように計画してほしい。
- ・地元の小規模校は人前で話したりすることが苦手な子どもが多かったが、電子黒板を使って発表するようになって変わった。デジタルと図書の配送システム、ITを活用したロケットとのつながりなど、世界や日本中とつながることをイメージできるとよい。
- ・STEAM コモンズは主に高学年の深い学びとよりつながっていくので、高学年と近い関係性にしたい。
- ・学校を利用している団体や子ども達にも意見を聞いて、よりよいものにしていけるとよい。

○学びの場

- ・小規模・少人数はマイナスのイメージがあるが、個に応じた学びを保証できるという良い面もある。総合的な学習では、多くはグループで取り組むが、串本では個人にフォーカスした取り組みが実践できる。探究的な学びには、そのための学習材（図書など）が必要で、それが足りないという場合もあったが、新しい学校では解消できるのではないか。
- ・教室には65インチ以上の電子黒板があり、学校全体では何台か80インチ以上の電子黒板があるとよい。
- ・式典や様々な活動で利用できるのもので、体育館にスクリーンが必要。

○特別支援

- ・静かな方が落ち着くこともがある一方で、他の児童との交流活動をさせるほうがよい児童もいるので、どちらにも対応できるようにしたい。
- ・こども園の園児も通級指導教室には通うので、駐車場が近い形が望ましい。

○職員室

- ・昇降口、駐車場、校庭が見える職員室の位置はよいと思う。
- ・教職員の学びができる職員室、教職員コモンズを目指したい。

○相談・カウンセリング

- ・相談室には先生にも他の子どもにも会いたくないという児童や保護者も来る。外から直接出入りできる場所は、使っていない時には不登校の子どもも使える場所になる。

○こども園と小学校の連携

- ・こども園の園児は小学校に上がることは不安でいっぱい。統合小学校とこども園は隣接して、時には一緒に活動できるようになると、そのような不安は払しょくされるのではないかと期待している。

○学校施設の地域利用

- ・ユニットごとに分棟になっているので、セキュリティ区画をつくる上ではとてもよい。
- ・単純に開放するという方針にすることは、色々とハードルが高いが、みんなで検討してひとつひとつ乗り越えていく必要がある。学校や行政だけで管理するのではなく、学童でも管理する、地域も管理するなど、皆が関わって一緒に使っていけるように検討できるとよい。
- ・運用でカバーするというに加えて、ICカードの導入等 IT 技術等も含めて検討が必要ではないか。

○学校体育館の地域利用

- ・一般利用できる駐車場や体育館が道路側にくると使いやすい。
- ・町立体育館の機能を補完する場合、観客席や空調等、今持っている設備や機能は必要なのではないか。
- ・単純に町立体育館の機能を移転するのではなく、町立体育館を利用しながらも老朽化して使い勝手が悪い部分等を小学校の体育館で補完できるところはしていく形としたい。

○学校図書館/ラーニング・コモンズの地域利用

- ・町立図書館が浸水区域にあるので、町民も利用できる図書館になるとよい。
- ・学校図書館を子ども達やその保護者等も利用できるようにすることで、町立図書館自体は移転できなくても、学校図書館を様々な形で利用できるとよい。
- ・図書館は一人で行ってもよい時間が過ごせる場所で、人と人をつなぐ場所にもなる。
- ・小学生も中学生も家から出て、友だちと一緒に活動する場所が歩いていける場所にあるということがまちづくりにはとても重要ではないか。予約をして利用をするという施設のほかに、いつでも気軽に来ることができる場所も組み込みたい。
- ・校庭や体育館を使っている少年団等がクリスマス会や会議等で学校を利用できるようになると、選択肢が増えてよいのではないか。

○校庭の地域利用

- ・少年団で野球やサッカーをすることを想定すると、ナイター設備があるとよい。
- ・現在の串本小学校と橋杭小学校の校庭では少年野球では利用されていないが、要望等を踏まえてバックネットの必要性等はさらに検討する（主に串本西小学校で活動しているが、自主練などでその他の学校で練習している子どももいる）。

○学童保育

- ・学校と学童保育を一緒にするという議論は以前からあるが、学校側から見た時にはしんどいと思っていた。ゾーニングによって、教職員、特に若い先生方に過大な負担がかからないようになるのであれば、明るい可能性もあると思う。
- ・学童保育が学校敷地内にあることは大変良いことだと思う。保護者がすぐに迎えに来られない

時等にも対応しやすい。

- ・学童は学校に比べると一人当たり面積がとても少ない。学校をうまく利用できると、精神衛生的にも感染症的にも対応できるようになる。
- ・学童が学校を使うことの心配（例えば図書を使うと本が汚れる）もあるが、取り組んでいる学校では学童が清掃をきちんとしてくれてトラブルにはなっていない。
- ・学校に整備するネットワーク環境を学童も利用できるとよい。
- ・かつての串本学童は隣接した場所に図書館があり、学童が一番利用していた。図書館が利用できる環境になるととてもありがたい。

○防災

- ・学校だけで完結することができないので、サンゴ台全体で考えたい。
- ・サンゴ台中央線が開通し、サンゴ台に行けば希望を見いだせるという点ではよくなるが、接続する道路が傷んでいるので、避難所へのアクセスをより改善してほしい。
- ・緊急避難場所という視点では、建物内だけでなく屋外（校庭など）も場所として想定したい。
- ・学校の会議室は学校再開期には学校としてもよく使う場所になるので、避難所の機能として位置付けるか、学校専用とするかはより検討が必要。
- ・建物が分棟型になっていると、避難所的にはよいと思う。
- ・電気がついている避難所に避難するという行動心理が働くので、停電時でもある程度の明かりを確保できるようにしたい。
- ・インフラが断絶した場合にトイレ用水の確保が大変なので、何でカバーするのか検討してほしい。
- ・学校のトイレは宿泊を前提とした個数が設定されていないので、避難所として利用する場合にマンホールトイレや備品対応等の何らかの方法で不足をカバーする必要がある。
- ・学童保育は小学校同様に災害時に長期的に閉めることができない機能になる（保護者が働きに行けなくなるため）。そのため、早期に再開することが必要になる。
- ・避難所となる体育館に空調を整備することはできないか。
- ・停電時に利用できる設備を入れることはコスト的に難しい可能性もあるが、丘の上にあって風通しが良い場所であるので、自然を活用して良好な環境にできないか検討したい。
- ・停電しても暖が取れる設備があるとよい。
- ・役場では電気自動車を増やす計画もあるので、V2H等により、夜間の照明や空調などにも利用できるとうい。

○環境配慮

- ・屋根面積が大きいので、太陽光発電を検討することはできないか。

○シンボル性

- ・こども園にチャペルのような遊具が入るが、学校にも風力発電等何かシンボルとなるものがないか。

○安全性

- ・全面道路（サンゴ台中央線）は今後交通量が多くなることが想定されるので、安全に配慮した

外構計画としてほしい。

- ・ 幼稚園との横断については、点滅式の信号機や横断歩道等、今後さらに安全になるように計画してほしい。
- ・ 畑などに対して獣害がある地域なので、鹿や猿等の対策も検討してほしい。
- ・ 学童保育側の門から誰でも入ってこれる場合は安全性が確保できなくなるので、何らかの対応が必要ではないか。

○建築的な課題

- ・ ガラスを多用した場合、風雨が強く、飛んできたもので破損することなどが無いようにしたい。
- ・ 中庭のメンテナンスに軽車両などが入れるように考慮してほしい。
- ・ ちょっとした段差が使い勝手に影響するので、バリアフリーやユニバーサルデザインは考えてほしい。
- ・ 風が強い地域の開き戸はとても危険なので、引き戸を原則にしてほしい。

2) 分科会における論点と要望

○学校づくり全般

- ・ 学校らしくない学校を目指せるとよい。
- ・ きれい、かっこいい、気持ちが良い学校になるとよい。
- ・ 校舎がきれいになることで、大切に作る気持ちも芽生えるなど、気持ちの面でも変わるのではないかと期待している。
- ・ こどもたちが毎日楽しく過ごせる、学校が好きだという状況を目指したい。
- ・ 串本町は将来的にどんどん人口は減っていくため、高齢者と子ども達のつながりができ、気軽に立ち寄ってもらえる学校を目指したい。
- ・ どの学校も空き教室が少なく、工夫して自由に利用できる場所がない。
- ・ クールダウンなども含めて、色々な場所をつくりたいと思う反面、管理が行き届かなくなるのではないかと心配もある。
- ・ 人数が多くなって、複雑な形状の学校になると目が届かなくなるのではないかと心配。

○登下校

- ・ スクールバスの送り迎え、徒歩通学する児童の動線、先生と子ども達が登校時に話ができる関係をつくることのできる位置に昇降口や職員室を配置したい。
- ・ 雨天時等に自家用車で送迎になる児童もいるため、自家用車を想定した安全な乗降場を確保したい。
- ・ 登校時間は決まっているが(7時半)、保護者の送迎の都合で7時に学校に来ている児童もいるため、そのような子どもが安全に過ごせる場所も想定したい。
- ・ 玄関・昇降口で来校者の管理ができない学校が多いため、安全管理上出入口を絞って管理できるような形が望ましい。

○チーム・コモンズ

- ・ オープンスペースの学校は経験がないので、まわりに迷惑が掛かってしまうのではなかと心配

がある。

- ・GIGA スクールへの対応等も踏まえ、65cm×45cm よりも大きな机（70cm×50cm でも奥行きが不足する）でも対応できる教室寸法としたい。
- ・オープンスペースも含めて、教室まわりの面積は十分に確保できている。どうしてもこれまでの校舎・教室を前提に考えてしまいがちだが、オープンスペースを前提としたチーム・コモンズを考えたい。
- ・学習用の流しはトイレの手洗いとは分け、教員の目が届く場所に置きたい。
- ・学習用の流しのまわりは床がすぐに濡れるので、すぐに拭けるとか、滑らないとかの対応が必要。
- ・教室やその近くに下足箱があって、すぐに外に出られる関係としたい。
- ・登校靴とグラウンド履きを両方用意することができるかどうかは、今後の運用、話し合いによるが、建築としてはどちらもできるようにしておきたい。
- ・現在は児童の登下校を昇降口の靴で判断している。今後もその仕組みが前提となるかはわからないが、運用も踏まえて昇降口のあり方は検討してほしい。
- ・これまでの使い方を前提にすると、低学年は教室で音楽の授業を行うので、音に配慮したい。
- ・低学年はコモンズ全体がひとつの教室のような空間がよい。
- ・掲示できる場所が多くほしい。ただ、掲示することで満足してしまっている面もあるので、掲示を学びにどう生かしていくのか、そのためにどのような環境がよいのかは今後も考えていきたい。
- ・アナログの掲示に加えて、デジタルでの掲示（情報共有）も考えていきたい。
- ・教師用の机と収納は必要だが、教室の中にないとけないかということも必ずしもそうではない。
- ・電子黒板やタブレット保管庫等も新たに増えて教室の中に様々なものがあふれるようになってきているので、教室の外にあっても問題が無いものは積極的に外に出していきたい。

○学年配置

- ・チーム・コモンズを低・中・高のまとまりとする以外の構成も考えられるので、学年配置は入れ替えできる構成としたい。

○着替え

- ・体操服で登校するスタイルなので、それほど着替えが困るということはない。
- ・将来的に、衛生的、健康的にどうかという議論もあるので、着替えができる場所は想定したい。

○トイレ・水まわり

- ・トイレの5K（汚い・くさい・暗い・怖い・壊れている）を解消し、行きたくない、怖いと思われたい、居心地のよいトイレとしたい。
- ・トイレには窓があって、明るく、風通しが良い（空気が悪くならない）環境としたい。
- ・多目的トイレにしか行けない児童もあるので、その点の配慮をしてほしい。
- ・手洗いを自動水栓にしたい。
- ・教室の外の流しスペースまわりに、歯ブラシセット、タオル、雑巾がけ等のスペース確保が必要。

○発表・表現の場

- ・教室の次のサイズが体育館になってしまうので、発表の場は整えたい。

○ICT

- ・タブレット端末は自宅への持ち帰りもしている（自宅学習ができる反面、登下校の荷物が増えている）。
- ・チームで画面を共有するための設備、ネットワーク環境がまだ脆弱で、協働的な学びという形での利用はこれからの状況。

○特別支援

- ・普通学級と特別支援学級が関係していて、仲間外れ感がないようにしたい。
- ・交流学習も多いので、行き来しやすい関係としたい。
- ・音環境に過敏な子どももいれば、交流が必要な子どももいるので、子どもの個々の状況に応じて、年度や学級単位で場所が選択できるとよい。
- ・校庭の状況が気になってしまう子どももいるので、直接校庭が見えないほうがよい場合もある。
- ・45分間ずっと集中することが苦手な子どもがいて、少し身体を動かしてからまた学習に戻るという場合もある。他の学級の児童の気が散らないようにするなどの配慮も必要になる。

○個別指導と多様な環境

- ・毎年個別指導が必要な児童、教室に登校できない児童がいるので、その子たちのための環境や、クールダウンできる場所が欲しい。

○中庭

- ・いままでの学校であれば、上足のままだと出ない場所になってしまうので、出る前提で中庭をつくっていくのであれば、上足のまま出ても問題がない造りとしてほしい。

○学校図書館/ラーニング・コモンズ

- ・近所に大きな図書館がなく、学校に本を置く場所もない状態を改善したい。
- ・ランチルームを兼用する場合、こぼしたり吐いたりしてしまう児童もいることに配慮した床仕上げとしたい。
- ・児童の成長、体格差に配慮した座席としたい。

○特別教室

- ・特別教室間で音が課題とならないように配慮してほしい（6学級規模なので、同時に複数の特別教室を利用することは想定しにくいいため、音楽室を遮音することである程度対応できるのではないか）。

○教職員の働く環境

- ・明るく、先生同士が話しやすい環境がよい。
- ・カフェのような雰囲気の場所があるとコミュニケーションが図りやすい。
- ・教員によって、どの仕事をどの場所で行うのかは違うが、先生同士のコミュニケーションが図りやすく、気軽に相談したり、話し合ったりでき、チームとして一緒に活動、学び合える環境を目指したい。
- ・自分の教室で作業をする教員もいるが、職員室に来ると楽しい、刺激がある、交流ができると

いう場所で、職員室に居たくなる、来たくなる場所としたい。

- ・学校ができた当初よりも支援員等学校に係る人が増えて職員室が狭く感じるようになった。
- ・職員室内のレイアウトを変えられるようにしたい。
- ・校務用の PC が優先接続で席から動かせない状況であるが、どこにでも持って行けるような形にできればより自由度が高まる。
- ・個人席の大きさは小さくなくても広い作業スペースなどが確保されていればよい。
- ・教材室と印刷室が一緒になった教材研究の場所があるとよい。
- ・十分なロッカースペースや印刷室にドリルなどの置き場所があると、個人の机まわりに何でも持ってこないといけない状況は解消できる。
- ・事務室がある学校が少ないが、機密性のある文書や電話等を扱う場合に、同じ職員室内ではないところで対応できるとよい。事務が管理する書類は多い。職員室（教員）と離れすぎない方がよい。
- ・教職員数が少ないので、授業時間中に児童が職員室に来ると事務職員が対応している場合が多い。事務室を職員室から話す場合は、事務職員の席を職員室内にも設けたい（できるだけ一体的にしてどちらも対応できるとよい）。
- ・インターフォンなどの設備的な対応も必要ではないか。

○職員室まわりでの児童とのコミュニケーション

- ・児童が職員室に自由に入ってくるか、制限しているかは現時点では学校ごとに異なる。職員室内では児童のことを様々に話し合っている状況でもあるので、児童とコミュニケーションできる場所は分けたり、選んだりできるとよい。

○保健室

- ・子ども達が入りやすい場所としたい。
- ・新型コロナウイルスの対応で第二保健室（陽性の疑いがある子どもを別室対応とするため）が必要となっている。保健室内で静養室を区画することでは対応できないと思う。
- ・外から直接保健室にアクセスできるようにしたい。

○相談・カウンセリング

- ・スクールカウンセラー等と保護者が面談する機会も多く、子どもから見えない位置に相談室が設けられているとよい。

○校庭

- ・学校活動上は 160m トラック、斜めであっても 100m 直走路が確保できるとよい。

○地域施設の利用

- ・近くに公民館等の施設があっても日常的に交流しているわけではないので、心理的な距離が遠い。

○木材活用

- ・紀州材の活用など、地域の良さを活かせる学校としたい。

(2) 先進事例視察で得られた論点

1) 視察対象校の概要

先導的開発事業応募時に掲げた4つのテーマ「新しい時代の学びとのための施設環境」、「学校時間外を含めた育ち、生涯を通じた学びの拠点となる学校施設」、「南海トラフ地震などの災害に備えるレジリエントなまちづくりとその核となる学校施設」、「豊かな海と緑に恵まれた自然を生かし、新しい時代のシンボルとなる学校施設」を切り口に、2022年8月に以下の先進校を視察し、統合校を検討するための参考として整理した。

特に、単学級規模で学級規模も同等程度であること、東日本大震災による津波による被害を受けて高台や内陸部に移転したこと、建物規模が同等程度で木造・木質化を図っていること、移転に伴い従来と周辺環境が異なる場所となりまちづくりにおける学校の役割が変化しやすい立地であることなど、状況や課題が類似している中、宮野森小学校は建物を分棟型にして耐火構造の渡り廊下で接続する建物構成とし、山下第二小学校は耐火構造を挟むことで別棟とする解釈を活用してコンパクトな建物構成としており、建築空間の構成や普通教室まわりの多目的スペースの考え方にも大きな違いが見られる。

視察校と統合小学校の概要

	東松島市立宮野森小学校	山元町立山下第二小学校	串本統合小学校
児童数(2022)	134人(横ばい傾向)	115人(横ばい傾向)	135人(減少傾向)
学級数	6+2	6+2	6+2
教職員数	15	17	
整備年度	2016年度	2016年度	2026年度
整備経緯	東日本大震災による津波被災からの高台への集団移転	東日本大震災による津波被災からの内陸部への移転	施設の老朽化、少子化、南海トラフ地震の津波被害に備えた高台移転
敷地面積	16,250㎡	16,466㎡	約25,000㎡
延べ床面積	3,999㎡ 校舎 3,087㎡ 屋体 898㎡ プールあり	4,692㎡ 校舎 3,752㎡ 屋体 861㎡ プールあり	4,700㎡ 校舎 3,500㎡ 屋体 1,200㎡ プールなし
階数・構造	木造・一部RC・S造 地上1階、一部2階	木造・一部S造 地上2階	木造・一部RC造 地上1階
木造化手法	分棟型	耐火構造による別棟	分棟型
給食	センター方式	センター方式	センター方式
複合化	なし	なし	学童保育施設
駐車台数	45	31	50+
隣接地整備	保育所・学童	保育所・こどもセンター	こども園

2) 視察で得られた着眼点と課題

先進事例視察により得られた着眼点と課題を、先に掲げた4つのテーマに分類して整理する。

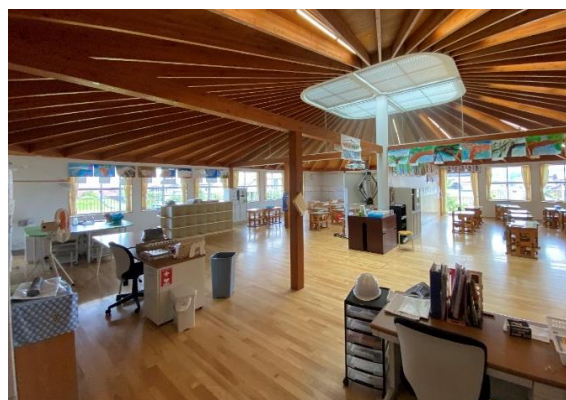
①新しい時代の学びとそのための施設環境【学習・生活環境】

○教室・教室まわり

- ・多様な学習形態に対応可能なゆとりあるスペースの確保が望まれる。
- ・隣り合う教室やオープンでつながる多目的スペースは、活動に応じて使い分けが可能だが、授業時の音環境に課題がある。
- ・教室と廊下の関係や活動、授業内容に応じて開閉できる仕切りなど、教室・多目的スペース間の音の課題を解消できる仕掛けづくりが必要である。
- ・一斉授業などが行える広いスペースだけでなく、個別指導やクールダウンができるスペースも教室まわりに設け、多様な子どもたちに対応できるようにする。
- ・収納の考え方は、どのようなものをどのような位置に収納するか、目の行き届く位置、使用頻度、必要となる寸法なども合わせて検討する。
- ・特別支援学級と普通教室との位置関係や距離などにも配慮した構成とする必要がある。



教室前に設けられた多目的スペース



教室とオープンでつながる多目的スペース



教室ユニットと廊下間の仕切り（開放時）



教室ユニットと廊下間の仕切り（閉じた状態）



音が仕切れるクールダウンスペース（廊下側）



音が仕切れるクールダウンスペース（室内側）

○トイレ・水まわり

- ・ゆとりのあるスペースを確保するとともに、明るく気持ちのよいトイレとする。
- ・LGBTの観点から、多様な子どもたちに対応できるバリアフリートイレを教室近くにも設置できるよう検討する。
- ・トイレまわりの手洗いでなく、教室まわりにも水まわりのコーナーを確保できるようにする。児童数に見合う蛇口数の設定など、使い勝手を踏まえた個数設定にも配慮する。



水まわり背面の物入スペース



ユニットに隣接した収納・水まわりコーナー

○図書室・特別教室まわり

- ・視察校では、図書室内に様々なコーナーや場所を選べる工夫などが随所に盛り込まれており、子どもたちが本を手に取り読みたくなるような空間づくりの工夫が必要である。
- ・木を基調とした温かみのある内装や、カーペットなど柔らかい素材の採用など、家具や内装材の仕様についても、その場所に応じて検討していく必要がある。
- ・図書室内へのトイレの設置など、授業や放課後の利用など状況に応じた対応スペースの確保も課題といえる。
- ・両校とも図書室にPC教室が隣接されていたが、タブレットの利用などにより、あまり使われていない。図書室の環境とともに、ICT環境の在り方も合わせて検討する。
- ・室内への見通しとともに、教科の掲示・展示スペースの在り方も合わせて検討する。
- ・理科の可動の実習台の採用など、様々な活動が生み出せそうである。広さとともに家具の考

え方も合わせて考えていくことが大切である。

- ・階段形状の多目的室など、発表の場や様々な活動に対応可能なスペースの在り方を検討していく必要がある。



木のぬくもりが感じられる内装（閲覧スペース）



木のぬくもりが感じられる内装（書架スペース）



様々なコーナーづくり（図書コーナー・ベンチ・小上がり）



図書室内に設けられたトイレ



階段状の多目的室とつながる音楽室



創作広場と連続した図工室

○管理諸室

- ・教材研究や教職員同士のコミュニケーションスペース、執務や校務分掌に応じた作業・収納スペースの確保など、働き合える環境づくりが望まれる。
- ・個人机や全員が集まれるスペースの考え方などによる執務スペースの広さ、家具の選定など総合的に整理していく必要がある。

- ・個人の収納スペース、教材庫、更衣スペースなど執務環境以外の共有スペースについても、部屋の広さと合わせて設置位置も検討していく必要がある。
- ・リモートの会議等にも対応できる音の仕切れるスペースの設置など、使い勝手に応じた機能の整理も必要となる。



屋根形状を活かした広がりのある職員室



個人机のある執務スペース



職員室内に設けられた作業・印刷スペース



職員室内に設けられたコミュニケーションスペース

○保健室・相談室ほか

- ・運動場からアクセスしやすく、職員室に近接させ連携が図りやすい配置が望まれる。
- ・隣接し連携しやすい相談室や保護者への受け渡しまでの待機スペース等、保健室まわりの充実も合わせて考えていく必要がある。
- ・シャワーやトイレの近接など状況に応じた対応ができる設備の設置を検討する。

○屋外活動スペースの活用

- ・視察校では、中庭に子どもたちを出さない運用がされており、上下足の履き替えや管理運用面への考え方を検討していく必要がある。



花壇など手入れの行き届いた中庭



校舎全体から見通せる緑豊かな中庭

②学校時間外を含めた育ち、生涯を通じた学びの拠点となる学校施設【地域連携・地域開放】

○地域の方々が気軽に立ち寄れる居場所づくり（地域ラウンジ）

- ・視察校のように、地域ラウンジなど、地域の方々が学校活動に参画できるよう、地域の方々の居場所を確保していく必要がある。
- ・メイン通りから見通せるなど、気軽に立ち寄れる配置とするとともに、独立して施設も可能なセキュリティにも配慮された安全な施設環境が整えられるとよい。

○連携しやすく、安全で管理しやすい地域開放エリア

- ・地域開放エリアを集約することで、地域開放しやすい反面、来校者の管理など、防犯面への考え方を検討していく必要がある。
- ・視察校では、子育て支援センターや保育所が敷地内に隣接されていたものもあり、建物配置も含め、学校と地域開放施設との連携が図りやすいようにする。



打合せ・相談コーナーを備えた地域ラウンジ



大通りからも出入り可能な地域ラウンジ



大通り沿いに設けられた玄関と昇降口



校舎前のフェンスのないアプローチ（遊歩道）

③南海トラフ地震などの災害に備えるレジリエントなまちづくりとその核となる学校施設

○避難所機能の拡充

- ・ 体育館の避難所としての機能や設備の拡充とともに、専用の備蓄倉庫の設置など、災害時の備蓄の考え方への整理が必要。
- ・ 災害時のバリアフリーな避難経路や津波対策での上階への避難経路の確保など、学校だけでなく地域の方々の利用を踏まえた施設整備が望まれる。
- ・ 維持管理などを含めた太陽光エネルギー、雨水利用などの再生エネルギーの導入検討とともに、蓄電など災害に備えた対応を検討する必要がある。
- ・ 断水時や停電時など災害状況に応じた設備やバリアフリートイレの設置など、様々な状況、多様な方々に配慮できる環境づくりが望まれる。

○災害の記憶の継承

- ・ 展示や掲示、記念碑の設置など、災害から学んだことを継承していける取り組みや仕組みづくりが行えるとよい。



車椅子で利用可能なバリアフリートイレ



2階に避難できる屋外階段が設けられた中庭

④豊かな海と緑に恵まれた自然を生かし、新しい時代のシンボルとなる学校施設

○串本町ならではの気候風土への配慮

- ・串本町は雨風が強く、移動の際は雨風の吹込みをしのげる通路などが設けられるとよい。
- ・砂塵対策など外部環境も含め気候風土に見合う細かな配慮が必要である。

○木のぬくもりの感じられる環境

- ・木のぬくもりが感じられ、子供たちが学びたくなるような落ち着いた環境を整える。

○自然を感じられ、自然と一体となった環境づくり

- ・教室から見える景色にも自然や四季が感じられ、学習に集中できる静かな環境が望まれる。
- ・ビオトープなど自然を体験できる場の在り方も検討していく必要がある。

省エネルギーで快適な環境の整備

- ・木造平屋建ての特徴を活かし、天窓などからの明かりの確保など、明るく風通しのよい環境により、快適な環境を確保する。



天窓を設け木を活用した明るく温かみのある内装

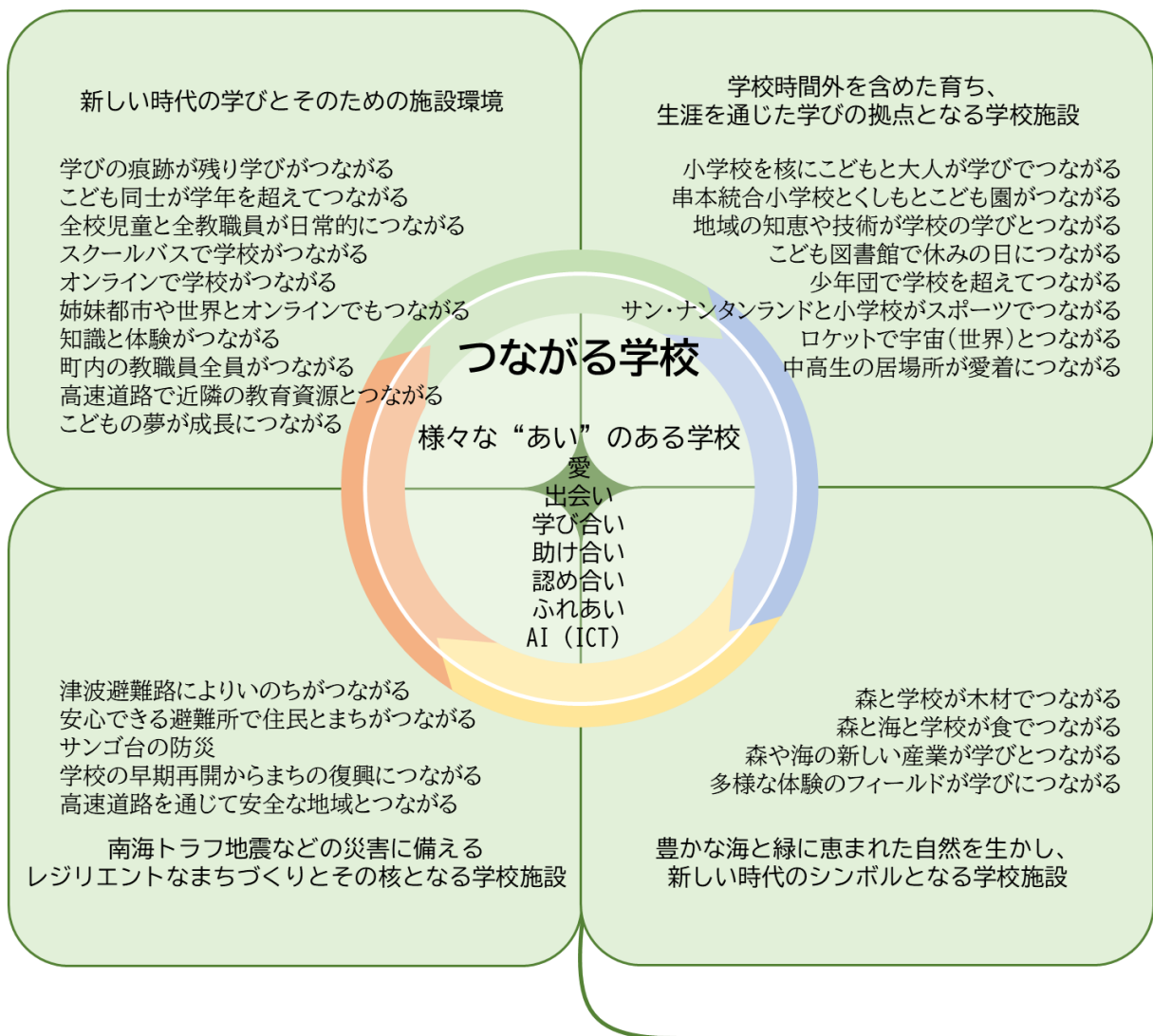


地域産材を用い大空間を構成した体育館

5 学校づくりの目標 つながる学校と4つの目標

串本統合小学校（仮称）の学校づくりの主題を「つながる学校」と定めた。その下に、応募時に目標として掲げた学校教育、生涯学習、安心安全、環境共生の4つのテーマが関わり合い、出会い、学び合い、助け合い、認め合い、ふれあいが生まれて子ども達、教職員、保護者や地域がつながる。また、一緒の場所で活動するというに加えて、ICTによって遠隔でもつながる学校になる。

地域の課題を強みに変え、今までの取り組みの良いところは継承し、新しいことにチャレンジする学校を目指す。



①新しい時代の学びとそのための施設環境

教室と廊下を中心とした環境から、学校全体が学びの場であり、多様な教育活動を行うことを前提とした教室、特別な時にだけ使う特別教室から教科を超えて様々な活動に常に利用される特別教室などへの転換を図る。子ども達個人の特性に応じた学びや学年を超えて一緒に活動することなど、学級単位だけでなく様々な活動場面に対応できる建築環境とする。同時に、統合小学校は町内のどの学校からも車により15分程度で行き来ができる場所になる。いつでも利用できるスクールバスの特性を活かし、統合小学校を拠点に集合しての学習とオンラインでの連携を組み合わせるなど、様々な活動の広がりに対応できる施設とする。

また、新しい取り組みにチャレンジするためには、教員が育つ学校、活動しやすい学校であることが重要であり、特に経験年数の少ない教員が同僚と一緒に試行錯誤する場、学校単体の同僚性から串本町全体がひとつの学校組織であるかのように連携しやすい環境を整える。

建築空間を活動しやすい環境として整えることに加え、家具、板書面、映像投影・共有、ICT環境等の校具、教科書、プリントや様々な教材等が気軽に利用でき、工作や表現等を含む多様な教育活動が実施できる場を目指す。

②学校時間外を含めた育ち、生涯を通じた学びの拠点となる学校施設

子ども達は学校だけでなく、家庭や地域などでも様々な活動や体験を通じて成長する。その活動のための場を学校施設が一番身近な場所として担う。串本町には豊かな自然、漁業を中心とした様々な職業体験の場、養殖やロケット等の最先端の新たな産業、サン・ナンタンランドや学校を活用したスポーツを通じた交流等、様々な学びの場がある。学校施設を会場とした教育プログラム、図書館の開放、スポーツ少年団等での体育施設の利用など、個人、団体に学校施設が放課後や休日にも利用しやすい、開放しやすい構成を目指す。

また、サン・ナンタンランドに併設されるB&G海洋センターの屋内プールを学校が活用したり、そこで実施する合宿や大会のサブ会場やウォームアップ会場として学校施設を利用する等、学校を含む高台（サンゴ台）一体で連携した活動を行うことを想定する。

③南海トラフ地震等の災害に備えるレジリエントなまちづくりと核となる学校施設

学校建設予定地であるサンゴ台地区は、JR串本駅をはじめとする中心市街地の後背地にある高台として、来るべき南海トラフ地震に備え、近年様々な公共施設が移転されており、まち全体の防災機能に大きな役割を果たしている。これまで、消防防災センター、病院、役場等の整備が完了しており、今回の統合小学校の計画により、避難所機能が強化される。現在建設中の高速道路のインターチェンジが整備されることで、津波等によって国道やJRが寸断されても他の地域・自治体と広域に連携・通行が図れる場所ともなる。

学校施設を災害時の避難所とするとともに、一方で保護者が安心して復旧・復興に取り組めるよう学校・学童機能の早期再開が求められることから、避難段階に応じて避難所機能を変化させやすい構成を目指す。

④豊かな海と緑に恵まれた自然を生かし、新しい時代のシンボルとなる学校施設

校舎の規模、古くから木材供給地となってきた和歌山県の特徴、温かみがあり居心地の良さなどの木造ならではのメリットから、積極的に木造・木質化を図る。また、健康で快適に過ごせる室内環境、空調や照明等に極端に頼らない環境に配慮した学びの場とするため、ZEB Ready（一次消費エネルギーを50%以上削減）をひとつの指標とする。電力の供給が一時的に止まっても活動できる避難所としての役割も強化される。

串本町は地形や黒潮の恩恵により、夏涼しく、冬暖かい気候である。そのため、天候のよい時には積極的に自然採光や通風を取り入れ、中庭や校庭等の屋外を学びの場として活用できる建築を目指す。同時に台風の通り道でもあり、地形的にも風の影響を多大に受けて、雨は横から降る。スクールバスの乗降場や渡り廊下等、天候に関わらず利用する場所は、地域の特性に応じた設えとし、厳しい天候であっても活動しやすい環境を目指す。

また、統合小学校の立地はサンゴ台でも高台に位置し、新たに開通したサンゴ台中央線沿いに面する。道路を挟んで隣接するくしもとこども園を含めて、日中は子ども達の活動の様子を感じられ、夜間や休日は地域利用の灯りが道路や住宅地から見える場所ともなる。高台で周囲が一望できるため、スペースポート紀伊のロケットを見ることもできる。地域の景観形成や周囲の眺望を活かした計画とする。



橋杭岩とロケット（イメージ）

6 基本計画

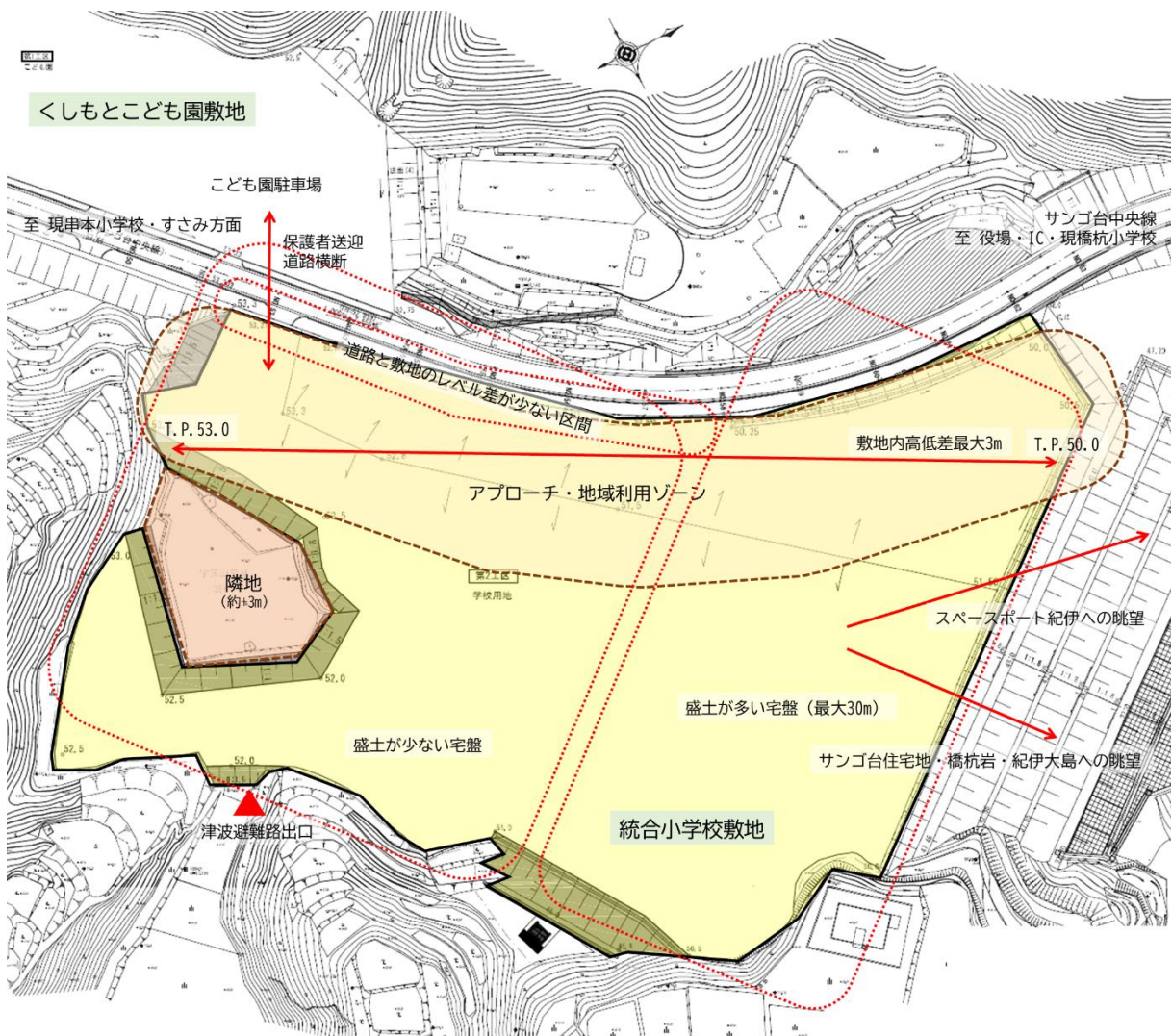
(1) 基本方針

1) 全体計画の方針

計画敷地は高速道路建設に伴う残土処分場として新たに造成された土地である。大部分が盛土で、敷地南西部に一部切土が含まれる。敷地は一段造成ではあるものの、水勾配などから南北方向で約3mの高低差が生じている。南側に隣地があり、敷地形状が異形である。

サンゴ台中央線は国道42号線から串本インターチェンジへ接続する道路で、現在それほど交通量は少ないものの、高速道路の開通に伴って交通量の増加が想定される。敷地との接道は敷地南西部で道路に面する部分の半分程度の距離に留まり、半分は段差が生じている。また、統合小学校敷地部分が坂路の頂上付近で、緩やかなカーブとなっており、見通しの確保や速度を抑える工夫、横断歩道や信号機の設置等について、交通状況を見ながら警察などとの相談が必要である。

道路を挟んで隣接した位置にくしもとこども園が整備されており（2022年度開園）、こども園の送迎と学童保育の送迎などを同時に行う家庭がいることも想定される。



①造成敷地を考慮した土地利用

北東側に向かって谷が降りている敷地を造成しており、南西側が切土または盛土量が少ない敷地である。このため建物の配置位置は、南西側を建物敷地、北東側を校庭敷地と想定する。また、敷地面積と計画延べ床面積から、建物は平屋または2階建てとなる可能性が高く、杭工事がないまたは少ない木造などを積極的に検討する。

②地域に開く、地域と連携する

接道はサンゴ台中央線のみであり、周囲は山林である。学童保育施設を併設し、学校施設を積極的に地域も利用する施設とすることから、地域が利用する施設はサンゴ台中央線沿いに配置することが望ましい。また、若年者と高齢者を除いて多くが自家用車を利用する地域性を考慮し、特に地域が利用する駐車場はアクセスがしやすい場所に設ける。

地域開放は地域の状況に応じて開放範囲を段階的に設定できることが望ましい。現在地域が利用している校庭及び体育館に加え、学校図書館、特別教室等は積極的に開放できる位置とする。

③くしもとこども園と連携する

くしもとこども園の延長保育、小学校段階の学童保育はそれぞれ別施設で実施されるものの、保護者による送迎は同時に行われる可能性が高い。子どもや保護者が車や徒歩で道路を横断する等の行動を予測し、送迎や行き来がしやすい位置に学童保育所を設ける。

また、学校図書館や多目的ホールをこども園が利用する（単独利用もあれば、幼小連携の交流活動も考えられる）ことも想定する。

④サンゴ台全体の公共施設が連携する

敷地から徒歩数分の位置に総合スポーツ公園が整備されており、B&G海洋センターが運営する屋内プール（公設民営）がある。このため、学校用プールは整備しない。サンゴ台の住民が利用できる施設は現在サンゴ台集会所しかなく、近隣の住民の利用や、役場や総合スポーツ公園などで開催するイベント等に利用されることも想定する。

⑤串本町全域及びサンゴ台地域の防災機能の一部を担う

サンゴ台は高速道路が整備されることで津波被災によって孤立することが想定される串本町の避難・復旧・復興の拠点となる。サンゴ台には役場、消防防災センター、病院、水道タンク等が集積され、今後インターチェンジの整備に伴って、周辺活性化施設（道の駅）やガソリンスタンド等も整備予定である。そのため、避難者の生活確保を優先した避難所計画とする。

⑥南西敷地の活用

字元山平見の隣地により死角になりやすい南西部は将来の隣地計画に応じて使い方を变化できるように、使い方を固定化しない計画とする。また、サンゴ台中央線沿いの駐車スペースが不足する場合（イベント時等も含む）に臨時的駐車スペースとして活用できる余地として確保する。

2) 施設計画の方針

①諸室をグルーピングし、有機的につながるコモنزをつくる

学校全体を、複数の教室、多目的スペース、小室（デンやカームダウンスペース等）、教材・教師スペースをまとめ、個に応じた学びや協働的な学び、多様な活動が行いやすいいくつかのコモنزで構成する。普通教室は多目的スペースを持った複数の学年で利用するチーム・コモنزに、図書館は多目的ホール（ランチルーム）とまとめてラーニング・コモنزに、特別教室は教室間が連携しやすく教科横断や合科が行いやすいSTEAM コモنزに、職員室は教材制作や打合せスペースを包含した教職員コモنزとして構成する。各コモنزは、建具や可動間仕切り、多様な家具、ICT 機器やIoT 設備等によって多様な活動空間となる。

コモنزは教室・スペースが集合したユニットではなく、教室等の専用スペースを含めて学級や学年などがシェアして活動できる場として計画する。

②廊下や中庭を活動空間に取り込む

各コモنزと連続する廊下や中庭は、教室等と連続した学習スペース、学習の成果等の掲示・展示のためのギャラリー、柱や壁等によってできるニッチスペースを活かしたホッとできる場所など、建築や使い方の工夫によって活動空間とできるように構成する。特に、学習の成果は、制作した学年を超えて、他学年、保護者、他校の児童等に見てもらえる環境をつくり、学習成果を通じた交流ができるように構成する。

渡り廊下、テラスや中庭等の校舎まわりの屋外・半屋外空間は、天候の良い時間や季節等に活動を広げる場としても利用できるようにする。一方で、台風の時期等、海からの風の影響を多大に受けることから、日常的に利用する空間は風雨を制御できるように配慮する。

③低層の建築を活かし屋外と積極的に関わる

教室まわりからすぐに校庭に出られるように、昇降口の位置を校庭側にするか教室まわりに専用の玄関を設ける。また、上足のままで利用できる中庭やテラス空間を設ける。中庭は遊び場であるとともに、創作の庭、カフェテラス、読書テラス等、屋内の機能と連携して活用できるように、家具や水まわり等の設備を工夫する。

④地域利用や避難所利用を可能とする区画構成

学校、地域開放（体育館の単独開放と校舎の開放）、学童はそれぞれ利用頻度、利用時間等が異なる。特に地域開放や学童での活用は、学校管理下とは異なるため、普通教室まわりや職員室まわりなどの開放しない（できない）場所とゾーンを分け、管理扉等で制御できるように計画する。管理扉を利用せず組織間の話し合いとルール等によって運用でカバーすることも想定する。学校の昇降口に加えて、体育館開放、校舎開放、学童のそれぞれに専用の玄関を持ち、出入口から分けることができる計画とする。

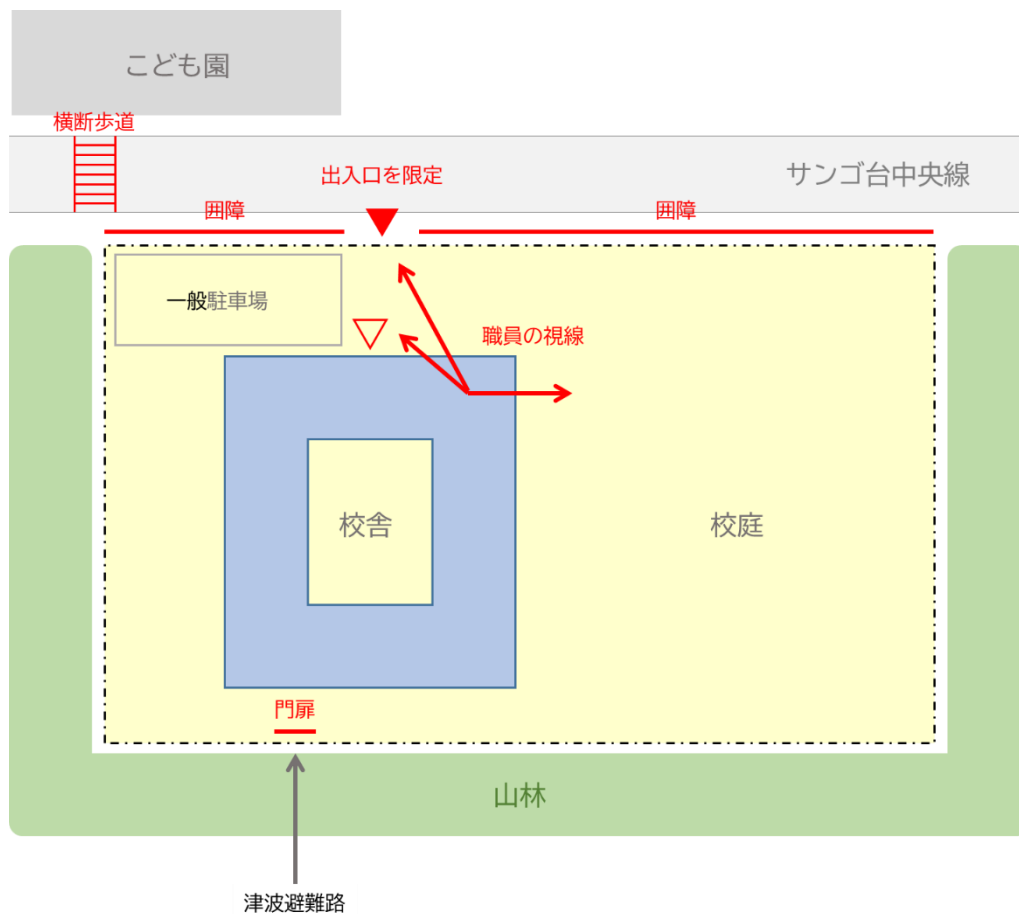
また、地域開放の区画は避難所として開放する区画とほぼ重なり、管理扉による制御も可能となる。避難所の場合は同時に物資の搬入等、屋外からのアクセスも想定されるため、通常の玄関の他に避難所運営を想定した出入口を計画する。

⑤敷地内の自由な活動を担保するセキュリティ計画

町内のほとんどの学校では、門扉や囲障がなく、自由に敷地内に入ることができる環境である。一方、学校施設の地域利用を今まで以上に進め、様々な活動を可能にするためには、子ども達が安全安心して活動できる環境づくりは不可欠である。本敷地は、三方向を山林等に囲まれており、サンゴ台中央線沿いの侵入・接近の制御により、セキュリティは確保しやすいため、敷地外からの出入口には常に人の目が通るように、日中大人がいる部屋の配置を工夫する。

また、わかりやすい屋外動線とし、玄関は教職員の目が届きやすい場所に置く。学校の校庭は近所の公園のような役割も果たしており、職員室等から常に見渡せ、何かあれば声かけしやすい環境とする。

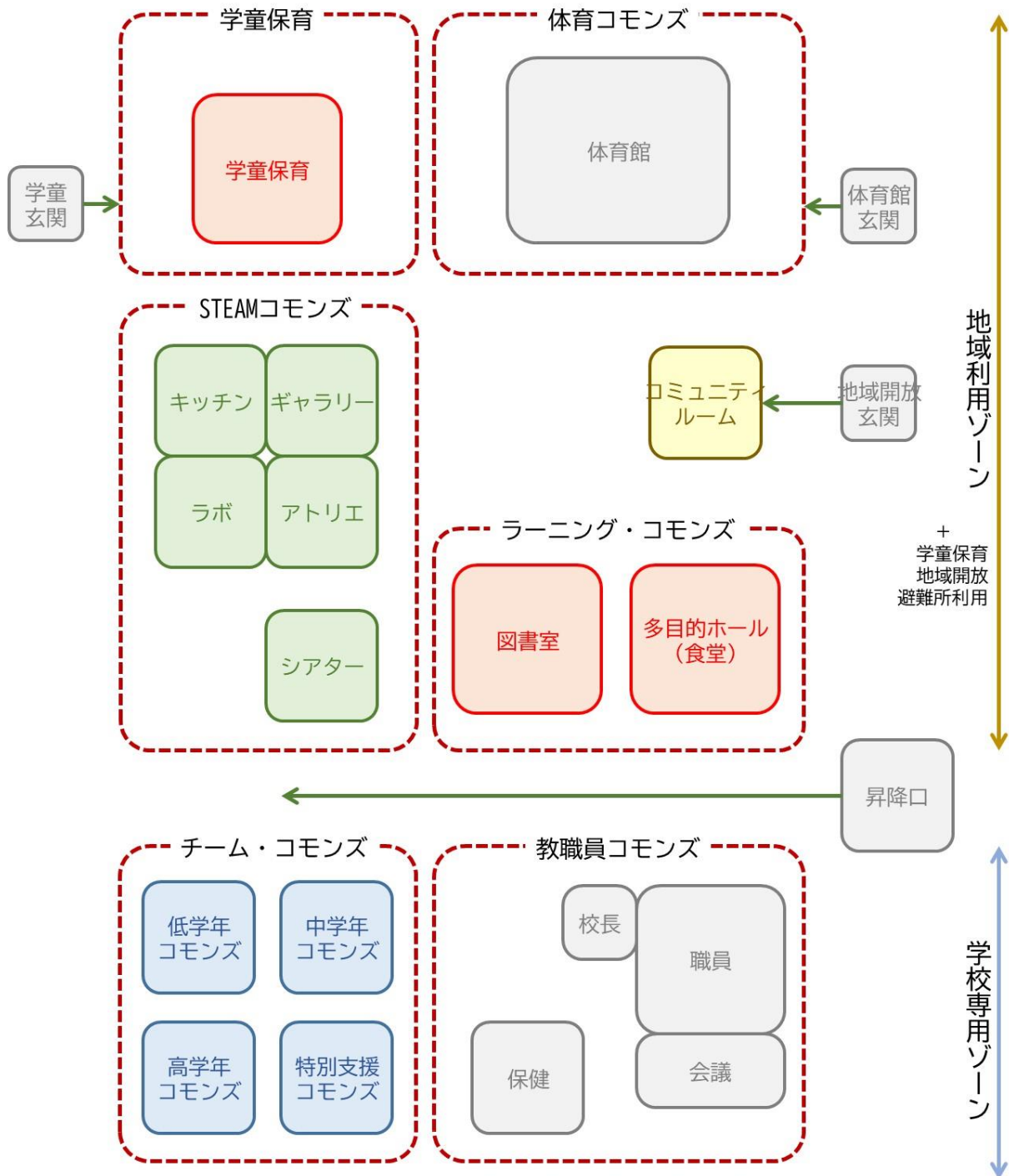
なお、津波避難路の出口が敷地南西部に接続しているため、自主防災会等との協議によって避難路の運営方法等を今後決める必要がある。



(2) 施設の構成と面積

1) 施設構成の考え方

諸室をまとめて大きく6つのコモンズにまとめる。コモンズの中は柔軟で自由度の高い空間として構成する（各コモンズの詳細は後述する）。学校は学童保育を除く5つのゾーン全体を活用し、地域はコミュニティルームを中核に、体育コモンズ、ラーニング・コモンズ、STEAMコモンズまで利用することができる。



ゾーン構成のイメージ

①セキュリティと学校活動の要となる教職員コモンズ

教職員コモンズは正門、昇降口、一般駐車場、校庭が見える位置に置く。また、来校者への対応や子ども達の様子が把握しやすい関係とする。

②校庭に面するチーム・コモンズ

校庭と中庭にすぐに出られる、見える位置にチーム・コモンズ（普通教室）を置く。チーム・コモンズは廊下等によって活動が制限を受けないようにひとまとまりの空間として構成する。

③安定した環境と気軽に普通学級と交流できる特別支援コモンズ

特別支援コモンズは音や光に配慮が必要な児童、普通学級との交流学习等、個人個人の状態に応じて学習環境や生活環境が整えられる位置に置く。知的、情緒、肢体不自由の3つの障害別のクラスを設置でき、子どもの状態に応じて建具や家具等で集団編制を変えて利用できる構成とする。普通学級同様、校庭や中庭に出やすい位置とする。

④学校の中心となるラーニング・コモンズ

どの学年からもアクセスしやすく、気軽に授業や休み時間に利用できる位置に図書館、ラーニング・コモンズを置く。ラーニング・コモンズは放課後や休日にも子ども達やその保護者等に開放できるようにするため、玄関からわかりやすい位置関係とする。

⑤多様な活動に対応できる STEAM コモンズ

特別教室での授業展開は1集団が多くなる6学級規模を活かし、教科の専門性を確保しながら、隣の特別教室も自由に利用しやすい STEAM コモンズとする。音、臭い等に配慮しつつ、閉じていても利用できる環境とする。教科を横断した探究型の学びや総合的な学びの時間等の、教科に捉われない多様な学びにも利用できる環境とする。

⑥地域利用を想定する諸室のゾーニングと動線の確保

将来的に学校を支える地域組織の設立も視野に、学社融合・連携した取り組みの拠点としてコミュニティルームを整備する。コミュニティルームは施設の貸し出し対応や学校における地域住民・組織の居場所ともなる。コミュニルームを要として、体育館、ラーニング・コモンズ、STEAM コモンズは開放しやすい関係性、動線とする。

⑦外から利用しやすく学校施設も利用しやすい学童保育施設

保護者の送迎や休日などの学校が空いていない時間の利用を想定し、地域から利用しやすい位置に置く。体育館やラーニング・コモンズ等の地域に開放する施設は学童保育からも利用しやすい位置関係とする。

2) 面積構成の考え方

各コモন্ズの想定面積を算出するため、各室の単位面積を想定し、積み上げにより目標面積を設定する。下記の表を基準としながら、各室に想定される機能が充足し、総面積内に収まるように計画を検討する。各面積は計画・設計の工夫により、まとめたり、分割したりする。

○校舎の室面積構成

室名		室数	面積	小計	備考
低学年コモন্ズ	教室	2	70	140	24人(最大30人)
	ワークスペース		60	60	
	教材・小室		20	20	
中学年コモন্ズ	教室	2	60	120	24人(最大30人)
	ロッカー		20	20	
	多目的スペース		80	80	
高学年コモন্ズ	教室	2	60	120	24人(最大30人)
	ロッカー		20	20	
	多目的スペース		80	80	
特別支援コモন্ズ	教室	2	30	60	知的・情緒
	小教室		30	30	通常時は分割して活用
	プレイルーム		60	60	
	教材		10	10	
	トイレ		20	20	専用
通級指導教室	教室	1	60	60	
生活	昇降口		80	80	
	トイレ		150	150	位置により適宜分割
	更衣		20	20	
ラーニング・コモন্ズ	図書		150	150	準備含む、1.5万冊
	学習室		50	50	
	小室・スタジオ		30	30	
	多目的ホール		150	150	ランチルーム兼用
	配膳室		30	30	
STEAM コモন্ズ	シアター	1	60	60	遮音
	アトリエ	1	60	60	一体利用
	ラボ	1	60	60	
	キッチン	1	60	60	
	ギャラリー		80	80	
	準備室		90	90	

教職員コモンズ	校長		40	40	
	事務・職員・教材		200	200	執務、打合せ、給湯
	職員更衣・休憩		40	40	
	職員来客トイレ		40	40	
	用務員室		30	30	作業スペース
保健・かゆりぐ	保健室		50	50	
	かゆりぐ		10	10	
会議	会議		50	50	必要に応じて分割
地域交流	コミュニティルーム		70	70	和室含む
倉庫	倉庫		50	50	
	防災備蓄		50	50	
上記計				2,600	
廊下・共用部				850	
合計				3,450	≦3,500 m ²

○体育館

室名		室数	面積	小計	備考
体育コモンズ	メインアリーナ		680	680	24m×28m
	サブアリーナ		100	100	軽運動等
	器具庫		50	50	
	ミーティング		40	40	
	トイレ		30	30	
	玄関・廊下		100	100	
合計				1,000	≦1,200 m ²

○学童保育

室名		室数	面積	小計	備考
学童保育	保育室		130	130	分割可、ロッカー含む
	多目的スペース		50	50	
	トイレ		30	30	
	学童事務		40	40	
	キッチン・教材		30	30	
	玄関・廊下		70	70	
合計				350	≦500 m ²

(3) 施設計画

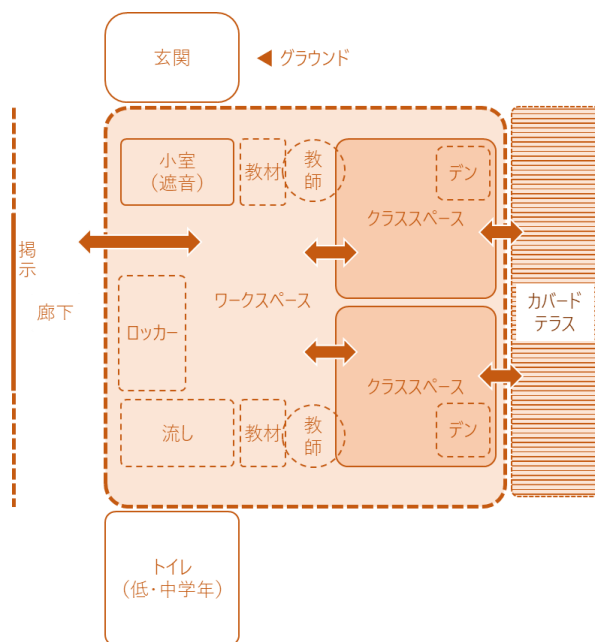
各室・スペースの考え方を整理する。

1) 新しい時代の学びとのための施設環境

①チーム・コモンス

○低学年コモンス

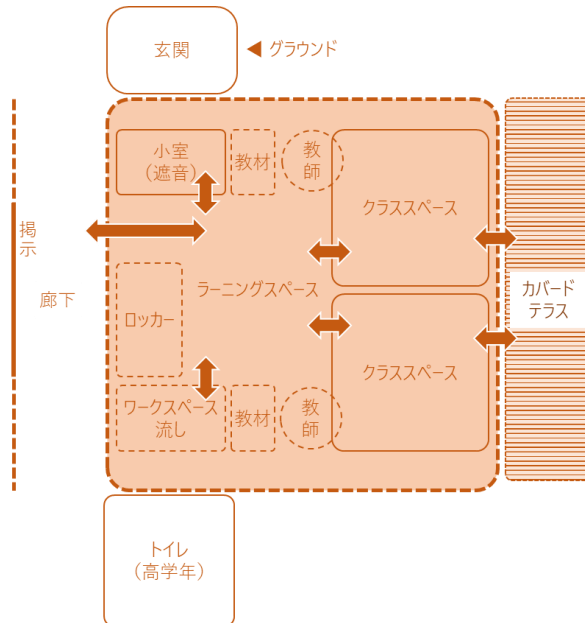
クラスでの活動を主体にワークスペースまで広がりを持たせた学びの場。



- ・クラススペース (7.2m×7.2m)
音楽や生活科等も行う総合的な学習教室
ワークスペースとは開放できる建具などで仕切ることによって授業時等の音に配慮する
カバードテラスは屋根のかかった屋外空間とし、クラススペースと連続して活動スペースとして活用する
- ・ワークスペース
クラススペース、小室、教師スペース等をつなぎ、連続した学習・交流空間とするためのスペース
- ・ワークスペースに連続した小室
音を遮ることができ、作業や話し合いが行える活動の幅を広げるスペース
(取り出し学習やカームダウンスペース等にも活用)
- ・デン
子どもたちの隠れ家のような小空間
クラススペース内もしくは連続した場所に確保され、本棚、ベンチやソファ等で居心地の良い場所として設える
- ・低学年用トイレ
低学年の体格に配慮された独立したトイレ

○中・高学年 commons

クラススペースとラーニングスペースが連続した一体的な学びの場。



・クラススペース (7.2m×7.2m)

クラススペースとラーニングスペースとを建具などを開放し、一体でも使用できるようにする
(活動内容、利用人数等に応じ、建具を閉じ単独での利用や建具を開放し一体での利用に配慮)
低学年 commons 同様、カバードテラス* (縁側) も活動スペースとして活用

*カバードテラス：手洗い、流し、下足箱などを設置

・ラーニングスペース

ワークスペースも活動スペースと捉え、小室やワークスペースも学びの場として設える
2学年一体でも、学年毎でも活動が行えるような環境づくりを行う (家具、壁面など)
児童のロッカーや教材、教師のスペース、流し等が設けられた生活・交流スペース

・ラーニングスペースに連続した小室

音を遮ることができ、作業や話し合いが行える活動の幅を広げるスペース

(取り出し学習やカームダウンスペース等にも活用)

更衣スペースとしても活用できるようにする

・デン

本に囲まれ子どもたちの隠れ家のような小空間。教室内に設けカームダウンスペースにも活用

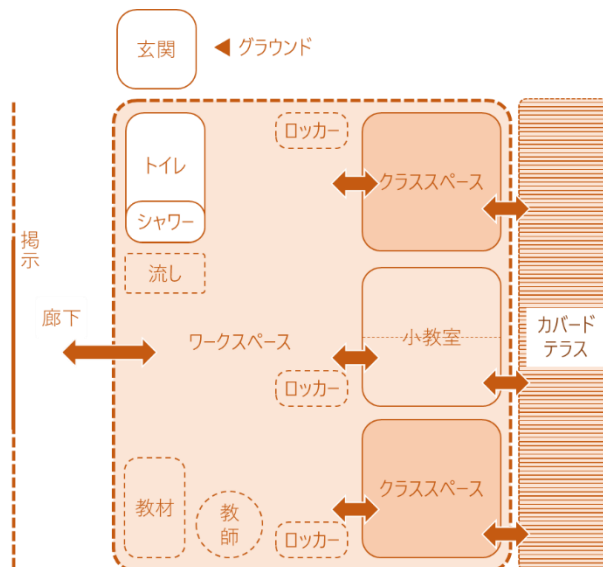
・中・高学年用トイレ

中・高学年 commons に近接し、明るく清潔で気持ちのよいトイレとする

コミュニケーションスペースとしても位置付けられるよう水まわりのつくり方など工夫する

○特別支援コモンズ

設置される学級（障がいのある児童の在籍状況）や子どもの状態に応じて、スペースを区分したり、一体的に使ったりできるひとまとまりの空間。



・クラススペース

30㎡程度の教室とプレイルーム（オープンスペース）を組み合わせる。知的障がい、情緒障がいの2学級を前提とし、肢体不自由児が在籍希望する場合にある程度受け入れることができる環境とする

*カバードテラス：手洗い、流し、下足箱などを設置

・小教室

知的障がいや情緒障がいの在籍児童の増加、複数学年による集団編制、肢体不自由児の在籍等に柔軟に対応するため、クラスルームに転換できる小教室とする

・ワークスペース・プレイルーム

多様な課題を抱える子どもの状態に対応するために、工夫できる教室の外の空間。感覚統合が苦手な児童に対して動きを伴う活動ができたり、教師の工夫で様々な活動に対応する

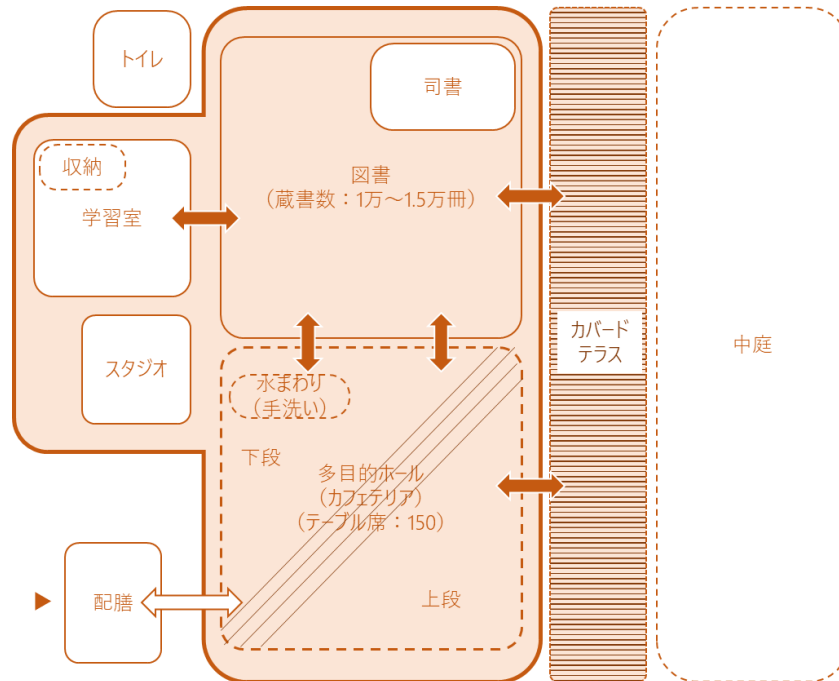
・トイレ・手洗い

車いすやオストメイト等に対応したトイレ、汚した場合に対応できるシャワーブース、特別支援コモンズ内で図工や理科等の活動もある程度できる作業流し等を備える

②ラーニング・commons

学校の中心に配置し、クラスを超えた学習、発表の場として位置付ける。

図書・学習室・多目的ホール・スタジオ（放送）が空間的に連続したラーニング・commons。



・図書

蔵書数 1 万～1.5 万冊の図書を配架できる図書スペースとし、人的配置や設備の導入などにより、地域開放もできるようゾーニングする

書架、新刊展示、ブラウジング、閲覧スペース等、様々なコーナーづくりを行い、利用人数や目的に応じた居心地のよい場所とする。

・学習室

音が仕切れる部屋とし、多様な活動にも対応できる環境を用意する。(グループワーク・発表等)

・多目的ホール・スタジオ

多目的ホールは式典や集会などで利用可能な環境とするとともに、図書の閲覧・発表などの学習活動にも活用できるようにする。

給食時にも利用できるように、上段と下段合わせてテーブル席で 150 席を確保する

上段・下段ともにステージにも客席にもなるようにする (椅子席、テーブル席、床座など多様な席タイプに対応できるよう工夫)

スタジオはホールの調整室や映像等の撮影スタジオにも利用できるようにする。

・トイレ・手洗い

食事や式典利用時にも対応可能なトイレ・手洗い数を確保する

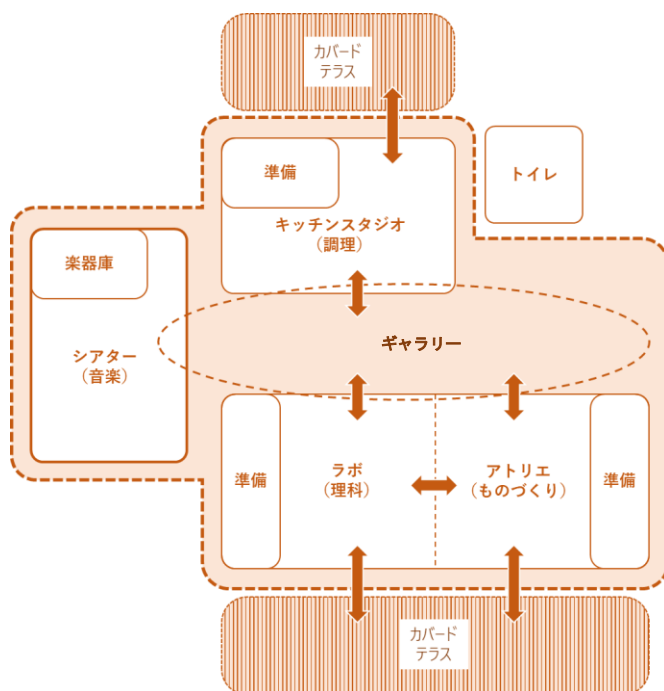
・カバードテラス (屋外の活用)

屋外での読書やランチテラスなど活動に応じて利用できる屋内外が連続した場とする。

③STEAM コモンズ

教科の枠に捉われず、様々な情報を活用し、子どもたちが常に興味関心を抱き続けられ、情報提供・情報発信スペースとなるようにする。

火気や薬品の利用、工具を使うなど活動に応じてスペースをシェアし展開できるようにする。



・ラボ・アトリエ

理科ともものづくりの教室を隣接させ、建具等を開放し広く一体に利用できるようにする

・キッチンスタジオ (調理)

授業や課外活動などにおいて、海と森の恵みを使って様々な活動ができる場とする
テラスでの試食など、屋外での活動も行えるような環境とする

・シアター (音楽)

遮音性や防音性を高めた音楽ホール

合唱や演奏など様々な演目に応じて心地よく利用できる音環境とする

・ギャラリー

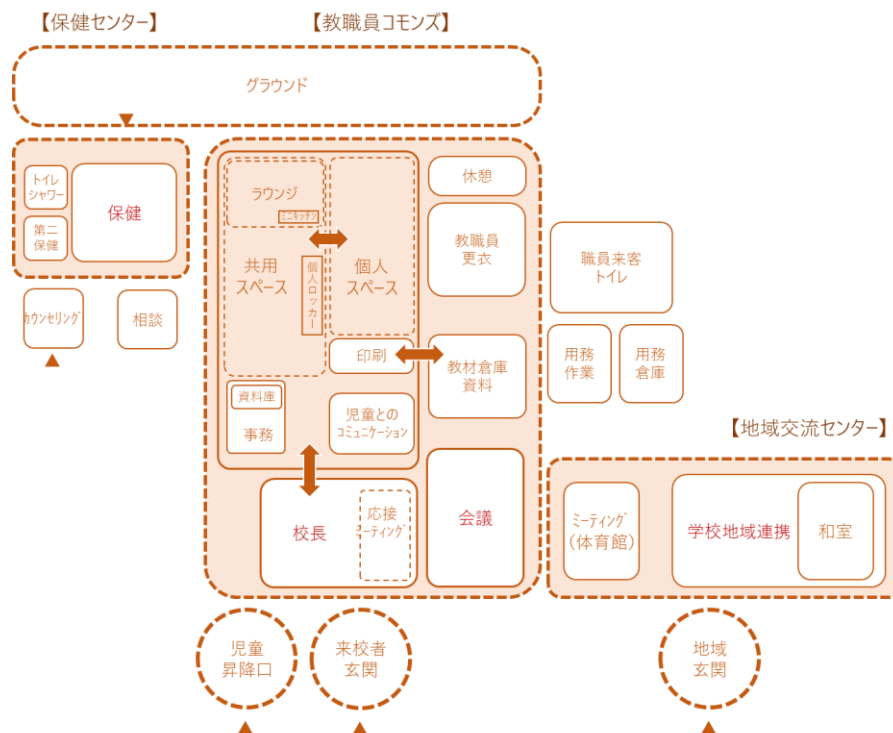
理科や図工等での説明・講義やプレゼンテーションでの活用、家庭科 (被服) での授業、音楽のパート練習スペースでの活用など、教科を超えた活動スペースとして位置付ける
各教科の授業活動成果の展示・掲示スペースなど様々な用途に活用

・カバードテラス (屋外の活用)

栽培や観察、大工や塗装作業、屋外での試食やランチテラスとの一体利用など屋外の活動場所として授業などで活用できるようにする

④教職員コモンズ

子どもと教職員、教職員同士、地域と教職員が、共に教え合い、学び合い、互いが切磋琢磨できる環境を用意する。学校のみならず地域との連携が図りやすい施設構成・施設配置とする。



・教職員コモンズ

グラウンドや登下校の様子が垣間見られる位置とし、子どもたちの安全や来校者管理が行いやすいようにする

個人で利用可能なスペースと共用で利用可能なスペースの双方を活用でき、作業や制作内容に応じて使い分けられるようにする

児童との相談スペースやラウンジなど様々なコーナーを設け、リフレッシュ・コミュニケーションスペースとして活用できるようにする

グラウンドや昇降口、来校者玄関などに面し、子どもたちや来校者に目の行き届く配置とする
事務スペースには専用の資料庫を設け、個別管理ができるようにする

・校長室

事務スペースや教職員のスペースと近接して配置し、連携の図りやすいようにする

・保健センター

グラウンドから行き来しやすく緊急車両が寄り付きやすい配置とし、緊急時等に対応しやすいようトイレやシャワー等の設備を併設する

教職員コモンズとの連携が図りやすいよう近接して配置する

保健室と仕切れることも可能な第二保健室を隣接させ、感染症への対応などが行えるようにする

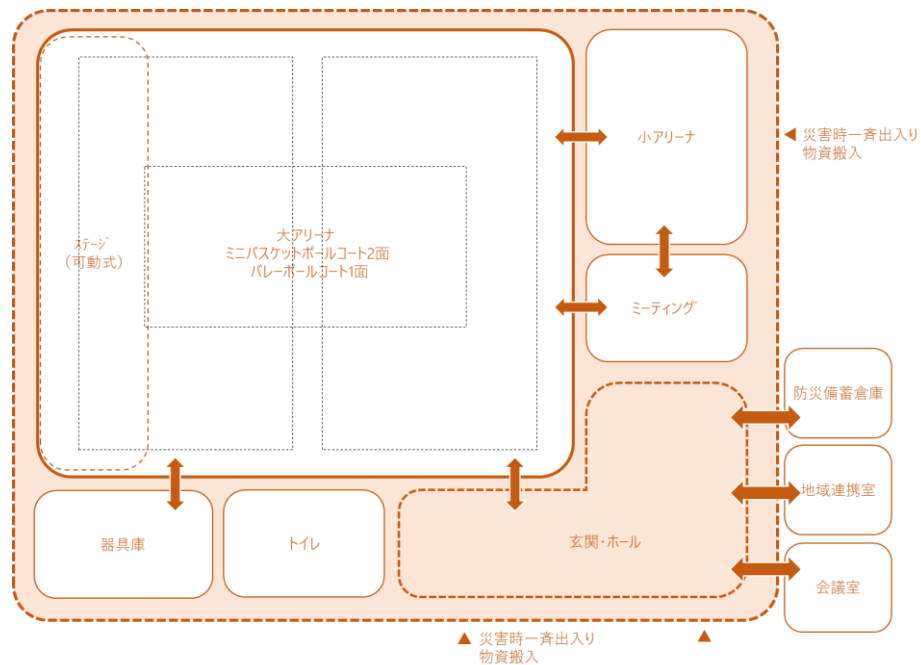
・地域交流センター

地域の方々が気軽に立ち寄れる場所であるとともに、開放管理が行える位置に配置する

⑤体育コモンズ

競技に応じた広さを確保するとともに、明るく風通しのよい快適な場所とする。

地域開放利用や災害時の避難所として独立して利用も可能な施設配置・施設構成とする。



・大アリーナ・器具庫

ミニバスケットボールコート2面、バレーボールコート1面が確保できる広さとする
ステージは可動式とし、スペースの有効利用を図る

授業時に必要な器具等の収納スペース、及び、地域利用を考慮した収納スペースを確保する

・小アリーナ

卓球や軽運動が可能な広さを確保。災害時の要配慮者の避難スペースとしても活用

・ミーティング室

体育の講義授業や地域開放時の会議スペース等にも利用。災害時の救護・静養・更衣スペースとしても活用

・トイレ

大人数での利用（授業時、地域開放時、災害時など）を考慮した手洗いや便器数を確保する。
明るく開放的な場所とし、誰もが利用できるバリアフリートイレも合わせて整備する

・コミュニティルーム

地域の方々の居場所とするとともに、地域開放管理など運用面にも活用できるスペースとする

・玄関ホール

災害時における全校児童の一斉の出入りなど、大人数を受け止める広さを確保する

・防災備蓄倉庫

避難所となる体育館等に隣接し、外部から物資搬入が可能な配置とし、避難直後から3日分の備蓄物資が保管できるスペースを用意する



チーム・コモンズ



ラーニング・コモンズ



STEAM コモンズ

⑥教育のDX化

GIGA スクール構想により、当初計画よりも前倒しで一人一台端末の導入は達成されたものの、串本町においてもネットワークの課題等もあり活用はこれからとなる。学校教育において、意識しないで当たり前前に ICT 機器やソフトウェアを利用し、ICT を使いこなした活動(教育のDX化)ができる施設環境を整備する。

・外部回線

光回線を前提に児童及び教職員が同時に利用しても制限が発生しない回線速度とする。一方で、リッチコンテンツの増加や使用頻度・量の増加により、必要な回線速度は変動することが想定される。一度に過大な負荷がかからない設計の上で、外部回線は将来的に契約内容や施設設備を変更・更新できる計画とする。

・モバイル回線の活用

ソフトウェアやアプリケーションはネットワーク接続を前提としたものも多くなってきているため、中庭や校庭等の無線 LAN が届かない場所でのモバイル端末の活用、校外学習、自宅学習等に利用できるモバイル回線の必要性について検討する。学習集団規模が少人数のため、屋外アンテナを設置すること以外に、モバイル wi-fi 等、複数台が同時に接続できる環境を用意する方法も考えられる。

・校内ネットワーク・無線 LAN

校内全てを高速無線 LAN の範囲とする。IEEE802.11a/g/n/ac/ax 以上の規格とし、特に n/ac/ax を目標とし、複数の規格に対応することが望ましい(モバイル端末側の対応も含む)。基幹 LAN は 10GBASE-T (CAT6 又は 6A 以上) とし、帯域の不足等が想定される場合は光ファイバーケーブルを使用する。また、スイッチング HUB が通信速度のボトルネックとならないように配慮する。モバイル回線を活用することによる迂回路が確保できている場合は過剰スペックとならないように留意する。無線 LAN-AP はエリアを跨いで利用できる仕組みを標準とする。

・多様な機器・台数の接続

学習用モバイル端末だけでなく、モニタやプロジェクタ等の拡大投影設備、スマート家電やネットワーク接続が必要な学習機器が接続することを前提とする。建築、建築設備関係のネットワークは別回線とし、学習用回線とは異なるネットワークとする。トラフィックの低減とセキュリティの向上の観点から、教職員用、学習用、ゲスト用等に VLAN を構築して切り分ける。

・ネットワーク回線を活用した放送・情報共有システム

音声のみならず、映像放送が気軽に行えるツールが一般化しているため、コストを掛けずに多様な活動が行える環境を整える。また、ブラウザやサイネージ機能などを活用して、校内の情報共有やコミュニケーションツールとし、モニタ等に投影することでデジタルサイネージとするなど、構築したネットワークを有効に活用する。

・複数の映像投影設備

各教室に電子黒板 1 台と固定せず、30 インチ程度(グループでの共有)、70 インチ程度(学級規模での共有)、100 インチ程度(発表や学級を超えた共有)の画面をモニタやプロジェクタを適材適所で使い、場面に応じて画面の種類を変えながら学習展開できるようにする。固定式と

可動式を組み合わせ、学習の展開等に応じて、チーム・コモンズの隣接する教室の機器を使って複数画面にするなど、工夫によって多様な利用ができるようにする。

- ・MDM（モバイルデバイス管理）

OS やソフトウェアの更新、ポリシーの一括適用、デバイスの機能制限、リモートロック等の機能を有する MDM を導入し、管理の効率化、ネットワークへの負荷低減、セキュリティの向上を図る。

- ・業務や学習効率の向上を図るアプリケーションやサービスの導入

導入や運用に関わるコストと効率化や質的向上を比較しながら、有効なアプリケーションやサービスを的確に導入できるシステム、体制を構築する。できるだけ町内全体の学校が同時に活用できるものが望ましい（場合によっては学校部門だけではない町内公共機関での一括導入）。

- ・BYOD やフリーソフトの活用

私用の端末を利用する BYOD やセキュリティポリシー上利用に制限が発生しやすいフリーソフト（企業製のアプリケーションよりもセキュリティ等のチェックが十分ではないため）について、学習上、研究上利用することを想定し、大規模な障害や問題に発展しないように利用できるネットワークを構築する。

- ・端末の学校外での活用

自宅での学習、情報連絡やコミュニケーション、感染症等による登校できない場合のオンライン授業等に活用するため、端末を自宅から VPN 接続やクラウドサービスを利用できるように設定する。

- ・災害時の校内ネットワークの避難所開放

VLAN によってゲスト用 wi-fi 設定を行っておくことで、避難所となった際に特段の設定変更を行わないでネットワークを利用することができる。通常時と避難所運営時の帯域制御については、運用方法と合わせて検討する。

2) 学校時間外を含めた育ち、生涯を通じた学びの拠点となる学校施設

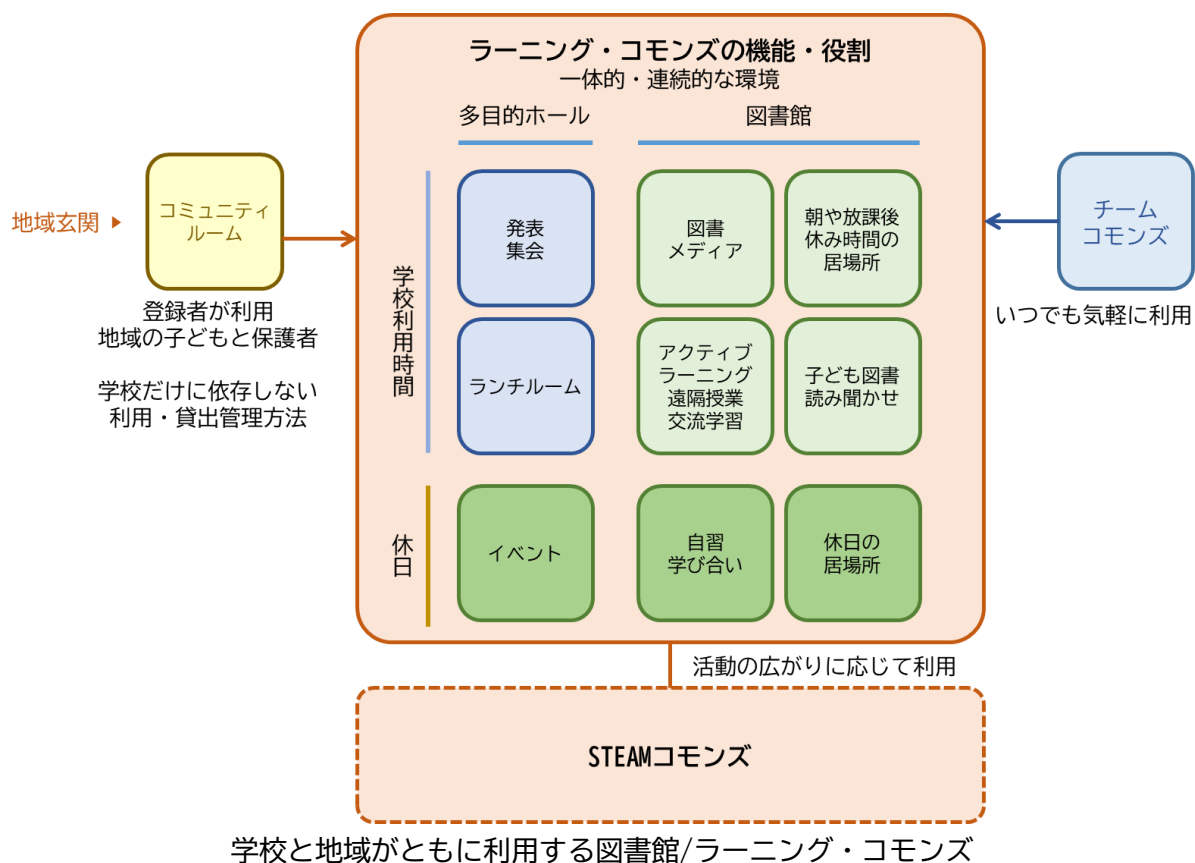
①学びを外に広げる・他校と連携する

外部講師、フィールドワークのまとめや発表、他校との共同授業等を実施する場合、学級の単位を超えた人数が集まることから、チーム・コモンズを有機的に活用し、ラーニング・コモンズを学びの場とすることで多い人数でのアクティブな活動に対応する。

また、下足箱（地域用や体育館用の下足箱を流用することも含め）、トイレ等もある程度の人数の変動に対応できる計画とする。

②学校図書館の地域開放

町立図書館は老朽化により旧保健福祉センターに仮移転しており、図書館活動に制約がある状態である。また、統合小学校は図書館をラーニング・コモンズとして様々な活動に利用できる環境として整えるため、主に本を貸し出す現在の町立図書館の機能に対し、子ども達の居場所とできる可能性がある。そのため、この地域で育つ幼児、児童、中高生とその保護者が利用できる図書館を想定する。地域が利用するためには、学校教職員に負担を掛けずに貸出や管理する体制が不可欠となるため、建設期間中も含めて運営方法は今後詳細に検討する。



③学校施設の多用途利用

本施設には、小学校、学童保育所、小学校の地域開放施設があり、曜日や時間帯等で活動の様相が変化する。管理扉等により利用する区画を制御できるようにすることで、同時に活動ができる計画とする。また、各室・コモンズは運営の工夫により、団体利用、個人利用、イベント等の定期開催等、様々な使い方を想定する。施設管理・運営にあたっては、地域交流の拠点となるコミュニティルームを整備し、学校だけに頼らない、町としての運用や地域ボランティアによる運用が可能な計画とする。

学校施設の学校外利用の可能性

		学校	学童	体育 コモンズ	ラーニング コモンズ	STEAM コモンズ	校庭
				メインアリーナ サブアリーナ ミーティング	図書 多目的ホール 小室・スタジオ	FabLabo 調理 実験	サッカー 野球 公園
平日	学校活動時間 ～14時頃	○	△		幼児と保護者		公園の利用
	放課後 ～18時	△	○	学童	学童 幼児と保護者	学童	学童 公園の利用
	夜間 18時～21時			一般開放			一般開放 (夜間照明)
土曜	学童開所時間 ～18時		○	学童 一般開放	学童 一般開放	学童 一般開放	学童 一般開放
	夜間 18時～21時			一般開放			一般開放 (夜間照明)
日祝	8時～21時			一般開放	一般開放	一般開放	一般開放



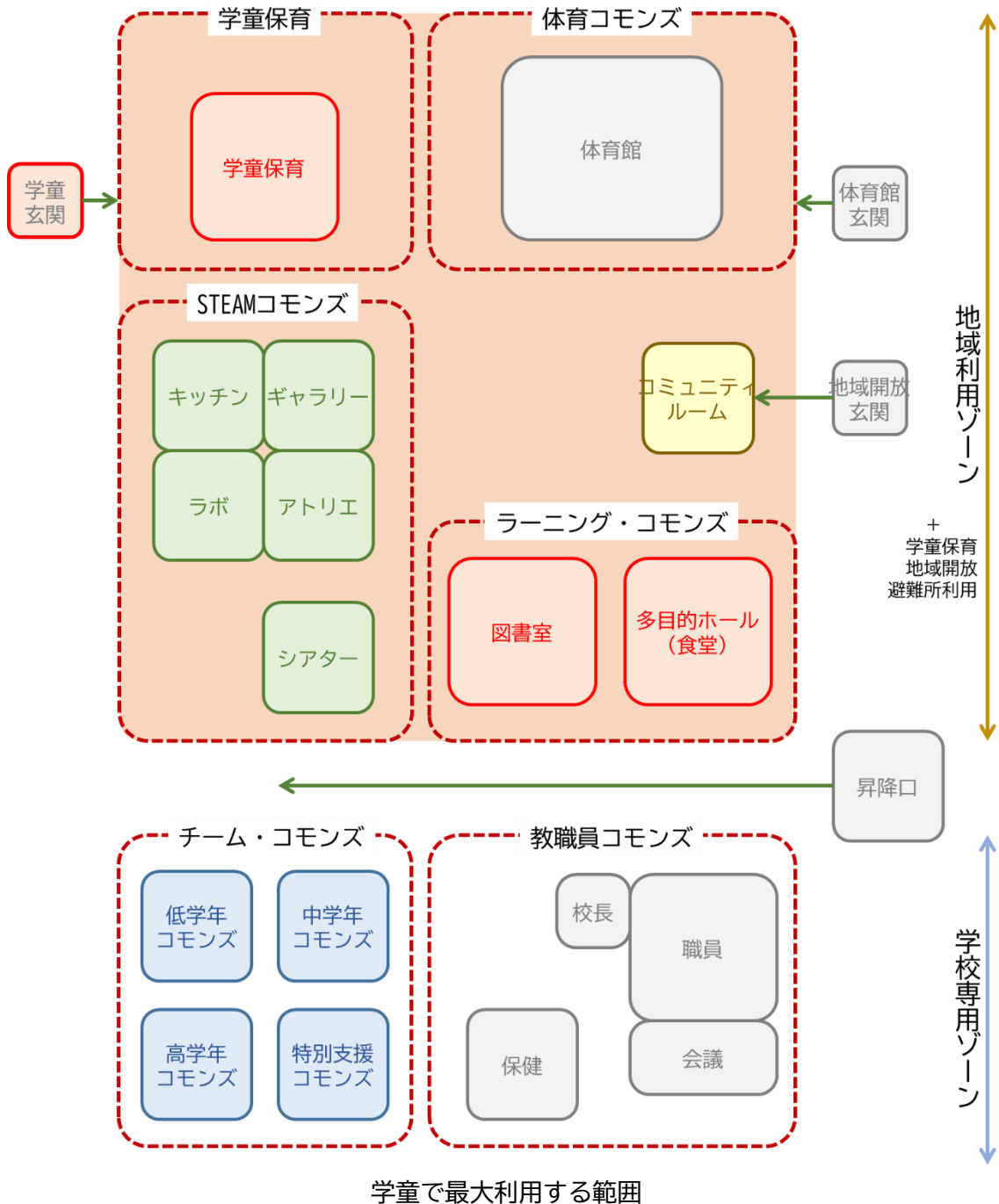
宮野森小学校（宮城県）の地域ラウンジ



名川中学校（青森県）の囲炉裏端サロン

④学童保育の学校施設利用

放課後と土曜日が活動時間となるため、学校施設を有効に活用できる計画とする。学童保育施設単体で様々な屋内活動（宿題や学習、遊び、友だちとの交流等）ができるように多様な場を確保するとともに、体育館や校庭で身体を使った遊び、ラーニング・コモンズで本の世界に親しむ、STEAM コモンズで楽器の演奏やものづくりを行うなど、子ども達や運営者の創意と工夫によって学校施設を学校と一緒に活用できるように、区画制御や共同で利用するための倉庫・収納スペースの確保等を配慮する。



3) 南海トラフ地震等の災害に備えるレジリエントなまちづくりと核となる学校施設

①防災計画上の統合小学校の位置付け

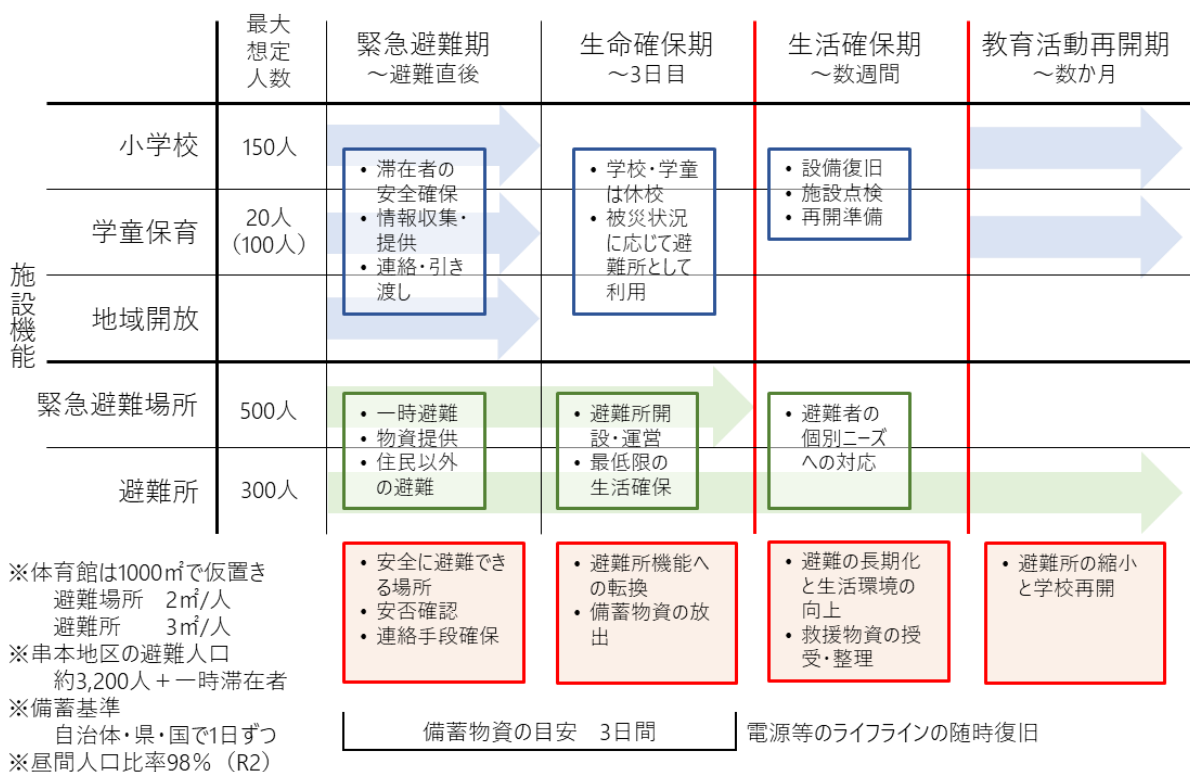
現在の串本小学校及び橋杭小学校は津波浸水区域内にあるため、南海トラフ地震等の指定緊急避難場所及び指定避難所としては位置付けられていないが、今回の施設整備に伴い指定されることを想定する。

避難所の収容人数は防災計画で、体育館面積に対して3㎡/人であるが、想定以上の人数が避難する場合も想定する。また、避難に際しては地域の実情から自家用車による避難が想定されるため、小学校駐車場以外に校庭やこども園駐車場などを利用できる計画とする。

防災備蓄品は町で一括管理しており、学校内に用意する防災備蓄倉庫への物資の保管については今後の協議による。計画上、串本町・和歌山県・国で1日ずつの備蓄を想定し、現段階では町は1日分の備蓄を保有している。

②災害フェーズと各機能に求められる役割

通常の機能と避難所の機能を整理し、災害フェーズによるニーズの変化を想定する。特に、避難所を縮小し、小学校や学童保育の活動を再開するための建築的な用意と運営の工夫が求められる。大規模災害では避難所の閉鎖に時間を要することも想定され、避難所閉鎖まで阪神淡路大震災は6か月、東日本大震災は9か月（原発事故による避難を除く）かかっている。同居しながら活動できる計画とする。



災害フェーズごとの役割

③防災に関わる学校施設の計画目標

○子ども達の安全を確保する

- ・十分な耐震性を確保する
- ・ライフラインが停止しても自然を活かして快適に過ごせる居住環境とする

○学校施設を避難所として活用する

- ・平常時から地域と連携し、スムーズな避難所の運営を可能にする
- ・避難者数に応じて段階的に避難所スペースを開放する
- ・地区で整備した津波避難路を活用する（出口が統合小学校敷地内）

○避難所として機能する施設設備を整備する

- ・宿泊が伴うことによるトイレ不足に対応できる設備・備品を整備する
- ・防災備蓄倉庫を整備する

○多様な避難者への配慮

- ・個々人の状況、感染症等への不安等に最大限配慮できるように工夫する

○車移動を前提とした計画

- ・校庭、こども園駐車場も含めて避難者の駐車スペースを確保する

○防災における地域コミュニティと学校

- ・学校と関係者が一体となった避難訓練、避難所運営のシミュレーションを行う

○小学校・学童保育の早期再開

- ・避難所として利用しない場所を指定する

○サング台全体の連携

- ・小学校とこども園、他の施設等の地区全体で機能を分担する

④インフラのBCP計画

インフラ途絶時の補助方法は、複数のバックアップ方法に分散し、課題が発生した際のリダンダンシーが確保できる。

	通常時 インフラ復旧時	インフラ途絶時の対応方法
法定設備	系統電源	非常用発電機
照明・電源	系統電源	エリアを限定した非情報発電機/太陽光自立運転/V2H/LP ガス発電機
空調・暖房・換気	系統電源	発電機等による部分運転/小型発電機+可搬式器具（扇風機・暖房機）
給水	受水槽	地上設置/蛇口/給水車による補給/飲用水の備蓄
下水排水	合併浄化槽	汚物槽利用/補助電源での給電/トイレキット/マンホールトイレ
ガス・熱源	プロパンガス	プロパンガス補給/カセットコンロと携帯燃料/屋外かまど設備等での薪炭利用
TV	TV 共聴	ワンセグチューナー/可搬式アンテナ/インターネット TV
電話	一般回線	災害用公衆電話/インターネット電話
情報通信	光回線	公衆 wi-fi の切り替え/校内 wi-fi の臨時開放/可搬式無線 LAN ルーター

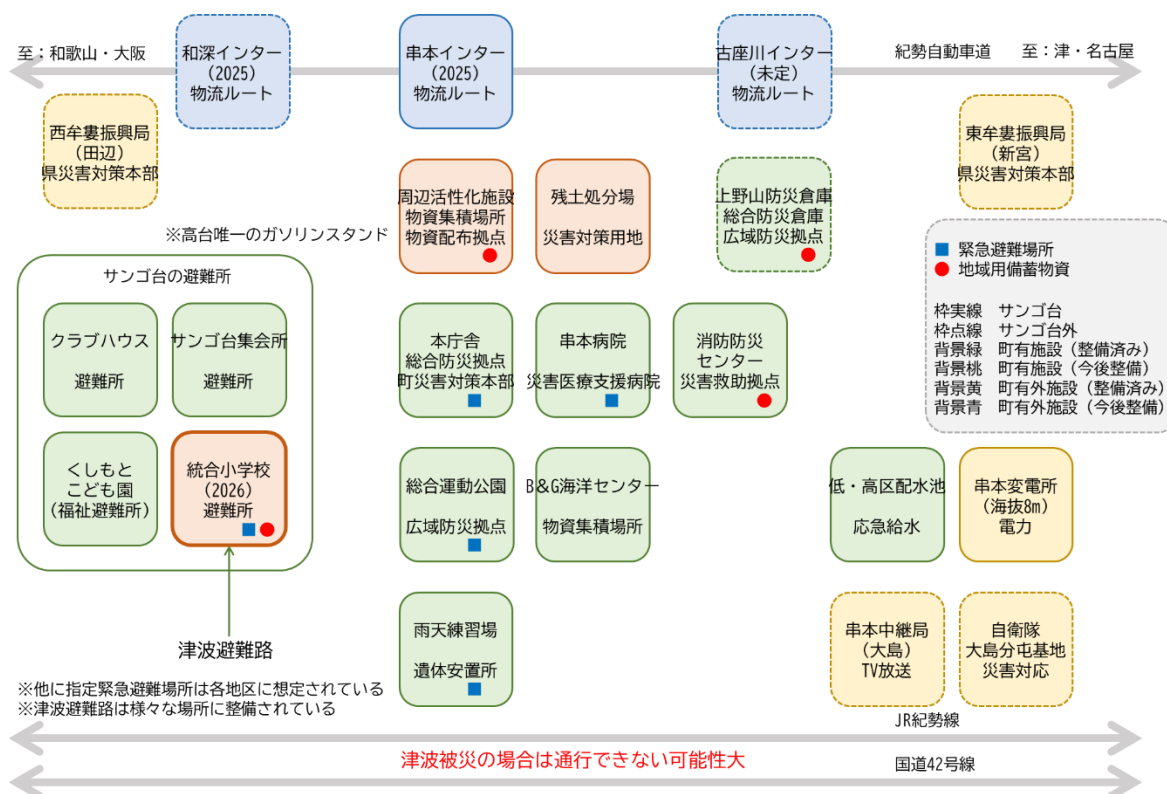
⑤サンゴ台を中心とした防災機能

今回の整備と前後して、サンゴ台を中心に施設整備が進められている。すでに整備を終えた施設設備と合わせて、機能を整理し、過大投資や不必要な重複が起こらないように計画する。

串本インターチェンジができることで、大阪方面と高速道路で接続される。また、古座川インターチェンジができることで、上野山の防災倉庫とサンゴ台が接続される。このことにより、町内の防災機能が面的に強化される。

サンゴ台の物資集積拠点は B&G 海洋センターが想定されており、新たにできる周辺活性化施設（道の駅など）も集積所や配布所の機能を持たせることができる。防災備蓄品の保管倉庫や仮設住宅用地としても学校敷地を活用する必要はないため、地区の避難所として必要な機能のみで充足する。また、障害や健康に配慮が必要な住民のための福祉避難所機能はこども園を想定し、小学校内に同居させなくてもよい（避難状況に応じて配慮自体は必要）。

上水は病院横の低・高区配水池を活用でき、仮に経路が断水した場合でも給水車等で比較的短時間に受水槽に配水することができ、その他のライフライン復旧についてもインフラ復旧部隊の展開が総合スポーツ公園になるため、比較的早期復旧が期待できる。



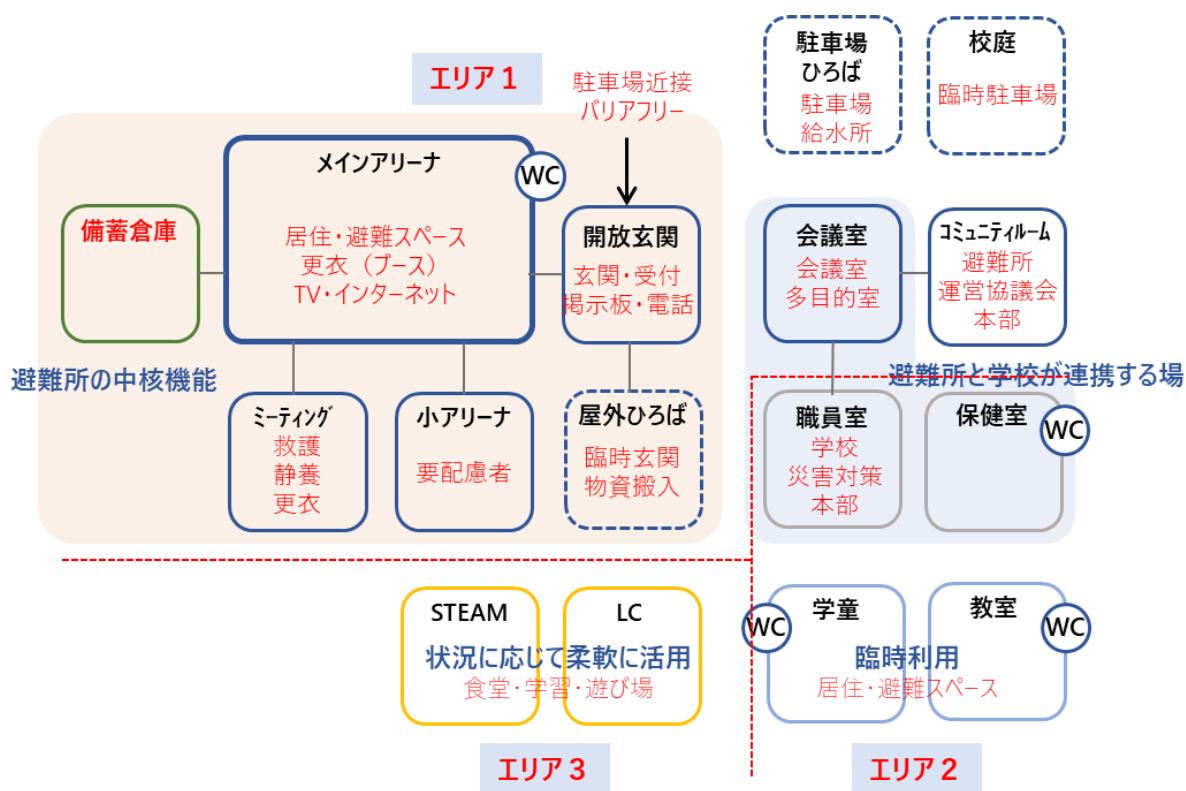
サンゴ台を中心とした防災機能概念図

⑥避難所を構成する諸室・機能

施設を、メインアリーナを中心とした避難所の中核を担うエリア、職員室や教室等基本的に避難所としては利用しないエリア、ラーニング・コモンズやSTEAM コモンズ等の避難者の人数やニーズの変化に応じて柔軟に利用を調整するエリアの3つに分けてゾーニングする。各ゾーンは地域開放等のゾーニングと重ね、小学校、学童保育所と避難所が同時に活動していても、活動ごとに玄関を分けて確保でき、管理扉などで区画することができる。

学校は休校中であっても児童や家庭の安否確認、学校再開に向けた準備活動等をすぐにはじめるため、児童が登校していない期間でも活動している。また、本来学校管理下の施設であるため、避難所運営組織と学校の連携は不可欠であり、教職員コモンズに含まれる会議室等で常時連携をとりながら避難所運営ができる構成とする。

想定以上の避難者がいる場合やニーズの変化に応じて学童保育施設や教室も居住スペースとして一時的に利用する可能性がある。早期の学校再開に向けては縮小の方策を事前に地域と協議しておく必要があり、訓練や話し合いを通じて日常的に交流することが重要である。



避難所のゾーニングイメージ

4) 豊かな海と緑に恵まれた自然を生かし、新しい時代のシンボルとなる学校施設

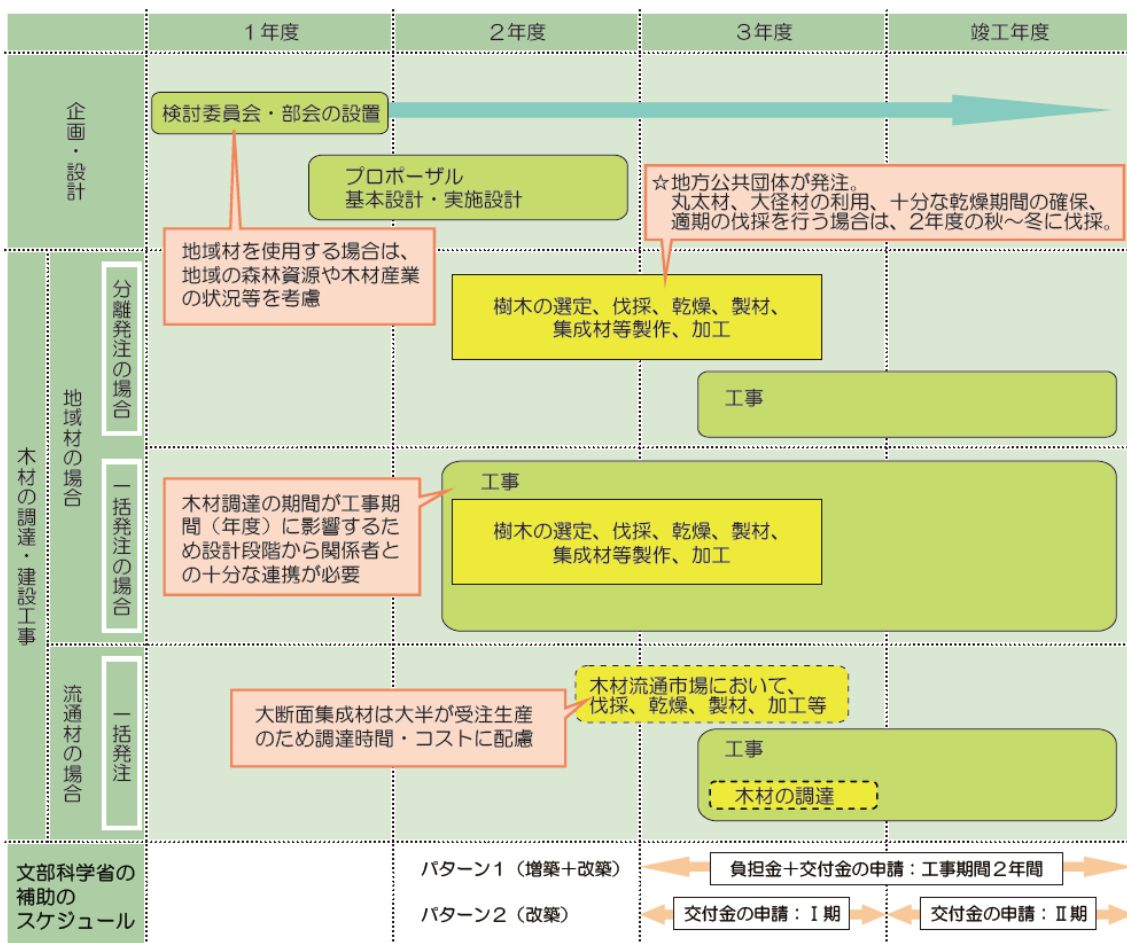
①木の学校づくり

木造・木質化を目指し、県産材や地場産材の活用と紀南地方や県内で加工できる材を多く使うためには、その他木造や準耐火構造として製材を活用できるようにするなど、工夫が必要となる。同時に、町内において2021年から2030年までの10年間で2,200haの間伐が計画されており、間伐材の活用についても検討する。調達可能な木材の質・量のヒアリングを地元の南紀森林組合と行う等、適正なコストや工期で建設できる環境を整える。

また、内装制限がない学校建築の特性を活かして、内装木質化を図るとともに、適材適所な材料活用や色彩計画を心がけ、活動しやすく、過ごしやすい環境とする。

海に近く塩害の影響を受けやすく、風雨が横から吹き込むため、外壁や渡り廊下等の雨がかかる場所への木材の利用や建物のつくり方は、将来的に課題が生じないように検討する必要がある。

単純に材料として木材を活用することに留まらず、地域の産業と学校とのつながり、SDGsや地球環境への寄与と教育のつながり、木材の架構を活かした街並みや景観形成など、木を活かすという視点を取り入れる。



資料：こうやって作る木の学校（文部科学省・農林水産省）
木材を利用する学校づくりの進め方について数多くの事例を紹介しています

事業スケジュール（こうやって作る木の学校 文部科学省・農林水産省より転載）

②脱炭素社会に向けた持続可能な施設環境

串本町では、基本計画において循環型社会の形成と環境保全の推進を柱とした施策を実行している。統合小学校計画においても ZEB Ready（一次消費エネルギー50%以上削減）を目標に、省エネルギー化と創エネルギーを組み合わせることで脱炭素社会の実現に向けた取り組みを具体化する。十分な断熱性能の確保、LED や高効率空調等の省エネルギー設備・機器の導入や日照時間が国内有数に長く温暖な気候特性を踏まえたパッシブデザインを検討する。

③地域の気候・風土に応える建築

串本町の気候風土や計画敷地の特性は、温暖で空調にそれほど頼らないでもよいこと、風がない日も多いが吹くと強風になること、台風の影響を受ける頻度やすく台風以外でも風雨の強い時には傘などがほぼ役に立たないこと、三方向を海に囲まれ（近い場所で直線 400m）塩害の影響を受けることが挙げられる。

・室内と屋外が連続する環境

穏やかな日には中庭やテラス等を積極的に活用できるように、上足のまま出られる場所の確保、段差の解消や出やすい建築的な工夫、すぐに出られる履き替え方法の検討が必要である。一方で、風雨が横から降る地域として、降りはじめに室内にすぐに雨が落ちてこないようにする庇の確保、風雨が強い場合でも自然換気ができる換気窓や立面のデザイン、サッシなどの雨仕舞の工夫などが重要であり、気候特性を踏まえた建築とする。

・強い風雨を踏まえた建築

風雨の強さから、木造化を目指して分棟型とする場合、渡り廊下は屋内化する必要がある。また、出入口の扉は開き戸を避けて強風の影響を受けにくくし、重力換気窓等の開閉がある部分についても強風の影響を考慮する。

また、スクールバスでの登下校が中心となるため、傘を使わないで乗降できる場所を整備する。庇のみでは風雨をよけられないので、バスの車体を風雨除けにできる形式や、風雨除けのサッシや壁を建てる等工夫する。

ガラスが多いデザインとなる場合、飛石でガラスが破損する可能性があることから、建物周囲の外構デザインとともに、割れても安価で調達が容易なサッシやガラスを使用する。

・日照時間の長い特性を活かす

塩害の影響を考慮しながら太陽光発電の可能性を検討する。また、直射日光を避けながらも建物の奥まで明るくする、太陽熱を利用する等、パッシブなデザインを検討する。

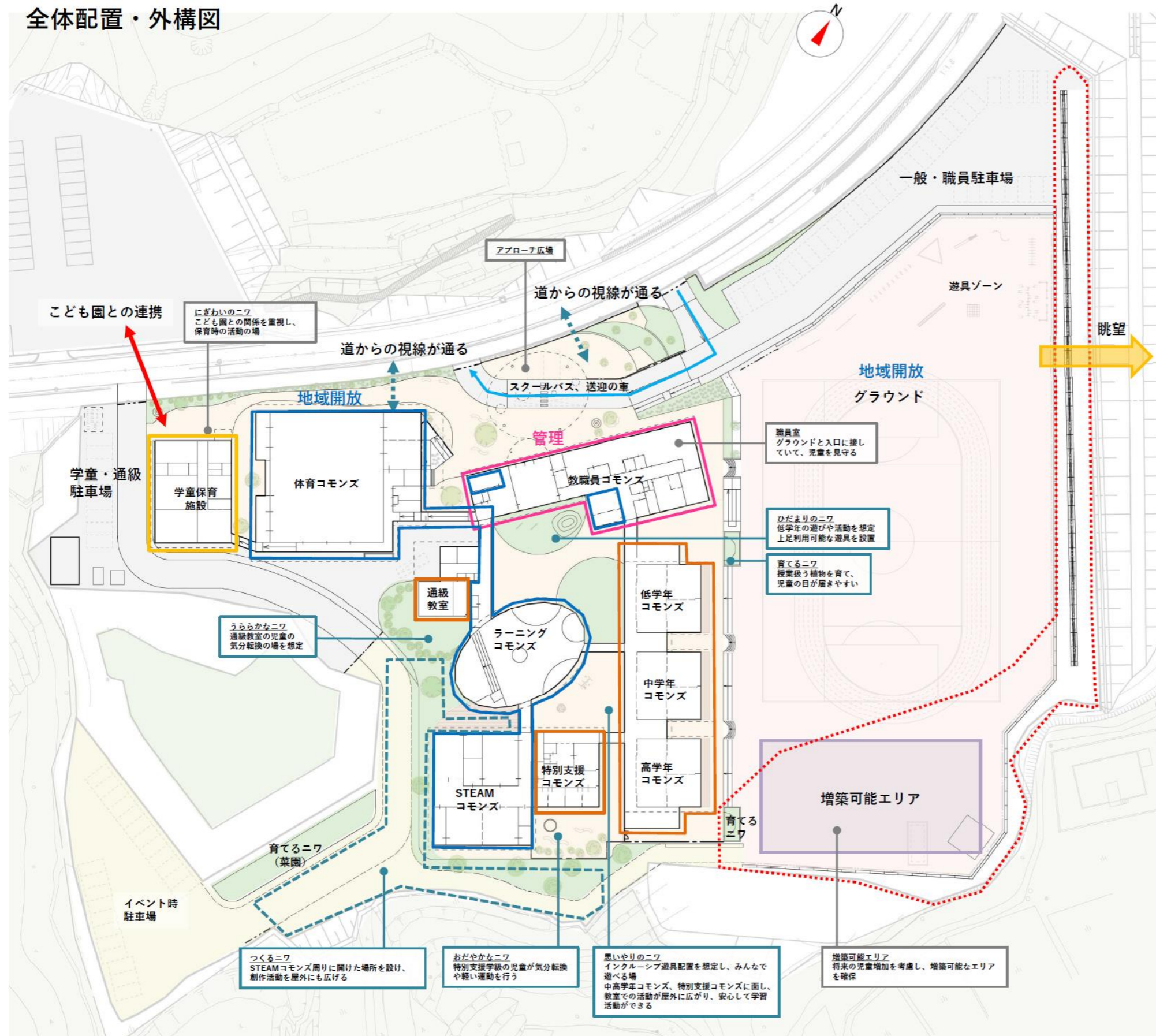
・高台の立地を生かす眺望と景観

敷地はサンゴ台の高台にあって、サンゴ台の住宅地や串本湾を一望する。里山や山林がすぐに迫り、海や川がすぐ近くにあるという立地は、豊かな海と緑に恵まれる串本町そのものであり、日常的な生活において、その自然を感じることができる場として整える。また、田原方面にはスペースポート紀伊があり、ロケットの打ち上げを学校からも見ることができる。

敷地はサンゴ台の住宅地からもよく見え、夜には活動の灯りが見える立地である。

7 基本計画図

全体配置・外構図



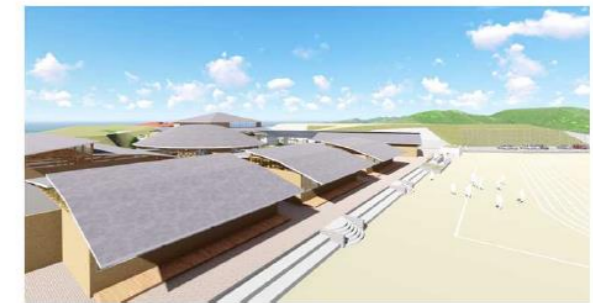
地形に融合した全体配置計画

造成計画・盛土範囲や串本町の風雨・風向、塩害など自然状況、こども園や周囲の施設との関係などを整理、比較し敷地利用を計画します。

- ・盛土範囲を避けて南西側に校舎ゾーン、北東側にグラウンドゾーン
- ・町道に面して東西2か所から敷地内に導く地域に開かれたアプローチ空間
- ・地域開放や雨が激しく降る天候から駐車場を利用するコモンズの近くに分散して配置し、児童はスクールバスを降りてすぐ校舎に入れる昇降口周りに計画
- ・駐車場を利用するコモンズごとに分けることでセキュリティを確保し、回遊できる動線で災害時やメンテナンスしやすい計画とします。

配置・建物計画

- ・校舎ゾーン中央に学びの中心であるラーニングコモンズを設け、それを囲うようにチーム・コモンズ(低中高学年・特別支援コモンズ)、STEAMコモンズを配置し、ラーニングコモンズを中心に学校全体がつながる計画とします。
- ・接道沿いには地域開放、交流する学童保育施設、体育コモンズ、職員コモンズを配置し、地域とつながる計画とします。
- ・平屋建ての計画とし、シームレスな空間のつながりを計画します。
- ・串本町の海をイメージした躍動感ある屋根と水平線をイメージした家並みで建物と自然がつながる計画とします。
- ・分棟形式により串本の街並みのスケール感と調和し、学校とまちがつながる計画とします。



▲グラウンドに面した家並みイメージ

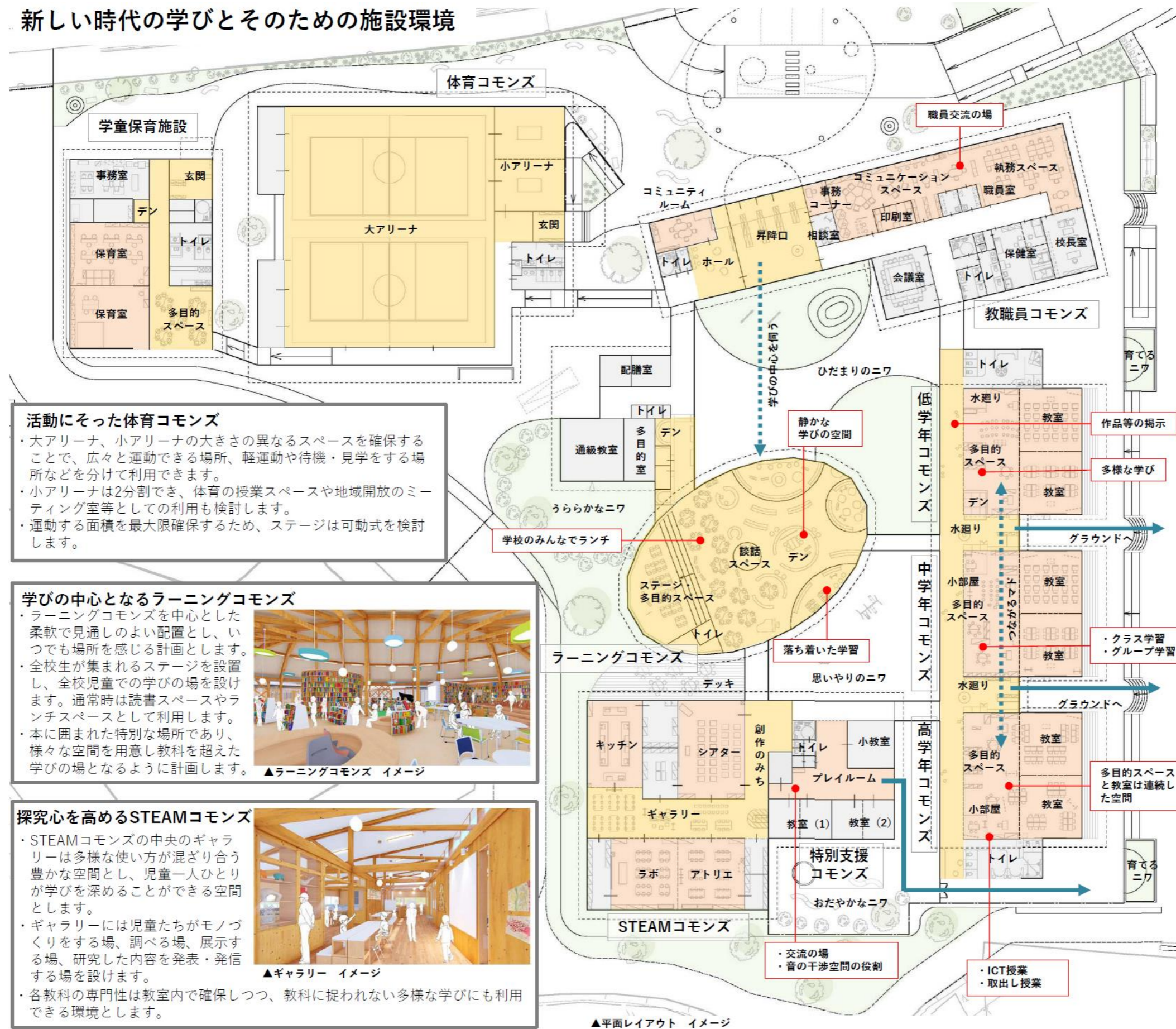
学びや生活の延長空間のニワ

- ・児童の生活の場の延長として、「ひだまり・思いやり・おだやか・うららか・にぎわい」のニワを計画します。
- ・花壇や菜園のある「育てるニワ」や創作活動を行う「つくるニワ」を設け、学びの延長として地域とつながる計画とします。



▲育てるニワ イメージ

新しい時代の学びとそのための施設環境



凡例

- 黄色 : オープンな空間
- オレンジ : セミオープンな空間
- グレー : クローズドな空間

活動にそった体育コモンズ

- ・大アリーナ、小アリーナの大きさの異なるスペースを確保することで、広々と運動できる場所、軽運動や待機・見学をする場所などを分けて利用できます。
- ・小アリーナは2分割でき、体育の授業スペースや地域開放のミーティング室等としての利用も検討します。
- ・運動する面積を最大限確保するため、ステージは可動式を検討します。

学びの中心となるラーニングコモンズ

- ・ラーニングコモンズを中心とした柔軟で見通しのよい配置とし、いつでも場所を感じる計画とします。
- ・全校生が集まれるステージを設置し、全校児童での学びの場を設けます。通常時は読書スペースやランチスペースとして利用します。
- ・本に囲まれた特別な場所であり、様々な空間を用意し教科を超えた学びの場となるように計画します。

▲ラーニングコモンズ イメージ

探究心を高めるSTEAMコモンズ

- ・STEAMコモンズの中央のギャラリーは多様な使い方が混ざり合う豊かな空間とし、児童一人ひとりが学びを深めることができる空間とします。
- ・ギャラリーには児童たちがモノづくりをする場、調べる場、展示する場、研究した内容を発表・発信する場を設けます。
- ・各教科の専門性は教室内で確保しつつ、教科に捉われない多様な学びにも利用できる環境とします。

▲ギャラリー イメージ

協働する教職員コモンズ

- ・児童だけでなく教職員同士や地域と教職員が学び合い、切磋琢磨し、活発に交流できる環境を計画します。
- ・児童や来訪者の把握がしやすく、セキュリティにも配慮し、スクールバス停前に職員室を配置します。
- ・職員室という一つの大きい空間の中に執務スペースや休憩・コミュニケーションを図るラウンジ、教材制作スペース、WEB会議を行うスペースを配置し、多様な学びに対応する教職員を支える空間とします。

一緒に学ぶチーム・コモンズ

▲教室・多目的スペース イメージ

- ・普通教室は2学年1ユニットの家のようなまとまりのある配置とし、教室と廊下を連続する形で多目的スペースを設け、多様で柔軟な学習を支えます。
- ・特別支援コモンズは低・中・高学年コモンズと分断するのではなく、穏やかな空気・居場所を確保しつつ、児童同士で交流できる計画とします。

自発的な学びを促す教室コモンズ

- ・多目的スペースは生活・学習に合わせた大きさや仕様とし、6年間の学びの場として変化を持たせます。
- ・小部屋やデンといった空間を多目的スペース内に設け、ホワイトボード壁、掲示壁、袖壁を組み合わせ、学びにとって「よい壁」を検討します。

教育のDX化とそのため施設整備

- ・必要な時に必要な場所で活用できるようにICT環境を整備し、調べ学習や観察・実験のまとめ、児童同士の学び合いに活用し、学習効果を高める計画とします。

育ち・生涯を通じた学びの拠点となる学校施設



全体ゾーニングイメージ▲

学校施設の地域利用

(仮称)串本統合小学校に通う児童だけでなく、卒業した子どもたち、地域に住む中高生や大人達も利用できるようコミュニティールームを中心にラーニングcommonsや体育館、グラウンド、創作commons、会議室を地域開放する計画とします。

地域交流・活動の拠点となるコミュニティールーム

- ・昇降口に隣接するようにコミュニティールームを配置する計画とします。
- ・談話できるスペースやミニキッチンを設け、地域の集まりやラーニングcommonsを訪れた人の休憩時にも利用できます。

まちの体育館

- ・体育館は外部からアクセスしやすい町道側に配置し、気軽に立ち寄れる計画とします。
- ・体育館の夜間利用により、体育館の明かりが優しく夜道を照らし、地域の活動を感じられる計画とします。

まちの図書館としてのラーニングcommons

- ・STEAMcommonsは学校授業時以外はいつでも気軽に立ち寄れる計画とします。
- ・一人や友人同士での利用や、地域のクリスマス会といった地域イベントの利用も検討します。



▲アプローチ広場イメージ

学童保育施設とこども園との連携

学童保育施設は学校の敷地内に配置し、こども園に最も近い位置に配置します。学校はもちろん、こども園との連携を図ります。

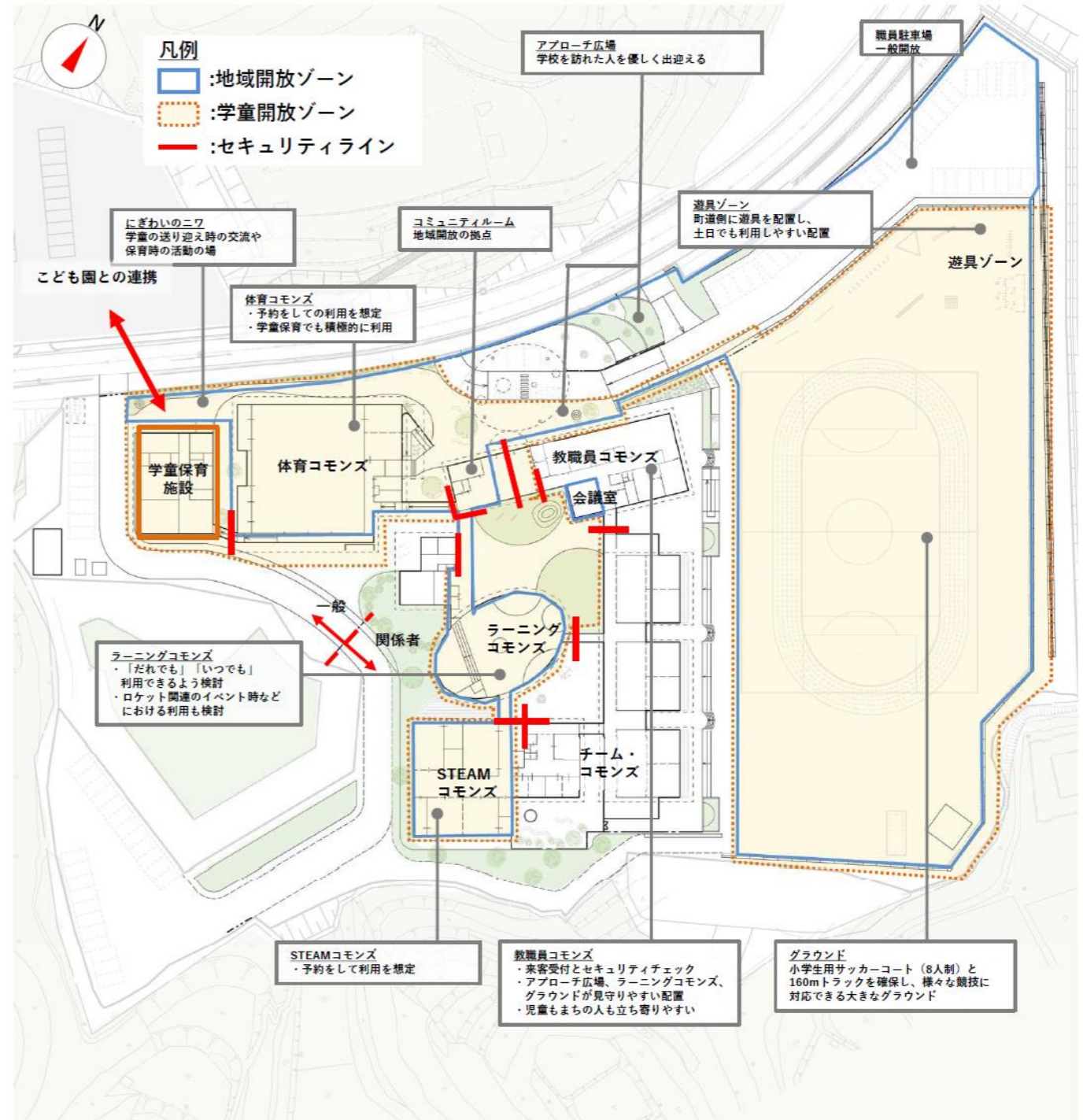
- ・学童は児童の第2の家のように感じられるようなレイアウトや設えにします。
- ・施設自体はコンパクトにし、学校施設であるラーニングcommonsや体育commons、グラウンドを最大限利用できるよう計画します。



▲にぎわいのニワ イメージ

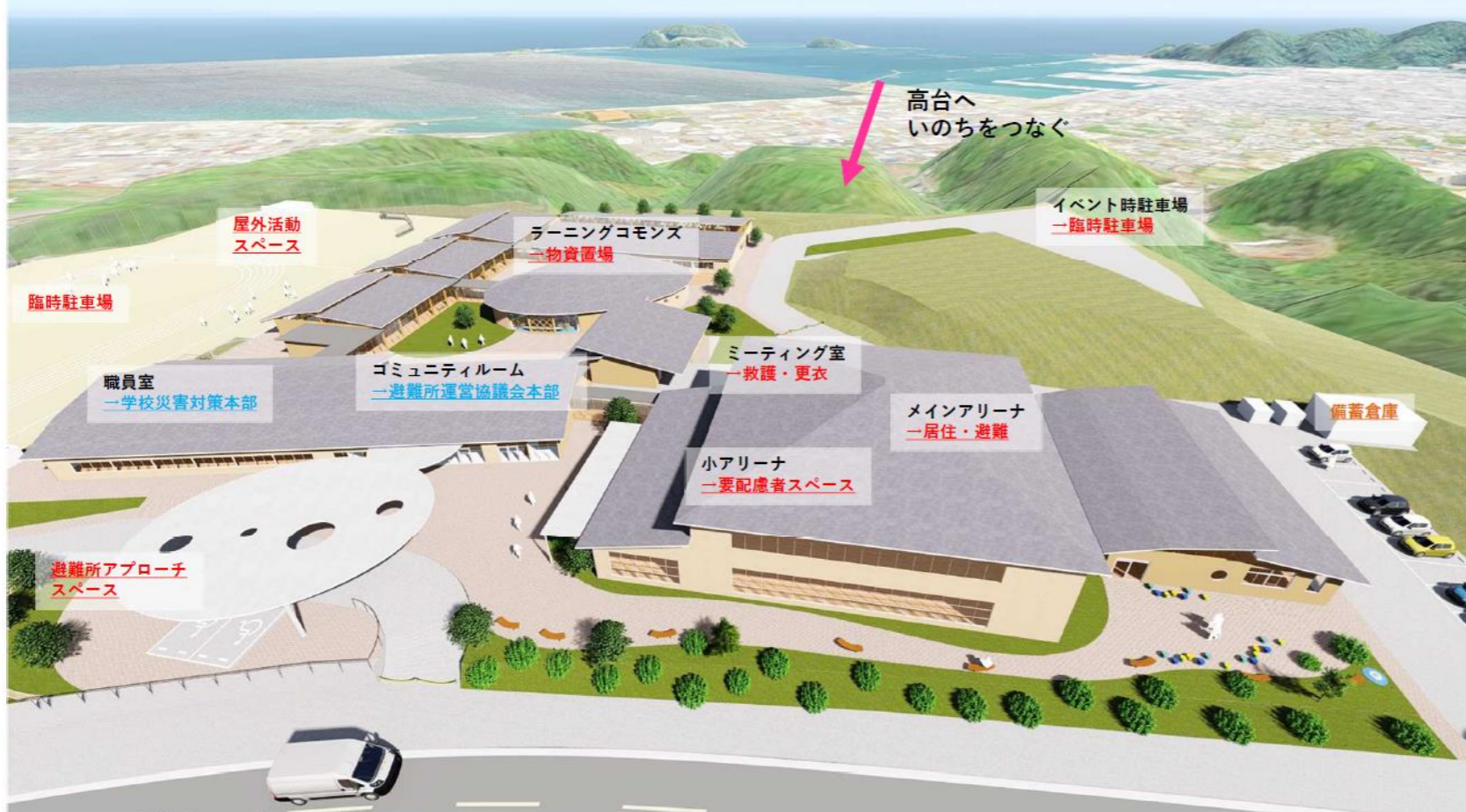
地域開放とセキュリティ

渡り廊下と分棟配置により地域開放ゾーンと学校ゾーンを明確にし、地域開放とセキュリティの両立を目指します。



▲地域開放ゾーン・学童保育施設利用ゾーン 範囲イメージ

レジリエントなまちづくりと核となる学校施設



▲フェーズ1 避難直後イメージ

海と森のまち

木の学校づくり

- ・平屋建てで床面積1000㎡以下に分節した木造を採用することで、小屋組みや柱などを現したやさしい校舎とします。
- ・分節した棟の接続部は耐震・耐火要素として耐火構造とし、地震や火災に強い、より安全な計画とします。
- ・壁や間仕切、フローリング等には地産材使用を検討し、地元木材の積極的な利用を図ります。

地域の気候・風土に応える建築

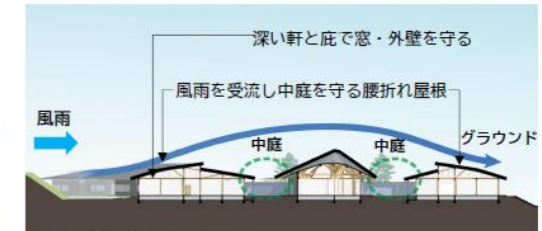
- ・串本町の湿度の高い気候と合わせ、内装材の木質化を図ることで、木材の調湿効果により結露を防ぎ快適な室内環境を目指します。
- ・雨が激しく降る天候に対して、バスの乗降場から昇降口は大屋根を掛け、各棟との接続は屋内渡り廊下とします。
- ・中庭部分を包むような校舎配置と屋根形状で安全な環境を確保します。

災害・環境教育の場となる学校

- ・災害及び環境対策の知識を発信する場として、児童のみならず地域住民を含めた町民の意識を啓発できる施設整備を行います。



▲木架構イメージ (ラーニングcommons)



▲屋根形状断面イメージ

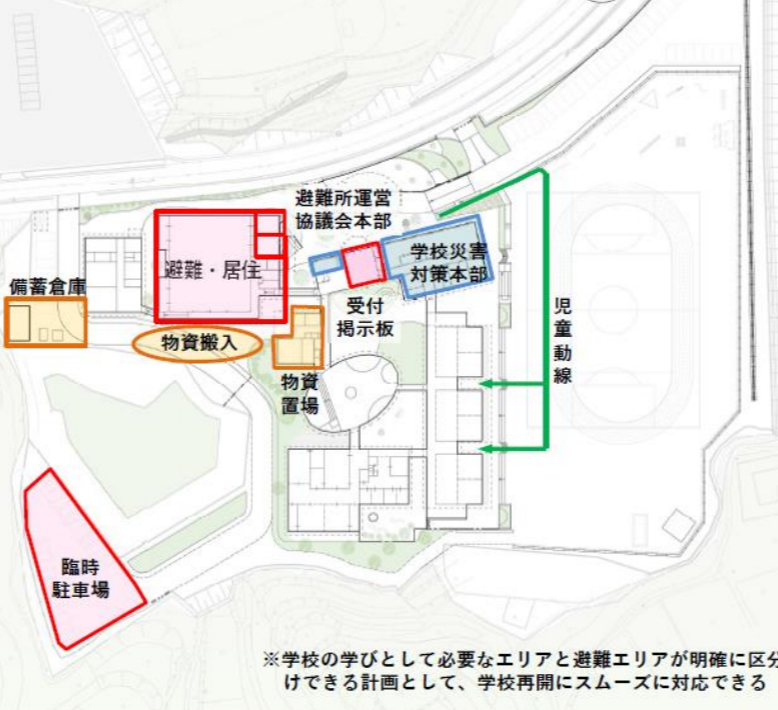


▲ラーニングcommons・教室commons断面イメージ

フェーズ1 : 緊急避難期～生命確保期 (~3日)



フェーズ2 : 生命確保期～教育活動再開直後 (~数週間)



フェーズ3 : 教育活動再開期 (~数カ月)



8 将来に向けた検討課題

①児童数の変動やさらなる統合

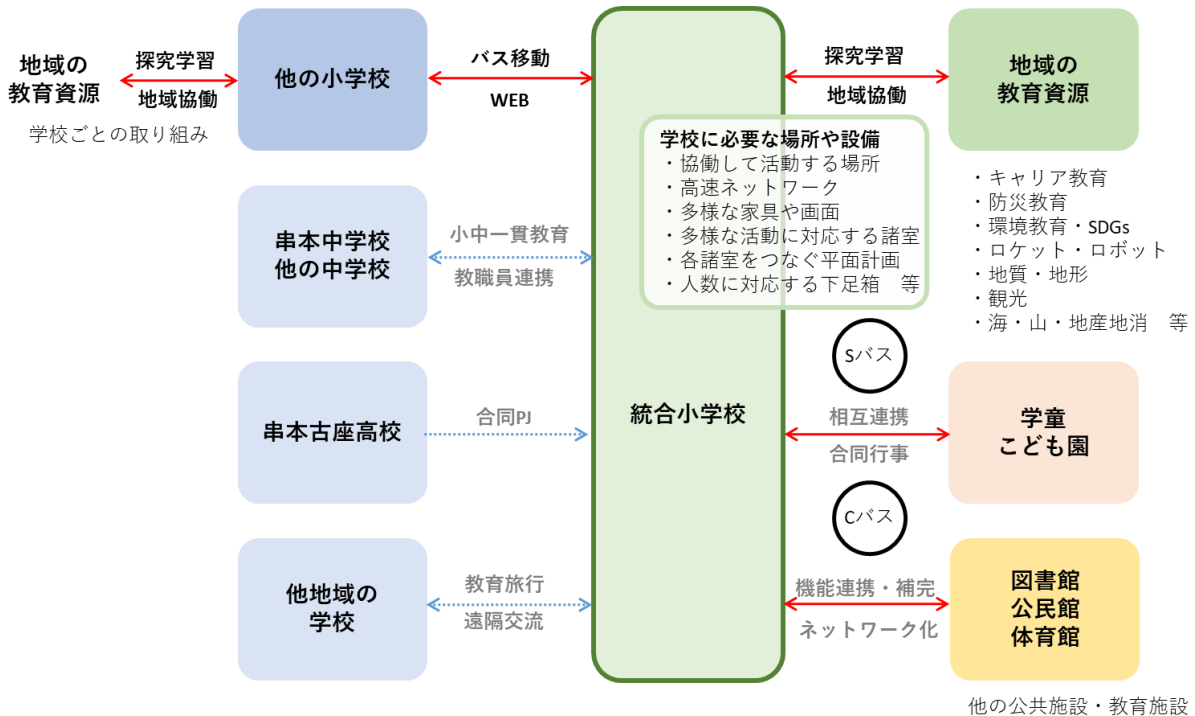
まち・ひと・しごと人口創生ビジョン等から、全ての地区で少子化が継続するものと予測され、2026年度（新校開校年度）以降、さらに広域な統合を検討することになる可能性がある。

②公共施設の高台移転と再編

串本中学校、図書館、体育館、武道場、文化センターは津波浸水エリアにあるが、施設整備時期や財政的な課題があるため、施設整備の方針が決定していない。計画敷地南西側には町有地が含まれ、造成により新たな土地を生み出すことも可能であり、各施設が高台移転する場合の候補地のひとつとなる。その場合、小中一貫・小中連携（幼小中連携）、学校と公共施設の複合化や一体的な運用等がその時に検討課題となる。

③串本町全体をひとつの学校と見立てる

スクールバスによる交通ネットワークにより 10 分程度で集まることができる統合小学校の立地と今回整備する施設の可能性から、串本町の 8 つの小学校（統合後）をひとつの小学校と見立ててカリキュラムや教員研修の仕組みを構築し、将来的なテクノロジーの発展を見通して物理的な距離を問題にしない新しい学校の姿を模索する。少人数の良さを活かしながらも、他者の意見を知る機会等の人数によって効果が異なると想定される取り組みもできるようになる。



ネットワーク型の串本学校の概念図

おわりに 学校づくりに参加して

みんなで作る“つながる学校”、“みんなの学校”

目指したものは“つながる学校”。それは人と人、学校と地域、串本と世界、過去・現在・未来を学びが“つなげる学校”、言い換えればDXにより時間、空間、集団の制約を“超える学校”。従来の教室、学校の固定観念に囚われない“らしくない学校”、“見たことのない学校”だ。となればみんなで育てていかなければならない。協議会や分科会での時に遠慮がちに、時に強い口調で語られる発言からその思いが伝わってきた。こうして他にない“みんなの学校”がサンゴ台に生まれる。

(長澤 悟・東洋大学名誉教授)

委員会に参加して

この委員会の特徴として小学校の利用者である教員、さらには保護者が参加していることがあげられます。教員からは教員の資質向上もふくめた職員室の使われ方についての議論を興味深く拝聴しました。災害時の小学校の利用状況についての時系列での検討結果にもとづき小学校が計画された事例は、まだそれほど多くないと思います。本検討結果をもとに素晴らしい小学校が完成すると思います。

(牧 紀男・京都大学防災研究所 教授)

安心・安全・地域と共に学べる学校

普段から地域の方々と交流活動ができる学校施設の利用促進に期待しています。また、利便性の良い高台に建設される統合小学校にこども図書館があることは、多くの方々に喜ばれる学校施設となるのではないかと考えています。町民の健康増進のための施設として統合小学校施設の体育館及び運動場の照明等が充実した建設も必要であります。近い将来起きるとされている大地震に備えた緊急避難場所確保のために災害に強い統合小学校・中学校の早い建設を望んでいます。

(長脊 守・串本町文教厚生常任委員会 委員長)

夢のある学校

建替えが望まれていた2校の統合小学校の設計には、先導的開発事業に採択されたことにより、多くの立場の方々から意見をいただくことができました。町には今までなかったような小学校が高台に建設されようとしていることに大変期待をしています。敷地は街や海を眺められロケーションも最高で、串本で発射されるロケットを横目に、運動場を走り、教室で勉強している子供たちのいきいきとした笑顔を想像しながら完成を夢見ています。

(平井 治司・串本町副町長)

終わりは始まり

個人的には自身の固定観念を打ち破るところから始まったが、他の委員や先進校に学び、分科会メンバーに教わることばかりで、建設的な意見を示して貢献できないまま活動を終わることを申し訳なく思う。子ども達だけではなく、地域全体が繋がり、未来に向けて持続可能で発展的な活動拠点ができることを大変嬉しく感じると同時に、これで区切りとせず、運用面についても検討を始める必要性を実感している。正に終わりは始まりである。

(堀 靖典・串本小学校 校長)

新しい統合小学校への思い

串本小学校の老朽化は、保護者の目線から見ても、かなりの老朽化が進んでいますので、今回の統合小学校の建築計画は、保護者の立場からしても非常にありがたく思います。また、将来起こるであろう地震・災害の対策として避難場所の機能を持つことと、校舎の耐震性は、串本町の建物には大事な意味を持つものに思われます。子ども達の学びの場としては、木造の校舎にするという計画である為、従来の鉄筋コンクリート造にはない木の暖かみが子ども達の学校生活において良い環境になるのではと思います。高台になり、住宅地域から離れていますが、新しい統合小学校は、地域の灯かりとして、交流の場として大事な役割を持った小学校になってほしいです。

(小寺 史朗・串本小学校 保護者代表)

プロジェクトへの想い

令和3年12月3日午前9時28分、紀伊水道を震源とするM5.4の地震が発生しました。最大震度は、御坊市で震度5弱。串本町での震度は3。橋杭小の全校児童は自主的に迅速に高台に避難できました。ご家庭での意識付けやこども園の頃からの訓練経験が生きていたと思います。ただ、帰校後の何人かの児童の青ざめた表情は未だに忘れられません。串本町の宝（世の中の宝）であるかけがえのない子どもたちの命を守り、一人一人の力を伸ばす、鬮野川小学校・橋杭小学校、串本小学校の伝統を引き継ぐ最善の学校が建設されることを願ってやみません。

(溝内 聡子・橋杭小学校 校長)

協議会に参画して

今回保護者代表として参画いたしましたが、長澤会長はじめ委員の皆様が我々の意見を本当に真剣に聞いていただきましたこと、大変感謝いたします。今後はこれまでの素案をベースに、まずは生徒たちの安全第一、そして地域の皆様が気兼ねなく利用できる、「つながる学校」を目指し、引き続き様々な新しいアイデアを取り入れながら、検討いただきたいと思います。今後ともよろしく願いいたします。

(畑下 晋一郎・橋杭小学校 保護者代表)

学校づくり協議会に参加して

今回、学校づくり協議会の委員として参加させていただいたことを大変うれしく思いました。協議会に出席する度に、「ちょっと小学校へ行ってくる」という感覚で、学校施設の利用や交流が出来るようになるのではとの期待が大きくなりました。また、防災の面でも協力は不可欠となるので、子どもだけでなく地域の方々のためにも、今まで以上に職員間のコミュニケーションをとっていきたいと思います。

(湯口 いづみ・くしもとこども園 園長)

本プロジェクトに参加して

串本小学校と橋杭小学校の2校が統合して、新しい学校をつくるということで、くしもとこども園保護者代表として学校づくり協議会に参加させていただきました。

最初は、軽い気持ちで参加しましたが、協議会に参加してみると大学の先生方や専門家の先生方がいらっしゃって、毎回とても緊張しました。「つながる学校」というテーマも決まり、子ども達はもちろん地域の人たちも含め様々な場面でつなぎ合える学校になってほしいと思います。

(慶 政樹・くしもとこども園 保護者代表)

つながる学校の意味

これまで公共施設の建設において、協議会や分科会、設計会議等でこれだけ時間をかけて関係者の意見集約を行い、基本計画・設計の策定をしたことがあるだろうか。新しい時代の学びを実現する学校とは？すべてが手探り状態からのスタートでした。長い期間、みなさんの熱い思いのつまった議論、本当にありがとうございました。

検討テーマの「つながる学校」は、こども、教職員、保護者、地域住民同士がしっかりと支え合い、一人一人の熱い思いのつながりが、全国のモデル校として、串本町のシンボル(拠点)として未永く愛される施設となる源となるのではないのでしょうか。

(濱地 弘貴・串本町教育課課長)

本州最南端串本町の学校から変化を・・・

新しい時代の学びを実現する学校施設を考えることは、既成概念を崩すという難しさはありましたが、それを上回る発見と面白さと喜びがありました。今回計画された学校は、「個別最適な学び」「協同的な学び」に誘う設えであり、子供も教師も豊かに学び合える学校になると確信します。「変化は小さいところから始まる」とは長澤先生のお言葉です。本州最南端の学校から変化を発信することができればと切に願います。

(坂本 善光・串本町教育委員会 指導主事)

新しい時代の学校建設にむけて

当初は、この学校づくり協議会の委員としての任を受けた時は、非常に責任を感じました。まずは、頭の中にある小学校という建物の固定観念をリセットすることからの始まりでした。この報告のあとも、建設を受け持つ担当課としての業務は完成される迄、続いていきます。新たな串本町の地図に残るこの施設の建設に関われたことに感謝し、つながる学校として、協議会の思いを持った新しい学校が、これまでの歴史を受け継ぎ、多くの児童が旅立ち、つながっていくことを期待します。

(浅利 淳・串本町建設課 課長)

子供だけでなく学校もみんな育てましょう

串本町役場の方、地域の方、保護者の方、学校の先生などとお話させていただいて共通することは、みなさん「串本町を愛していること」がよくわかりました。話し合いはとても活発で、毎回、会議時間が延びるほどでした。これだけ話し合ったのですから、きっと、素敵な校舎ができるに違いありません。しかし、校舎は創って終わりではありません。子供だけでなく、親も地域の人も校舎とともに一緒に成長し、日本一の学校になることを祈っています。

(毛利 靖・文部科学省アドバイザー・全国 ICT 教育首長協議会特別顧問)

新しい時代の学校教育が実現する場

長澤先生はじめ、設計、教育委員会、他学校職員の視点やご意見は、大きな学びとなりました。空間の心地よさや学びやすさ、どのように学び、どのような活動が行われるか…利用する人の事はもちろん、地域との連携や地形や自然との調和等、あらゆることを考える視点は、多様性が重視される現代社会において、学校教育を営む上でも大切なことです。新小学校は多様な学びを可能にする新しい教育デザインの場となると確信しております。

(金澤 有史・西向小学校 教頭)

新しい学びへの一歩

このプロジェクトに参加させていただいて、教育にはさまざまな見方や考え方があることを改めて感じました。新しく建築される校舎は、これまでとは違う学び方ができるので、どのような空間になるのか今からとても楽しみです。しかし、この空間を活用していくには、これまでの考え方や意識を柔軟に転換する必要があります。自由な発想で、私たちが今、想像していないような学びの空間を創り出していってくれることを期待しています。

(熊代 紀保・串本小学校 教諭)

つながる学校に願いを

このプロジェクトに養護教諭として参加させていただきました。視察や検討を重ねる中で、これまで過ごしてきた学校のイメージとは違った学びがたくさんあり、地域とのつながりを大切に考えられた町のシンボルであると感じました。可能性のいっぱいあったひろがりのある空間、心地のよい居場所づくり、人と人とのつながりを大切にできる、そんな学校で、子どもたちが健やかに育つことを期待しています。

(切畑 優子・串本小学校 養護教諭)

このプロジェクトへの想い

今回、自身の生まれ育った町に新しくできる学校の建築に携わることができたことを光栄に思います。教師としての目線で、串本町の子どもたちの様子をお伝えし、少しでもお力になることができたいと思います。町の未来を創っていくのは子どもたちです。そんな子どもたちにとって、この新しくできる統合小学校が、豊かな学びの場、安心できる場、そして、子どもたちの大好きな場所になってくれることを願っています。

(濱地 晃志・橋杭小学校 教諭)

本プロジェクトへの想い

今回、分科会の委員に選んでいただき、「学校づくり」について勉強することができました。これまで私自身、校舎や教室配置について、あまり深く考えることもなく働いてきました。委員になり、それを真剣に考えることで、それぞれの立場や考え方によっていろいろな思いがあることを知ることができました。微力ながらも関わったことで、新校舎の完成がとても待ち遠しくなりました。ありがとうございました。

(吉村 昌晃・潮岬小学校 教諭)

統合小学校のこれから

1回目の分科会に出席し、夢のある学校になるんだなぁと感じたことを思い出しました。今回学校建築に関わらせていただき、回を重ねるにつれて、地域とのつながりや防災の拠点になる施設になることを考えると改めて「学校づくり」の難しさを感じました。今後、さらに検討されていくと思いますが、この統合小学校から、これからの子供たちが故郷に帰ってきたいと思えるような、新しい地域づくりができることを願っています。

(富田 純世・古座小学校 事務)

令和4年度 新しい時代の学びの環境整備先導的開発事業成果報告書
「つながる学校」串本統合小学校

発行日：2023年3月16日

編集：串本町教育課（協力：株式会社教育環境研究所）

発行：串本町教育委員会

〒649-3510 和歌山県東牟婁郡串本町サンゴ台 690 番地 5

電話 0735-67-7260

URL <https://www.town.kushimoto.wakayama.jp/>